
まさかの転生物語

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの転生物語

【Zコード】

Z8690X

【作者名】

暁

【あらすじ】

犯罪に巻き込まれ、大事なものを守るために
自らを犠牲にし、死んだ主人公。

天命より前に命を落としたため、
彼女はこの世界への転生が叶わなかつた。

そうして転生したのは、異世界。

……ドラゴンに転生したようです。

大きなドリームであるお父さんやお母さん、

お兄ちゃん、お姉ちゃんに囲まれて、

まだまだ小さなドリームの主人公は突き進みます。

なお、残酷描写は保険です。

最初のほうは残酷描写を出すつもりはないですが、

おそらく、途中から出でてきますので。

あの日を懐かし（前書き）

すつゝい気まぐれに書いてみました。

人外生物が主人公の連載小説書いてみたかったんですね。

あの日を想ひ

守らなくては。この子達だけは、守らなければ。
私はどうなつてもいい。死んだつてかまわない。
だけど。だけどこの子達だけは……。

だから、逃げなさい。私のことなんて放つておいて。
早く、安全な場所まで行きなさい。絶対に振り向かないで。
イヤホンをはめて、まわりの音が何も聞こえないように。
聞いてはいけない。聞いたら狂つてしまふかもしねれない。
だから、何も聞かずに逃げなさい。

そして、ここには戻つてくるな。

私は、あなたたちさえ無事ならばそれでいい。あなたたちさえ日常に戻ることが出来たなら。

ねえ、どうして戻つてきたの？ どうして泣いているの？
暗闇の中での、ふと思ひ。

あの子達が泣いている。悲しそうに、辛そうに。

泣かないで。

重たい腕を必死で動かす。重たい瞼を必死で持ち上げる。
そして、口を動かす。

「…………」「、泣いて……の、ちびっ」「…………」

「つー 姉ちゃん！」

「えー？ 姉ちゃんーー！」

「こーの、泣き虫……おちび……ズガ……」

「ちび、じゃないもん！」

おいおい、泣かないで欲しいのに、どんどんと涙が溢れてるよ。
これは、動かしづらい私の手じゃ、拭いきれないな。

「い……から、泣くな……。……げる……」

泣かないで早く逃げて。早く、安全なところへ。

私は放つておいてかまわない。だから、早く逃げなさい。

「逃げない！ お巡りさん、こらもんっ！ も、すぐ、救急車も、
来るからー！」

「は、犯人も、捕まつた、よー！」

そか、この子達は大丈夫だね、警察がいるのなら。
でもね、おちびーズ、救急車は多分、無駄だよ。私は多分助から
ない。

致命傷を負うと痛みを感じないって本当なんだって、今実感して
る。

痛みを感じない。体の感覚が何も、何もないんだ。

分かるのは、傷口からどんどんと血が流れていく感覚、どんどん
と体から熱が消えていく感覚だけ。

「な……くな……て……。寧ろ……笑え？」

ねえ、だから最期に笑顔を見せて？ この世に、あなたたちの笑
顔を焼きついて逝かせて？

ああ、可愛い私の従妹たち。泣かないで、嘆かないで。

21年の人生は、良いものではなかつたけれど、私は幸せだよ？

だって、可愛いあなたたちを守れた。私が、あなたたちの未来を繋いだ。

私自身の未来はどうでもいい、どうせ死にたかつたんだから。だけど、あなたたちの未来だけは、守りたかつたんだ。

だからね、私は不幸じやないんだよ？

ああ、目の前が少しづつ暗くなつていく。音も遠くなつっていく。あの子達が泣いてる。ずっと、ずっと泣いてる。

だけど、私の臉に焼き付いているのは、最期に見た、あの笑顔。涙を流しながら、それでも私の要望に応えて微笑んだ、あの笑み。

もう、何も見えない、何も聞こえない。

深い闇に、墮ちた。

ようこそ死の世界へー！　目を覚ましてすぐにかけられた言葉は、これでした。

死の世界。つまり私は死んだ、と。まあ、それもそうか。あれだけ殴られ、刺され、斬られつてすれば死ぬだろうね。でも、目を瞑れば見える、あの子達の笑顔。涙を堪えて必死に微笑んだ愛らしい姿。

そんな、可愛いあの子達を守ることが出来たのだからよしとしよう、うん。

まあ、とりあえず。私は近くにいた人を捕獲し、声をかけた。

「とりあえず、いろいろと説明が欲しいです」「はいはーい！　じゃ、簡単に説明していきますねー！」

まず、ここには先ほど言ったように死の世界、死した人の集まる世界です。

普通は、天命に従い、人はこの地を訪れます。ですが、たまに天命に逆らい死した人がいるんですよ。

あなたのように。

普通、天命を果たし死した人々は、しばらくこの地で過ごし、輪廻の輪に戻っていきます。

ですが、あなたたちのように天命を果たさずに死した人たちは違います。

天命を待たずに死した人たちは、この世界に転生することが出来ない。

ですが、天命を待たずに死した人たちの中には、あなたのように望まずして死した人、あなたたちのような人たちもいますし、自ら死を選んだ人もいます。

その人たちを、みんな一緒に考えるのはいきません。

ですから、あなたたちのように望まずしてこの世界に来た人たちには、しばらく魂を癒してもらい、異世界に転生してもらいます。その際は、我々が絶対に幸せな生活になると保障し、そしてお助けしましょう。

だから、あなたはしばらくお休みなさい。

今はただ、その魂を回復させるために、眠りなさい。

三覚のは最悪です（前書き）

トランジスタの構造と動作

目覚めは最悪です

真っ暗。全部真っ暗。

その中に、ひびが入ったように、光が射す。
何だろ、そう思いながらもどんどんと襲ってくる睡魔に身を委ねる。

おそらく、まだ魂が回復していないのだろう、そう思いながらおぞらく。

だが、その眠りは長くは続かなかつた。

次にぼんやりと目を覚ますと、先ほどよりも見える光が大きくなつている。

これは何で。

とりあえず、触つてみた。硬いようで、硬くなさそうで……。

これつて、叩いたりすれば割れて、もっと光が入るんじゃね？
そう思いながら、少しづつソレを叩く。

お、お！ 予想通り、少しづつそれは割れて、徐々に光が射し込んで来た。

それはいいけど、眩しいな。

そうやってじぱりく叩いて、やつとソレは完全に割れ、空が見えた。

えつと、視界に大きく口を開くドラゴンが見えるんだけど、気のせいかな？

私、食べられる？ え？ もつお終い？ 早くね？

そう思つてみると、大きく口を開いていたドラゴンは、私の顔を

舐めて来た。

「ひぎやーっ……」

可愛くない声ですみませんね、これが地です。

とりあえず、これが夢落ちだと祈つて、今は眠ることにします。
。

うん、夢落ちじゃなかつたよ。でも、今はそのドラゴンも人の姿を取つています。

目の前でドラゴンから人になられては、夢じやないと信じざるを得なかつた。とりあえず、何て言つてるかは全然分からいけどね。そして、何となく実感。私は人間ではなく、ドラゴンに転生したようです。

まだ全身をしつかり見てないから分からいが、鱗に包まれた体や、鋭い爪、そして両親であろう一人の大きなドラゴンを見れば、自分もドラゴンだと何となく予想は出来るものです。

それにしても、この世界のドラゴン、つていうか私小さいな！
ドラゴンの子供が単純に小さいだけか？ 父や母であろうドラゴンは大きかつたしね。

私の普段の生活場所は、この広大な山の中、の母であるうのドラゴンの人態を取つたときの頭の上だ。

まあ、ふあふあしてて、暖かくて気持ち良いんだけどさー。

まだ、この人たちが何て言つてるか全然分からいし。

でも、たくさん愛情が注がれていることだけは分かる。だって、二人とも私を見る目はいつも優しくて、私を見るときはいつも笑顔だから。

まあ、今そんなことを考えていたって何も始まらない。とりあえず、眠たいから寝よつ。

転生を認めました

4歳になりました。最近、やつとお父ちゃんの言ひ方こねりが理解できるようになつて来ました。

だけど、まだ全然話すこと出来ません。何を言おうとしても、「ひぎゃー」や、「あやねー」とか、「きゅねー」としか発音されないのです。

「へしゃー！」

あ、体はあんまり大きくなつてないよ？ だつて、まだお母さん
の頭の上で暮らしちるもん。殆ど。

「エーデルフィア、今日は山頂に行つてみる？」

「えむーー！」

行くー！ 本当はそつ答えたいのだが、やはつまともな発音はされなかつたか……。そろそろ普通に話がしたい……。

あ、エーデルフィアってのは私の名前みたいだよ。言葉も理解できなかつた頃から、ずっとこの言葉は発せられてたからね。

「えむー、えむーるるるー！」

「わうんなに山頂が楽しみ？ エーデルフィアは可愛い子ね！」

「うん、楽しみだよ。だつて、山頂からはじの山がきれいに見渡せるもの。

そうして到着した山頂。そこでは早速私が思い切り叫んでいた。
やつはーー！」

「 もゆ るー つ ……」

あつはつは、やつぱつこんな感じにしかならないか。でも、私の下でお母さんは面白そうに笑っていたよ。

「 ハーテルフィアつたら、元氣いつぱい」

「 もゆ る、もや るるー」

だつて、山が見渡せるから楽しいもん！ そうしてみると、私たちのいる場所に、一匹のドラゴンが飛んできた。
大きな青色のドラゴン。あれ、お兄ちゃんらしいです。

「 母さん、ハーテルフィア」

「 サーファイルス。よくここが分かつたわね」

「 ハーテルフィアの声が聞こえたからね。ハーテルフィア、母さん
に隠れてないで、姿を見せておくれ？」

つて言つてもね、お兄ちゃんのドラゴンの姿、大きすぎて怖いんだ。大体、人態でも十分私から見れば大きいのに。
だからせめて、人態を取つて？ 怖いよう怖いよ。

「 もゆー、もゆ るう」

「 あれ？ 僕、怯えられてる？ 何で？ 何で？ ハーテルフィア、
俺、怖くないって」

「 ……ドラゴンの姿が怖いんじゃない？ あまりにも大きいから。
私たちも、ドラゴンの姿をとつたら大体避けられるからね」

うん、確かにお父さんもお母さんも、ドラゴンの姿をとつたらまづ、逃げます。だつて大きすぎて怖いもん。

私、まだまだまだ小さいんだよ？ お母さんの髪に隠れられ

るせび小せいんだよ？

その状態で、普通のドラゴンのカタチのお父さんやお母さんは怖いに決まってるでしょう？ 踏み潰されそ�で。

「えっと、これでいいの？」

お兄ちゃんはもう三つと、ドラゴンから人間へと姿を変えた。うん、それならオッケーです。

「あむる」

「ヒー・デルフィア！ ああ、相変わらず小さくて可愛い！」

「あむる、あむるあむるー」

お兄ちゃん。小さな体で羽を広げ、パタパタと飛んでお兄ちゃんの頭に移動する。お兄ちゃんの髪、短くてつんつんだから、お母さんの髪に隠れてるときほど気持ちよくないんだよね。
でも、優しいお兄ちゃんだから好きだよー。

ちなみに、お兄ちゃんの見た目年齢は、大体高校生くらい。実年齢は知らない。教えてもらえないし、まともに話せない今は聞けない。

でもまあ、どうでもいいか。みんな優しいしー？

「あむるあむるー」

お兄ちゃん大好きー。

「あー、ヒー・デルフィアは本当に可愛いいなー」

「あー、そろそろ山を下りましょつか。サーファイルス、ドラゴンに戻つて、お母さんたちを乗せて行つてくれる？ ヒー・デルフィア、

おゆれんのじいわくはまつてねこで

「阿莫諾—！—！」

お兄ちゃんが大きなドライゴンに戻るのならば、今すぐに…！　とりあえず、お母さんの髪に隠れて、大きなドライゴンの姿を見なくて良いように丸まつておこう。

「エ、エーテルフィア……」「きゅるー」

私はお母さんのところへ戻ると、しつかりとお母さんの髪を掴み、落ちなごみにさる。

そして、私がしなくなると、お兄ちゃんはすぐにはテコンの姿に戻つたらしい。お母さんがその背に乗り、お兄ちゃんは飛んだ。お兄ちゃん空飛んでるよ怖いよ。お兄ちゃん大きいよ怖いよ。

それからしばらく経たずに、私たちはねぐらである洞窟へと戻った。
おとーさん!!

「お? お帰り、エイシェリナ、サーファイルス、エーデルフィア」

そこには見えた田20代前半の赤髪の男。これ、お父さん。名前はフォンショベル。あ、エイショリナって言つのはお母さんの名前ね。お母さんも同じく、20代前半にしか見えない。ちなみに、髪の色は青。

「阿々ハ、アタマノハシマ一アタマ」

私はそつやつてきゅるきゅる鳴きながらお父さんの頭へと移動する。あ、美味しいぞうなにおい。

「美味しいやうなこないだらうへ。 今日はつまに肉を手に入れたから
な」

そう言つてお父さんが見せるのは、美味しそうなお肉を使った料理。 こんがり、いい色に焼けてるね。 美味しそうだ。
そんな意味を込めてきゅるきゅる鳴くと、お父さんは嬉しそうに微笑んだ。

「うむ、Hーテルファイアがそう言つならば、今日の料理は中々のものだな」

「本当に美味しいやうなこない。 ね、フォンシュベル、みんなを呼んでも大丈夫？」

「ああ、みんな散らばつてるだらうが、頼んだぞ。 Hーテルファイアはどうする？ お母さんと一緒にみんなを呼びに行くか？ お父さんといるか？」

「やあ」

お父さんといる。 そう言つ意味を込めて、お父さんの髪を掻んだ。
お父さんは微笑む。

「よし、お父さんと一緒にいるんだな。 あー、Hーテルファイアは可
愛すがだ」

「やあ、やあ」

お父さん好きー。 ドリゴンの姿をとらなければ、ね。 とりあれ
ず、お母さんたちが戻つて来るまではお父さんに甘えていよつゝじ。

「ん？ Hーテルファイア、羽が汚れてるぞ？ ちよつと待つてなさ
い」

その後、自分の頭から私をとり、抱き上げたお父さんは告げる。

いつ汚れたんだろう?

それから濡らした布を持ってきたお父さんは、優しく私の羽を拭いてくれた。はわわ、気持ちいいよ……。気持ちよすぎて、寝ちゃう……。

「うーん、落ちないなあ。……洗うか?」

え！？

「中々落ちないし、汚れたままだと染み付いて取れなくなりそうだ
から、洗おう。な？」

はい、イヤです。人間の頃はお風呂は好きだつたけど、この小さな体でお風呂はおぼれそうで怖いです！

の用意をしていたよ……。私をテーブルの上に置いて。
少しずつ、逃げようかな。……うん、テーブルの下を見ると怖い。
高い。でも、逃げなくちゃ……。

落ちた。うまく羽を広げ切れなくて、落ちちゃった。

「エーデルフイア！ 何をしているんだ、危ないだろ？」

あわわ、お父さんが怖いよ。思いつきりテーブルから落つっちゃったからね。思いつきり体打つやつたからね。痛いよ。

「那我一、那我一、那我一、那我一、那我一、」

「ああもう、痛かっただろう？」まだ小さこんだから無理をするんじゃない

「九」

「みんなさー、お父さん。

「ちゃんと反省したか？ なら、お風呂に入らうか。お風呂に入れ
ば、気持ちよくて痛いのも忘れるや？」

「阿莫？」

なぬ！？ お風呂から逃げるために落ちて、結局お風呂に入らなくてはならないのか！ で、でも痛くなくなるなり……。怖いけど。あ、でもお湯に浸かってる間はあつたかくて気持ちいいなあ。

でも、上からお湯かけないで！ 上からお湯をかけられると怖い！

「也々一。」也々也々一。」

上からかけられるのは怖いって！

「よし、きれいになつてゐな。どうするエーテルフィア？」もう少しあ湯に漫かつておくか？

「阿莫...」

漫かつておく！ そんな意味を込めて鳴く。だつて、温かくて気持ち良いしさ。しかも、つづきの恐怖と気持ちよさで、痛いのびつか行つちやつたしね。

「ただいまー。フォンシユベル、エーデルフィア」

「 もう いー 」

お母さんとお兄ちゃん、そしてほかのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが帰つて來た。私は急いでお湯から抜け出し、飛んでお姉ちゃんたちの下へ向かう。

「 わわー！ お風呂入つてたんだね、びしょびしょ。ほり、まづは体拭こうね」

これを言つのは一番上のお兄ちゃん、カーヴァンキス。そして、私が飛びついたのはその妹、お姉ちゃんのオースティアだ。

あ、もちろん二人とも人態取つてるよ？ ドラゴンの姿だと私が寄つて来ないから、逃げるから。

乾いた布で私の体に、鱗を伝つ水をきれいに拭つてくれるカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん。

その後は、みんなでご飯だ。みんなは手づかみか、スプーンやフォークつぽいもので食べているが、私はまだこの手で上手に掴んで食べられないで、そのまま皿に盛られた料理にかぶりつく。

まあ、お父さんもソレが分かつてゐるから、私のご飯は食べやすいものばかりと考へて作ってくれるんだよね。お父さん大好き。はぐはぐとかぶりつく肉。肉美味しい。でも、野菜も美味しいんだよ？ ドラゴンは肉食で野菜は食べないって言つ勝手なイメージがあつただけに、おかげで野菜が出たときはびっくりしたけど、美味しいからそれでよし。

「 皿いか？」

「 きゅー！」

「 うん、美味しい」

「 今度調理方法教えてくれ」

「あ、俺も」

「フォンシユベルは本当に料理好きよね。私が料理する暇がない」

あはは、お母さん、料理やめて。前、頭の上からお母さんの料理見てるとき、本当に怖かつたんだから。

よく分からない調味料を大量にいれるは、その辺の加減を知らないは、何かを焼けば絶対に焦がすはで。

確かあの時は、お兄ちゃんたちが帰つて来た瞬間に飛びついでつたんだつけ。で、お兄ちゃんたちの頭の上で丸まつてた。

「げー!? お母さん何してるのセー!? ハーテルフィアが怯えてるー!」

「あーり? どうしたの? お母さん怖くないでしょ?」

「……ああ、この意味不明物体のせいが。お母さん料理やめて。怖わざ」

そのおかげでお母さん、よつぱんの「じがない限り料理をしなくなりました。最近ではお母さんの料理を避けるために、サーファーお兄ちゃんやカーヴお兄ちゃんが料理を覚えるようになつた。

おかげで、あの黒魔術的な料理を見る」とは無くなつたよ、安心。

「美味しかつたー。おとーせんじゅうやーせ」

「きゅきゅーーー」

ホント、美味しかつたなあ。お父さんの「飯は美味しいから好きだな。

「セ、セ」飯も食べたし、ハーテルフィアはそろそろ寝なくちゃね。いっぱい食べていっぱい寝て、大きくなりうね?」

「あゅー!」

大きくなるなら寝る！ いっぱい食べていっぱい寝る！
そうして私専用の小さなベッドに飛んで下りた私は、そこに置か
れたやわらかい布の上で、きれいに体を丸める。気持ちいいー。
よし、眠くなつた、おやすみなさい。

狩りに行きましょ

10歳になりました。やつと日常生活で困らないくらい話せるようになりました。いやいや、お父さんたちにはかなり苦労をさせたなあ。私が中々話せないから。

でもまだ、やっぱり体は小さいんだよねえ。未だに私の生活の場のメインはお母さんの頭の上だからね。でもいいの、楽しいから。私の考へることが、やつと伝えられるようになつて嬉しいから。

「エーデルフイア、今日は何が知りたい？ 僕たちが何でも教えてあげるよ」

「んとね、そつやつて人間の姿をとる方法が知りたい！」

ちなみに、しゃべれるようになつてからの私は、とにかく質問攻めだ。お父さんに聞き、お母さんに聞き、お兄ちゃん、お姉ちゃんに尋ねまくりだ。

あれはどうなつてるの？ あれはどうしてあなるの？ どうして？ どうして？

小さな子供特有の興味の持ち方で、毎日を質問と回答の日々になつていてる。

「エーデルフイアが人間の姿を取るのは、まだまだ無理だよ？ これは100を超えたあたりから、自然に分かつてぐるものだし」「そーなの？ うー、残念ー」

人間の姿を取れるのならば、練習しても人の姿になりたかったのにな。……でも、今の私が人になつたら、何歳くらいに見えるんだろう？ 幼児？ 小学生？ どちらもイヤだわー。

でもまあ、今はまだちびあらびドリフンでここや。そのまづがお母さんの髪に隠れられるからね。

「ほり、おこでヒーデルフィア」

そうしてお母さんに呼ばれた私はお母さんの髪の中に移動する。パタパタ、羽を動かして移動した。

お母さんの髪の中つて落ち着くんだよなー。小さい頃からずっとじいばつかりだからねー、あはは。

「ちよ、お母さんばつかりヒーデルフィアと一緒にばずるこつて。ヒーデルフィアおいで。一緒に狩りに行こうっ。」

「えぬー?..」

あ、しまつた。つい普通に鳴いた。でも、狩りは行きたい！ 行きたいよー。

「ほーら、行きたいならおいで。外に出て、俺の背中に乗つて」

それと、お兄ちゃんたちのドラゴンの姿もやつと怖くなつたよ。お父さんたちはまだ大きすぎで怖いんだけどね。

その後、外に出たカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、その上にお兄ちゃんたちが人態のまま乗り込む。そして私は、お姉ちゃんの頭の上だ。

そうして私たちが乗り込むと、カーヴお兄ちゃんは大きな羽を広げ飛び立つ。おお、地面がよく見える。

「ヒーデルフィア、危ないから身を乗り出したらダメだよ」「つて、言つてるそばから飛ばされそだよ。ヒーデルフィア、ち

みつと抱き寄せるよ」「ああ、ああああ……」

鳥を乗っ出して下を見ていた私。その結果、飛ばされかけたらし
い。サーファお兄ちゃんが私を抱き寄せてくれた。うん、これで飛
ばれないね。

抱き寄せた後のサーファお兄ちゃんが真剣な顔で注意してくれるか
ら、ついつい普通に返事せずに鳴こちやつたじゃんか。

「怒つてないから顔を見せて？ 大丈夫だから」「さあー

あわわ、本当に怒つてない？ 怒つてない？ 怖いよ。怖いと、
ビクしても普通に話せずに鳥を抱きあげりゃうんだよね。

「怒つてないって。だからね？ ほり出でっこで」

「さあきゅー？」

本当に？ そう尋ねたいのだが、話せなかつた。鳴き声で尋ねるこ
ととなるが、サーファお兄ちゃんはあつせりと理解してくれた。

「怒つてないよ。でも、今度からは『氣をつけ』ね？」

「さあー。」

なら、大丈夫、かな？ でもまだ怖くて話せないんだけどね。で
も、もう少ししたら恐怖も消えて、話せるようになる、と思つ。

そうしてサーファお兄ちゃんに抱き寄せられたままでしまく飛
ぶと、いつも狩場にしている場所にたどり着いた。

「や、やつを下りてくれ。俺も人態を取る」

そうしてカーヴお兄ちゃんも人態を取ると、獲物探しの時間だ。
とりあえず、私はお姉ちゃんの頭の上だが。

「エーテルフィアはここ、お姉ちゃんの頭の上。危ないから勝手に動いたらダメだからね」

「うん！」

お姉ちゃんから離れると危なくない？ 私、お姉ちゃんたちの使
う魔法？ 魔術？ まだ全然使えないんだから。

「お、いたいた。ティア、エーテルフィアを頼むぞ。サーファ、行
くか」「ん。エーテルフィア、何があつても、絶対に、ティア姉から離れ
るんじゃないよ？」

そこまで区切りながら言わなくても。離れたら危ないから、き
んとティアお姉ちゃんと一緒にいるつて。

私、たつたの10年で死にたくないよ？ 前世でも21年しか生
きてない、ただの若輩者だつたんだから。

「よし、会図をしたら頼むぞ」

「おつけ」

「…………、GO！」

カーヴお兄ちゃんが言つと同時に、サーファお兄ちゃんが魔法だ
か魔術だかを放つ。威嚇つてヤツかな？

そして、獲物がそれで怯んだ瞬間にカーヴお兄ちゃんが飛び込ん

だ。おお、かつこい。あつという間に一匹仕留めた。

「きゅ？」

つてあれ？ いきなり視界が動いた。……さつきまで私たちのいたところがお兄ちゃんの放った魔法で真っ黒けです。

そしてその真っ黒けの地面には、何かもう一匹獲物がいた。……つまり、私たちはその獲物に襲われかけていたと。それに気づいたティアお姉ちゃんが避けて、お兄ちゃんの放った魔法に焦がされたわけか。

うん、びっくりした。

「大丈夫、エーテルフィア？ いきなり動いたからびっくりしたでしょ？」

「きゅ、きゅう……」

お？ うんと答える予定が、鳴いて答えるになっちゃったぞ。相手びっくりしてたんだね、私。

「でも、大きいのが獲れたから今日はいいのが食べられるよー」「きゅきゅー？」

なぬ！ 何ですと！？ いいのが食べられるのは歓迎でしょう！

「お、機嫌は戻つたみたいだね。なら、帰ろつ。ほら、背に乗つて」

そうしていると、いつの間にかお兄ちゃんが人態を解いて、ドラゴンの姿に戻つていた。私はしつかりとお姉ちゃんの頭の上に乗り、髪に掴まる。

それを確認したのかどうかは分からぬが、お姉ちゃんもドラゴ

ンの姿となつたカーヴお兄ちゃんの背に乗つた。

「ふふ、帰つたときのお父さんの反応が楽しみだな。

「おお！　いいのを捕まえてきたな。今口は『駒走だな』

帰つて、獲物を見せたときのお父さんはすこかつたよ。目を輝かせてお兄ちゃんから獲物を受け取つてた。

今日は本当に『飯が楽しみだ。

そして、帰つて來た私、現在お母さんに捕まつてます。

「お帰りなさい、エーデルフィア」

「お母さん、私たちには？」

「お帰りなさい、エーデルフィア」

「おお、お帰りの挨拶が私限定。つまり、これはこっちに来い」と、
そういふことだね。

「きゅう！」

「んちよ、よしょ。羽を広げてせっせと飛び、お母さんの下へ向
かう。

「お帰りなさい、エーデルフィア。あなたたちもね、サーファイル
ス、オースティア、カーヴアンキス」

「おかーさんただいまー」

「エーデルフィア、怪我は無い？ 大丈夫？」

「大丈夫だよー、お兄ちゃんたちが守ってくれるもん」

だから、大丈夫だつて！ そんなに強く抱きしめないで…！ 痛い、痛いから！

「あゅ、あゅあゅ るーーー！」

咄嗟のときは普通に話せないから、それで悟つて離して！

「お母さん、エーテルフィア、痛がつてない？」

「あゅー。」

分かつてくれた！ 助けてお兄ちゃん、お姉ちゃん！

「あら？ 大丈夫でしょ？」

「きゅ……きゅー……」

最早話す余裕もない時点で氣づいてもらいたいかな？ お母さん。痛い痛い痛い痛い。

「痛がつてる！ 痛がつてるからーーー！」

「ああ、ゴメンねエーテルフィア。さ、あなたはお昼寝の時間だから、休もうね」

お昼寝？ 狩りについて行つたら、絶対に帰つてきてすることはお昼寝だよね、疲れないのに。でも了解、きつちり寝ます！ 大きくなるためにもしつかりと休みます！

そうして、昔と比べて少しずつ大きくなっている私専用のベッドに移動し、きれいに丸くなる。

じゃあ寝るけど、『飯の支度が整つたら起こしてよー』馳走楽しみなんだからね！

ちやんと起^ひされたよ。つて言^{いつ}か、いいにおいが漂^{ひら}い始^めめぼ
んやつと皿^{さら}を覚^{おの}まし始めた^り起^ひされた。『はーん！

「H—デルフィア、いいにおいがしてるだろ?」「飯^{ごはん}だよ」
「うん! こ^こにおい!」

肉^{にく}の焼^やけた美味^{うまい}しそうなにおいが漂^{ひら}てるねー! うん、ぱつち
り皿^{さら}は覚^{おの}めた。

「おはよひ、H—デルフィア。よく眠^ねれた?」
「こ^こぱい寝^ねたー! お腹^{はら}空^{うつ}いたー!」

「のいいにおいには逆^{さわ}らえない! 早く食べよ!」
そうして私がテーブルの定位置につくと、お父さんとお母さんが
微笑み、スプーンとフォークに手をつけた。
食事開始の合図ですね、分かります!!

「ただきます!!

皿^{さら}の前に置かれた、こんがりと焼^やけた肉^{にく}に思い切りかぶつつく。
うん、すっごい美味しい!

だが、そのままかじるのでは、骨^{ほね}に付いた肉をきれいに食べれる
ことが出来ないぞ! それが悔^{うらやま}しい!
が、だがね! 私が自分できれいに食べよ^うといても、ダラゴン
の手^てと爪^{つめ}じやきれいには取^とれないのだよー! 悔^{うらやま}しいー。

「H—デルフィア、貸^あして! うん。きれいに取^とつてあげる」
「お姉ちゃん! お願い!」

お姉ちゃんのありがたいお言葉に、私は横に座るお姉ちゃんに皿^皿と肉を手渡す。きれいに取つて！ きつちり食べる。

……まあ、私はドラゴンの姿だし、骨も食べるんだけど、肉は肉。骨は骨で別に味わって食べたいんだ。

「ほら、きれいに取れた。でも、骨も残さず食べなきゃダメだよ？」

「これも、尊い命なんだからね」

「うん！ ゼーんぶ、ありがたく、美味しい食べるよ！」

私たちは、常日頃から命を喰らつて生きているのだから、それを忘れてはならない。私たちが食べているこれも、尊い命。私たち生き物は皆、命を喰らうことと、自らの命を繋げているのだから。

そうしてきれいに取つてもらつた肉を食べた後は、骨だ。骨はこの両の手でしつかりと掴んで、がじがじと齧る。歯めば歯むほゞ味が出る。最高！

そして食後。…………まだ寝ないよ！ お昼寝したもん、『』飯前に起きたばっかりだもん！

「そ、ホールフイアは…………」
「寝ないよ！」

先に釘を刺すべし！

「さつき起きたばかりだから眠くない！ だから寝ないからね

「でも、寝ないと大きくなれないよ？」

「うー！ で、でも眠くないもん！」

「横になつてるので、眠たくなれるかもよ～ だから寝ようね

「やー、眠くない！」

早く大きくなりたいけど、寝れないもん… ま、まあ前の狩りのときは帰ってきてお昼寝して、それからすぐ「」飯食べて、その後すぐに寝ちゃったけどね。

でも今日は眠たくない！ この間は「」飯のときもいつもしてたから寝たけど。

「ここから寝よしね、Hーテルファイア」

「きゅうつ…！」

って、こきなり持ち上げないでお父さん… まだ寝ないって…。

「あつはつは、相変わらず可愛いい鳴き声だ。でも、成長のためには寝なくては」

ぐう！ 可愛いとか褒めても、それでも寝ろとのたまうか！ で、でででも、ここできちんと寝れば早く大きくなつて、人態を取るのも早くなるかな……。

……よし、今はベッドに丸まつておくだけ丸まつておいつ。それで眠たくなればよし、眠れなければ泣き付けばよし…。

結果、私はお父さんに抱えられたままでベッドまで運ばれ、下ろされた。

「ほり、ここ子だから寝よしね

もう！ 仕方あるまい、眠れるかどうかは置いておいて、とりあえずベッドで丸まつじやないか。

人間は怖いです

さあるひ？ そんな声で鳴きながら私は田を覚ました。結局あのまま眠れたみたいだね。

つてあれ？ まだまわり暗いね。まだ夜？ そう思いながらベッドを出て、近くで眠っているであらひお父さんたちを探す。

「 さあるひ… さあるー？」

つてあれ？ いない。もう起きてるの？ まだ暗いよ？ お父さんたちってこんな早くから起きてるの？

「 さあひ、さあひ」

「 ん？ ハーテルファイア、もう起きたのかい？ 起きるこままだ早いよ、もう一度お休み」

鳴きながらお父さんたちを探していると、案外早く見つかった。結構そばにいたよ。

「 ほひ、ベッドに戻るひ。しつかり寝て、大きくなひ。な？」

「 さあ、さあー」

「 ひ、すつと寝てばっかりだよ。でも大きくなれるひと言ひ葉には勝てない……。早く大きくなりたいけど、寝てばっかりなのも……。

そう思っている間に、お父さんは私専用ベッドへと運ぶ……この籠ベッドから連れられるのはいつの話だらうな。

最初から比べれば少しずつこの籠ベッドは大きくなつてゐるけど、どこまで大きくなるんだろ。

「いい子だから寝ようねー」

結局寝かされるのが、面白くないな。
でも、ベッドに戻つて丸くなれば簡単に眠れるのが幼さ故か……。
まいか。

としあえずくると丸まい、田を廻る。眠れるかどうかは別として、こうしてお父さんが安心、とこりか何も言わなくなるならそれでいいよね。

さあ？ いつの間にかまた眠つてたみたいだね、びっくり。寝
れないと思ってたのになあ。

あたりを見渡すと、もう明るい。よし、朝だね。これで起きても
ベッドに戻されないよね。

「さあ、おかーやん！」

「おはよう、エーテルフィア」

「あ、起きたんだエーテルフィア。今日は何をする？」

お兄ちゃんたちもお母さんと一緒にいたんだね。今日は何を教え
てもらおうかな。

昨日の肉が残つてるはずだから、今日は狩りには行かなくていい
だらうし。だから、うーん、どうしようかな。
……！ そうだ、うつようひとつ。

「食べられる草と、食べちゃいけない草の見分け方教えてー

分かれば、草を摘みに行くだけなら私一人でも行けるようになる
からね。いつもでもお兄ちゃんたちと一緒にじゃ、効率悪いし。

「よし、ならもう少ししたらこいつも草を摘みに行く場所に行こう。

「うん！」

わーい！ 鳴きながらお礼も込めてお兄ちゃんたちの周りをふよふよと飛び回る。そんな私を見つめるお兄ちゃんたちの顔せ本当に優しい。

あはは、お兄ちゃんたち大好き。そう思いながら飛んでいると、不意にお母さんに捕まつた。え？ 何？

「エーデルフィア、あの子達がいるから大丈夫だとは思つけど、気をつけのるのよ、いい？」

「うー、もう帰る人があったり、おやれん呼ぶね」

多分大丈夫だと思うけど。

「何かあつたら、大きな声で呼びなさいね。ドラゴンになって、エーデルフィアたちを助けに行くからね」

分かつた、大きな声で呼ぶよ！ おかげさんつ！ つて呼ぶからね。そのときは助けてよ。

それからしばらくして、私はドラゴンになつたお兄ちゃんに乗り込み、いつも草を摘む場所へと向かう。

緑！ 緑！ 緑！ きれすぎる！ いつ見てもきれいすぎだ！

お兄ちゃん、よろしく！

「まず、これ。絶対に食べちゃダメだよ。食べたら死んじゃうか

」「う

「ふえー?」

「俺たちには大して害はないけど、Hーテルファイアは小さだから、簡単にこの毒にやられる」

「」「怖い……」

「この毒にやられるのは私だけですか。ぐうー

「まあ、これはすぐに分かるから大丈夫だよ。ほり、ここ見て」
カーヴお兄ちゃんはそう言つて、葉を裏返す。そこには黒い毛？のようなものが生えていた。

「これはこの辺の草で唯一、裏側に黒い毛のよつなものが生えてるんだ。だからすぐに分かる」

な、なるほど……。それは簡単でいいかもしれない……。

「なら次、これは食べられるけど、こいつちは食べられない。そつくりだから間違えないようにね」

「ん、んー？ どう違うの？ 全然分かんないよー」

そう言つて見せられた草は、全く同じものにしか見えなかつた。じつくり見せてもらつても、どう違うのか全く全然分からない。お兄ちゃんたちからその草を両方とも受け取り、見比べてみる。
……あれ？ どっちが食べてもよくて、どっちがダメなんだっけ?
あれ？ あれえ？

「お兄ちゃん、ビーフちが食べてもいいんだつけ？」

「右に持つてゐるほうが食べても大丈夫なほう。左に持つてるのは、絶対に食べないよ！」
「いい？」

「はーーー！」

なるほど、右に持つてゐるほうは食べても大丈夫で、左に持つてゐるのは食べたらダメなのか。うん、見分けがつかない。

「うーん、じつくり見ても全然分からぬぞ？　お兄ちゃんたちはビーフやつて見分けをつけてるんだろ？」

「お兄ちゃんたちはビーフやつて見分けをつけてるの？　全然分かんない」

「ん？　見てもわからんないよ？　これはにょいで区別するの」

説明はお姉ちゃんがくれました。にょい？　にょい……。

「べつねやつーーー！」

た、食べられないほうの草のにおいが恐ろしいほどやばい！　すつごこくせこ！　ありえないにおいだ！

そうしてみると、不意に私たち以外の声が耳に届いた。その瞬間、カーヴお兄ちゃんは人態を解き、エラゴンの姿に戻つて私たちを庇う。

何か話す声だね、何で言つてゐのかはよく分からぬんだけどさ。

「お、おー……、じーじーだよ……」

「知るかよ！　でも、早く戻らないと……」

「じーじー、竜神様のいらっしゃる山だぜー？　無礼にならないうちに帰らなくちゃ」

「なら、帰るための道を探して来いよ。」

……？ 竜神様？ つていうか、迷子？

「しつ。エーデルフイア、喋らないで」

「きゅ？」

「人間は絶対に敵ではないと言い切れないの。今からお兄ちゃんが追い払うから、それまで黙つていて」

人間って、敵なの？ 微妙なところなのか。そうしていると、さすがに大きなドラゴンの姿に戻っているカーヴお兄ちゃんの存在に人間たちが気がついたようだ。

「りゅ、りゅりゅりゅ、竜神様！ も、申し訳ございません、迷つてしまいまして！！」

「町へ戻るなら、あっちの道だ。早く帰れ」

カーヴお兄ちゃんはそう言つて、ある方向を指差す。あっちに町があるのかあ、行つてみたいなあ。

そうしている間も、お兄ちゃんは人間たちが町へと戻るのを待っていた。……あれ？ 人間と田が合つた？

「ち、小さなドラゴン！？」

「きゅ！？」

あ、あわわ。思いつきり目が合つた。ガン見された！ あわ、あわわわわ。げ、限界！

「 ぴぎやーっ！」

思い切り叫んじゃったよ。だって、あんなにしつかり見られると
怖いじゃん！

「とつとと帰れ。弟妹たちに手を出したらそのときは……」

やうやつて私が叫んでお姉ちゃんにしがみ付いたからか、カーヴ
お兄ちゃんのまとう雰囲気が怖くなつた。あわわわわ。

お兄ちゃん怖い。人間怖い。お兄ちゃん怖い。人間怖い。

「　おかーやーんつー！」

ぱわり。

呼ぶと同時に羽を動かす音が耳に響いた。ピギヤーつ、お母さんの「ドリーン」の姿は大きくて怖いよう！

お母さんはそれに気がついてくれたのか、私たちの目の前に下りると同時に人態を取つた。人の姿になつたお母さんにて、とりあえず飛び込む。

「おかーさん！」

「エーデルフイア！　何？　そこの人間が何かしたのね、覚悟なさい」

はわわ、お母さんも怖いよう。でも、今さらお母さんから離れるのはもつと怖いよう。そんなこんなで、私はお母さんの頭の上でしつかりと髪を掴んでいた。

ちなみに、その恐ろしいお母さんを止めたのは、お兄ちゃんたちだつたりする。

「お母さん、ちょっと田が合つただけだから手加減してよー？」

「何かされたつて言うわけじゃないの。なら、この姿で一回ずつ殴

るだけで許してあげる。その後は町に戻してあげるからね

「い、一応手加減されてる、のかな？一発ずつ殴つただけで許すつて言つてるし……。ってあれ？そもそも、その人間悪くないんじゃね？」

「さゆ、さゆー……」

それを訴えるために、少し強めにお母さんの髪を引っ張つてみた。でも怖いからうまく喋れない。

「ああ、大丈夫だからねエーデルフィア。何も怖くないから」

いやいやいや、そう意味じゃなくてですね。でも、今の私じゃ普通に話せないしなあ。

うん、「ゴメンね人間さん。私じゃ、このお母さんを止める」とは無理です。

結局お母さんは私を頭の上に乗せたままでその人間を殴りました。一発、グーで一撃入れました。

思い切り振りかぶつて殴るものだから、私が落ちるかと思つたよ。咄嗟に髪を掴んだから落ちなくて済んだんだけどね。

「よし、これでいいわ。後はさつと山を下りなさい」

い、痛そう……。殴られた人間の頭には、きれいなたんごぶが出来上がつていた。「ゴメンね、人間さん。

「町はあつち。」うちに来ないでくれる？ 可愛いこの子が怖がるから

「は、はははい！　申し訳ありませんでした、龍神様」

と、とりあえず早く目の中から消えてよう。目が合ひそいで怖いんだよう。人間大きいから怖い！

目に涙を滲ませ、人間が見えないようお母さんの髪にしつかりと頭をつけていると、その間に人間は山を下りたらしい。お母さんが頭の上から私を抱き下ろした。

「もう大丈夫だから。ほら、人間なんていないでしょ？？」

言われてずっと瞑つていた目を開く。うん、何もいね、よかつた。

「エーデルフィア、泣いてたんだね。可哀想に」

「きゅう」

お母さんに抱かれた私にお兄ちゃんたちは近寄り、私の目尻に光る涙を拭ってくれる。ありがとーお兄ちゃん、好き。でも、転生して初めて人間を見たけど、この小さなドラゴンの姿で人間を見ると、本当に怖いな。

今日は人間の姿を取つたお兄ちゃんたちがいてくれたから怖くなかったんだけどさ、私一人で、この姿であつたら絶対に泣いて帰るね。

「また人間が来ないとも限らないし、今日は帰ろう。エーデルフィア、お母さんと一緒にいてね？ 危ないからお母さんから離れたらダメだよ」

「きゅ、きゅう……」

ダメだ、まだ怖くて普通に話せやしないや……。この、怖いとき

とか咄嗟のとおり普通に話せなくなるにつれて、何とかなりなうことかな。

いつもながらも、私はお姉さんの頭の上で、デリバリーの姿のお兄ちゃんの背に乗り、洞窟へと帰郷するのであった。

竜神つて何ですか

お兄ちゃんの背に乗つて洞窟に帰つて来た私たちだが、帰つてからの私は完全にお母さんの頭の上だ。飛んで逃げようとしても、何故かすぐに捕らえられるのだ。

「お、お困る?」

いいから、エーテルフィアはお母さんのそばにいてちょうだい」

한국언어

何でかな？ どうしてかな？ どうしてお母さんまでさしつけて私を捕獲するの？

何となく危険を感じるから、お父さんとのJINはでも逃げたいの
に、お母さんは逃がしてくれない。

「お母さんばかりエーテルフィアを抱いて、ずるいよ。エーテル
フィア、じつちおいで」

そうしていると、救い主が現れた。お姉ちゃん！

「也々一々！」

「つて、喋ってくれなーの？」 ああ、お母さんの無理の訴えが怖かつたんだね

「也沒...」

怖かつたよ、お母さんの頭の上から飛び立とうとするたびに捕獲の手が伸びてくるし、どうして捕まえるのか聞いても、そばにいて

だから、お姉ちゃんに呼ばれて飛んで、お母さんと一緒に捕まらなかつ

たのはよかつたよ。

そういえば、お姉ちゃんに聞いたら答えてくれるかな？ ずっと、疑問だつたんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。人間たちが竜神様って言つてたの、なあに？」
「ああ、それは私よりも、お兄ちゃんかお父さん、お母さんに聞いて。私もよく分かつてないんだ」

「なぬ？ ならばつと。

「おかーさん、竜神様って、何なの？」
「1000年位前に、人間たちが魔物と戦つているときに手伝つてあげたら、勝手に竜神扱いされたの」
「まもの？」

「」の世界、そんなものもいるんだ。

「そう。」の山はお父さんやお母さんがいるから魔物もいなくて安全だけど、」の山を一步でも出ると危険だからね。エーデルフィアはまだまだ出たらダメだからね」

「きゅ、きゅ！…」

それを言つお母さんが怖いです。まず、お母さんが怖いから勝手に山から下りたりしないよ。そもそも、ちびちびの私じゃ、一人で山を下りたりは出来ないよ。

私一人でパタパタ飛んでたら、山を下りる前に日が暮れちゃうつて。それに、まだお母さんたちに甘えたいお年頃だから、絶対に人はイヤ。

だから、思い切りお母さんに抱きついた。甘えたいから。いつぱ

いいっぱい甘えたいから。

「お母さん。私、お母さん大好きだよ。だから、一人にならない。
絶対に誰かと一緒にいる。一緒にいて？」

「私たちの可愛いエーデルフィア。いつまでも、ずっとお母さんた
ちはあなたと一緒にいるからね」

「うん」

ずっと一緒にいて。私を一人にしないで。一人は、寂しい。

最近、夢を見るんだ。私が一人ぼっちになる夢。私はドラゴンの
姿じゃなくて、人態を取れていて、まわりにお母さんたちがいるだ
ろ？と思つて探しても、誰もいないんだ。

誰もいない、一人だけ。私しか、いない。寂しい。

「大丈夫、お母さんたちはずっと一緒にいる。エーデルフィアを一
人にはしない。絶対に、……絶対」

お母さんはそう言つて私を抱きしめた。

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。ちょっと来な
さい」

「ん？ どした？」

「どうしたの、エーデルフィア。……つて、泣いてない？ あー、
何かよく分からぬいけど大丈夫だよー」

「何がどうだつていうの？ 大丈夫だよ、エーデルフィア」

お母さんが呼ぶと、お兄ちゃんたちはすぐにそばに来てくれる。
そして、代わる代わる私を抱き寄せた。

お兄ちゃんたち、温かいな。この温もりを失いたくない。だから、
足搔くよ。何があつても足搔くから。

「ほら、涙を拭こうね、大丈夫だから」
「きゅ、きゅー」

もうまともに話せない。今の私の口から発せられた言葉は鳴き声だけだ。

「ただいまー」

そうしてみると、お父さんが帰つて來た。……そういえば、お父さんどこに行つてたんだろう。

「ちょっと町に出て、人間どもに忠告してきた。これでしばらくは山に入り込むバカはいないだろ」

「お疲れ様、フォンシユベル。少しくらい、人間の王を痛めつけてきた?」

「少しといわす、徹底的に殴つてきたよ。……宰相を」

哀れ、人間の王。つていうか、宰相。いないなあと思ってたら、山を下りて町に出てたのか。そして、王を、というか宰相を殴つてきたのか。

あー、いろんな意味でごめん、人間たち。私が怯えたせいだね、ここまで宰相がやられたのは。

そう思つてたのが顔に出てたのかな? お父さんは不意に私の頭に手を置いてきた。温かくて気持ち良いんだよね、これ。

「エーデルフィア、大丈夫だよ。あれはそれ相応の報いだから

奴らはあらうことか、エーデルフィア、君を怯えさせたんだ。それくらいは普通、というか手加減したほうだよ。

お、お父さん怖い…………。ついに笑ってその言葉を放たれると
本気で恐ろしいです。

家で一番怖いのはお母さんだらけだし、お父さんも結構怖かつたんだね。今思いつき実感したよ。

「阿々——阿々乃阿々——」

だから、助けてお兄ちゃんたか。私をこのままつと微笑みなが
ら怖い言葉を放つお父さんから逃がしてー！

お父さんが本気で怖いです。私を捕まえて、田を畠させてにじつこりと微笑みながら言うから、余計怖いです。

「お父さん、エーテルフィアが本気で怯えてるから。冗談もほどほ

「もゆ
い？」

お姉ちゃんがお父さんから私を回収してくれたよ、その瞬間思い切りお姉ちゃんにしがみ付いたよ。

それにして、何ですか？

「ああ、本気にさせてしまったか。安心しろ、冗談だ。

一九四〇年

「残り半分は！？」

「いいじゃないかそんなこと。それにしても、もう怖くなくなつたみたいだな、よかつた」

……はっ！ おれが、私の恐怖心を拭い取るための作戦！？
あーうん、違つわ。田舎を合わせようとしたら露骨に田線外
す。

「おとーさん？」

「なななな、何だい？」

「迷つ半、可?

「エーレフィア」

疲れただらう?

「アラジン君、お前がアラジンだ？」

「ダメだよ、寝なきや」

「やーあだ！ 眠たくないし、さつきのお話まだ途中だよ？」

タメた^二た^一 初めて人間を見て ひこじたた^二 今日は

卷之三

の
?
』

一九三一！？」

卷之三

。確かに、大きくなれないのまくる

「ほら、大きくなりたいなら寝ようね。って言つたか、そろそろ寝な
いと限界が来ると細つてさばナビ・

「
^?
」

「エーデルフイア、確か5時間以上続けて起きてたこと、ないよね？」

はっ！ そういえばそうだよ。言われてみればそうだよ！ ああ、聞いたら眠たくなってきた。……。

「ううあえず、ベッドでぐるりと丸くなる。

「よしよし、素直ない子は大きくなれるよ。おやすみ、エーデル
フイア」

「ああ……、おやすみなさい」

素直な私は早く大きくなるよー。そのためにも今は『ご飯までぐつ
すり眠つていようつと……。

「エーデルフイア、『ご飯だよ。お腹空いたうつ? 食べよつ」

「んきゅ?」

ふわあ、よく寝た。起きて、鼻をすんすんと動かすと、いいにおいがする。今日の『ご飯は、昨日のお肉の残りかな?

そう思いながら、私は少し飛んで私を起こしに来たお兄ちゃんの肩に乗つてそのまま連れて行つてもうう。人間、樂するためにはいろいろと考えなくては。

「エーデルフイア、自分で飛んで行こうよ。甘えてばつかりじゃダメだよ?」

「だつて、寝起きて上手に羽動かせなくて、前一度落ちたもん。

……だから、怖いんだ。ダメ?」

「う! そ、そうだったね。でも、『ご飯食べた後は、きちんと自分で飛ぶんだよ! ?」

「うん! ありがとうカーヴお兄ちゃん! 大好き! 」

ちなみに、これ事実。前、寝起きの大寝惚け状態でフラフラ飛んで、落つこちた。あれは痛かった。痛みで目は覚めたけど、最初は

何で床にいるのか、何で痛いのか分からなかつたもん。

田を白黒させてたら、私が落っこちたことに気がついたお父さんたちが来て、全力でかまつてくれたんだっけ。

「ああ、痛いだらう可哀想に」

「よしよし、大丈夫よ。ほーら、痛いの痛いの、どこか行けー」

子供用のこいつこいつ言葉、この世界にも、つて書つかドラゴンにもあるんだね。あの時は本気でそう思つた。

ただ、飛んで行けじやなくて、どこか行けなのが若干リアル。そして、この世界でもお母さんの手はすごい。お母さんに撫でられたら、本当に痛いのどこか行つたしね。

前世の小さい頃はお母さんの手は魔法の手だ！ つて本気で信じてたけど、この世界でもそつぱつのはありそつだ……。

おつと、そんなことを考へてゐる間に、カーヴお兄ちゃんは既に私の席の前に立つてゐたよ。んちゅ、よにちょ。羽を広げて席へと下りる。

「よし、Hーデルファイアも来たしカーヴも席に着いたし、食べよつか」

それからは食事の時間ですね、分かります。これは昨日のお肉ですね、美味しいです。

昨日とは味付けが変わつてゐる、といふか、昨日は焼いていたけど今日は煮込んであるようだ。味がしみていてすつごい美味しい！

といふわけで、やつぱり今日も。

「お姉ちゃん、お肉取つて？」

「ふふ、貸して」「うん」

お肉と骨は別々に味わいたいから、きれいにお肉と骨を分けてください、ティアお姉ちゃん。

私が皿を押しやりながら頬むと、お姉ちゃんはこいつと微笑み、肉を取り始めてくれる。つきつき、楽しみだな。

「はい、取れたよ。きれいに取れたから、純粹に肉と骨と別々に味わえるよ」

「うわあい、ありがとーお姉ちゃん!」

言われて見てみると、本当にきれいに肉と骨とが分かれていた。
お姉ちゃん大好きー!

せわせわせわせわせわせ。お肉美味しい、幸せ。がぶがぶがぶ。骨美味しい幸せ。も、最高すわ。

「H-ヘルファイア、肉や骨ばかりじゃなくて、草も食べるんだぞ?」

あ、草もあつたんだ。気がつかなかつたや。あるなら食べるーー!

「はい、最低これくらいこな食べる」と

……いや、食べるって言つても、これは多くない? しかも最低?

現在、私の田の前の皿には、草が山のように積まれています。お父さん、私の体の大ささを考えて。私の体と同じくらいに積まないで。「ふう、盛りすぎよ、フォンシュベル。せめてこれくらいこなしないよ」

そうしていると、お母さんがその半分以上をパンツそりと移動させ

てくれた。ありがとーお肉もー… うさ、このへりこなり食べるよ。

うん、食べ過ぎた。お腹がぱつぱつと膨らんでるよ。こせー、せー草の量が多くたからね。でも、これだけ食べても全部成長に行くのは嬉しいわー。

「エーデルフィア、こいつぱに食べたね。ベッドまで飛べる?」

……、はーーー、よし、やってみよう。

羽を広げて、羽ばたかせて……、ぱと。自分のお腹が重たくて飛べなかつた、くそう。

「あー、せっぽつね。ほり、行こうか」

そうしていると、お兄ちゃんが落ちた私を拾い上げてベッドまで運んしてくれた。ありがとーお兄ちゃん。

まあ、いっぱい食べた後には寝なくては。いっぱい食べていっぱい寝て、いっぱい遊ぶ。これが、今の私が大きくなるための一一番の近道なのだから。

あの一人に会いに行こう

今日の私たち兄妹の目的地。それは、じいちゃんとばあちゃんのところ。

じいちゃんとばあちゃんって、私、初めて会つ『氣』がするよ。じいちゃんとばあちゃんも一応この山に住んでるのに、何故か会わないんだよね。

つていうか、どうしてお兄ちゃんたち、そんなに嫌そうなの？どうして？ どうして？

「ああ、大丈夫だよエーテルフィア。エーテルフィアはきっと大丈夫」

「そうね。まだ小さいから」

「ああ、気が重い」

「？」

お兄ちゃんたち、何でこんなに嫌そつなんだら？ それに、私は大丈夫って、何？

そんなことを考へている間に、私たちはじいちゃんたちの暮らす洞窟の前に立つていた。お兄ちゃんたちが先に進むのを躊躇します。じいちゃんたち、どれだけ怖いの？

「早く入れよ」

そうしてたら、いきなりサーファーお兄ちゃんが誰かに蹴飛ばされた。……この人が、じいちゃん？

「おー？ エーテルフィアか？ 大きくなつたなあ、おいで」

「 もう？」

「 どうした？ じいちゃん怖くないぞ？ ほら、中に入らうつな。 カーヴァ、ティア、サーファ、お前らも早く来い」

やつぱりこの人がじいちゃんなのか。 そう思いつつ、抱かれたまで洞窟へと入っていくと、そこにもう一人いた。つまりこの人が。

「 ばあちゃん？」

「 ハーデルフィア！ ジヤン、ハーデルフィアを私にも抱かせてちようだい」

「 じやん？」

「 ああ、ジヤンって呼ぶのはじいちゃんの名前だ。 ジヤニーストリスを略してジャンだな」

「 じゃあ、ばあちゃんは？」

「 ばあちゃん？ ばあちゃんの名前はシフォニアって呼ぶの。 だから、ジヤンからねーアって呼ばれてるわ」

「 へー。 つて言つか、じいちゃんもばあちゃんも優しいじやん。 お兄ちゃんたち、何であんなに怯えてたのかな。

現在、ばあちゃんにしつかりと抱きとめられている私。 さすがばあちゃん、抱き方優しくて気持ち良いな。

「 最後に見たのは、ハーデルフィアがまだ生まれたばかりの頃だつたかしら？ 本当に大きくなつて」

「 知らない。 覚えてないよ」

「 当たり前よ。 ハーデルフィアはまだ生まれたてのちひちなドラゴンだったんだから」

「 きゅ？」

それ、本当にこいつの話？ 全く知らないんだけど。 全く全然記憶

にないんだけど。

「だから、それが当たり前よ。生まれたばかりの頃を覚えてる子なんていねいわ」

それもそつか。なら、今から新しへ思ひ玉を作りつゝ。つて」と
で、皿にいっぱい甘えよつゝ。

「モモシロ」

「ばあちゃんに思い切り頬ずりする。ばあちゃん、すつじい嬉しそうだ。……それを見るじいちゃんの目が怖い！！

じ、じいちゃん、そんな目でこっちを見るのはヤメテ！」

「二ア、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ。エーデルフィア、じいちゃんにも頬ずりしてくれないか？」

そう鳴いてじこちゃんの元へ向かつてみると、後ろから怖い声が聞こえた。

「あなたたちは、何もせずに帰るつもり?」「きゅうつー!?

あわ、あわわ。ばあちゃんが、ばあちゃんがすつゞに怖い！

「ああ、エーデルフイア、あなたは何も悪くないから怖がらなくていいの。私が言つてるのは、あなたたちよ。 カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス」

へ？ お兄ちゃんたち、どうして…

「せっかく来たのに、どうして何もせずに洞窟から出よ」として
る。ほら、あなたたちも来なさい」
「う……うそ……」

「うへ、どうしてお兄ちゃんたちそんなに怯えてるんだろ。じ
かやんもあちゃんも優しいのに」

「うやつて恐る恐る近寄ってきていたお兄ちゃんたちだったが、
ばあちゃんの射程距離内に入った瞬間に、蹴り飛ばされた。

「ああ、ああいーー！」

カーヴお兄ちゃん！ ちょ、大丈夫！？ そう思ってたら、起き
上がったお兄ちゃんが盛大にばあちゃんに文句を放っていた。

「ばあちゃん！ いつもいつも、近寄つて來た孫を蹴飛ばすのやめ
るよー！」

「おー、生意気になつたな、カーヴアンキス。教育的指導つー！」

「、今度はゲンコ！？」ゴンッて音がしたよー！ お兄ちゃ
ん大丈夫？ 大丈夫？

駆け寄りたいのに、私はじいちゃんに捕まつて近寄れない、くわ
うー！」

「……つー。孫に問答無用で鉄拳かますなつての。ほら、エーテ
ルフィアが怯てるじゃ ないか」

「あ、ホントだ。エーテルフィア、じつおりいで。じいちゃん、エ
ーテルフィア離して」

お兄ちゃん！ 行く、行くから！ じこちゃん、離して！

「離すわけないだろ、バカガキ共。エーテルフィア、まだかまい足りないから離さない。カーヴァは大丈夫だ、ニアが手加減をしてるからな」

「う見えない！ もう見ても手加減してると見えない！ 力一握お兄ちゃん！」

「あつ！ ティアお姉ちゃんとサーファお兄ちゃんがカーヴお兄ちゃんを犠牲にして、若手引いてる！」

「じいちゃん、私もお姉ちゃんたちのところ行きたいから離してよー！」

「わゆい、わゆこわゆこーつ！」

「離してー！ う言いたいのにうまく言葉が発せなかつた！ くそつ！」

「でも、行動で大体何が言いたいかは分かるでしょ？ じいちゃん、離して、離してつたらー！」

「エーテルフィア、きちんと言わないと分からなによ？」

「うーーー、じいちゃん、分かつていながら言つてるね！？ 嘘のじわはつまく言葉が發せないんだ、勘弁してよー！」

「わゆいー、わやわーつーーー！」

「あつはつは、分からなになあ！」

「わやるわるーーー！」

「あー、全然分からんna！」

おのれ、じいちゃん。分かっていながら徹底的に無視か。そう思いながらじいちゃんを睨んでいると、突然視界が揺れ動いた。

「よし、エーテルファイアゲット。帰ろうか」

「よくやつた、サーファイルス。走れっ！」

「ティア姉、エーテルファイアをお願い！」

「分かつた。エーテルファイア、しつかり掴まつてね！」

「へ？　え？　いつの間にか私はサーファーお兄ちゃんに捕獲され、ティアお姉ちゃんに掴まっていた。そして、私をしつかりと捕まえたお姉ちゃんたちは、走る。洞窟の入り口まで徹底的に駆けていた。だが、やはりじいちゃんたちは強かつた。気がついたら一人とも目の前にいたよ。目の前でにっこりと微笑んでたよ。

それを見たお兄ちゃんたちは、その場でしつかりと足が止まつてた、怖かつた。

でも、仕方ないよね。間違いなく後ろにいたはずのじいちゃんたちが目の前に、洞窟の入り口を塞いでたんだから。

「そう簡単に逃げられると思うか？　もう少し精進するべきだな」

「あらあら。この程度で逃げると思われるなんて、ばあちゃん悲しいわ」

「ちよ、じいちゃんたち怖いって…………！」

あわ、あわわわわ。にっこり笑うじいちゃんたちが本気で怖いよ。

そんな意味を込めて、しつかりとお姉ちゃんの髪を掴んだ。

じいちゃん怖い、ばあちゃん怖い。

ぴぎゃーっ！

「おかーちゃんっー！」

もういやもうダメ助けておかあーんっ！！

「エーテルフィア！！」

「おかげで助けてもつやだー！　じこじゅんもばあひゅんも怖い

「この子に何をしたの!? お義父さん、お義母さん! ん? 可愛がる以外は何もしてないぞ? なあ、ニアー

「もつヤダ怖ーー。 もーー。」

「大丈夫、
大丈夫だからね」

じこちゃんもばあちゃんも怖こよー。もつね家帰るー。

「大丈夫よ、お母さんと一緒に帰ろうね。カーヴ、ティア、サーフ
ア、帰りましょ」

了解

カーヴお兄ちゃんは話すと同時にドリームの姿に戻る。うん、帰らへん。もう戻る。じこねやんたち怖こよ。

「这样子——、这样子——...」

じいちゃんたち怖いー！ もうやだー！ そう言いたいのに、恐怖のせいか、鳴き声しかあげることが出来ない。くわづ。でも、お兄ちゃんたちはその間にじいちゃんたちのいる洞窟を抜け出して、大空を駆けていたよ。

「エーデルフィア、俺たちがあんまりじいちゃんたちに会いに来ない理由、分かつただろ？ あんまり会いたくないだろ？ 扱かれたくないだろ？」

「也空了？」

あれ？ 質問の最後に気になる言葉があつたのだが、まだ鳴くこ
としか出来ないため、尋ねることができなかつた。くやしい。
でも、帰る間、とにかく私は頑張つて尋ね続けていたよ。
全部鳴き声にしかならなかつたけどね。

「んああ？」

扱かれるつて、どうして」とへ

「んああうへ」

お兄ちゃんたち、ずっと扱かれてたの？

「んああ、あやぬ？」

じこちゃんたち、昔からそんなに怖いの？

って、いい加減恐怖よ飛んで行け！ それから普通に話さ
せりーーー！

ちなみに、お母さんたちは私がずっと鳴き声しかあげないものだ
から、よっぽど怖かつたのだろうと、とにかくずっととかまつてくれ
たよ。それは嬉しかつた。

事実、かなり怖かつたからね、じこちゃんたち。最初は優しいじ
いちゃん、ばあちゃんだと思つてたから、余計怖かつた。

「よしよし、怖かつたね。でも、もう大丈夫だよ」

せうやつて撫でてくれる手が優しくて。ドリーナンの姿のままで顔
を舐めてくれるお兄ちゃんの瞳が優しくて。

「 もう平氣。ありがとー、おかーむん、おにーちゅん、おねーちゅん。
ん。 大好き」

「 お母さんも大好きよ、エーデルフィア」

「 僕もね」

「 僕も」

「 もちろん、私もね」

「 うん、みんな大好き。

「 おつと、お父さんも忘れないでくれなー？ お父さんもエーデル
フィア大好きだぞ？」

「 うん！ お父さんも大好きーー！」

そしてこれは後日談。お父さんはこの日、私が寝たあとにじいち
やんたちに文句を言いに行つていたらしい。

お兄ちゃんたち曰く、それは話し合いといつ名の喧嘩だつたらし
いよ？ じいちゃんたちとお父さんって、どれだけ怖い勝負になる
んだろう。

とりあえず、私たちが手を出したら間違いなく巻き添えを食らつ
くらいに恐ろしいものだらうね、きっと。

だつて、竜神様だし。お父さんも竜神様、お母さんも竜神様。な
ら、絶対じいちゃんたちも竜神様だろ。竜神同士の勝負なんて、考
えただけでも恐ろしいや。

「 だから、安心しなさい」

次の日の朝、顔を合わせたお父さんにそう言われて本氣で何かと
考えたよ。お父さん、じいちゃんたちに何したの？ みたいにな。

そしてね、この疑問はまだ解決していないんだよね、お兄ちゃん、
お姉ちゃん。

「お兄ちゃんたち、じいちゃんたちに扱かれたの？」

「……思い出したくない過去だ」

「うん、お兄ちゃんもそうよね」

「確かに思い出したくないな、あれは」

「んきゅ？」

そそ、そんなに辛い過去なのか……。

「あ、不安にさせたみたいだね。でも、エーテルフィアはまだ大丈夫だから安心して。100くらいになつたら、じいちゃんたちに近寄らなくすれば扱かれないよ」

曰く、人態を取れるようになつたら徹底的に魔術、肉体的両方で扱かれる、らしい。こわ。

つまり、今の私で考えれば扱かれるのはまだまだ先ということですね、分かりました。極力近寄らないようにします。

教えて欲しいな

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、魔術教えて?」

小さいうちから、普通の魔術なら使えるんでしょ? 人間の姿を取るのはまだ先でいいから、簡単な魔術くらい、使えるようになりたいな?

「うーん、まだエーデルファイアには早いと思うんだけど……」

「確かに。ね、エーデルファイア。自分の年齢っていくら?」

「きゅ? 10だよ? 10歳」

「そうだね、10だよ。10で魔術は早いよ」

「んきゅ? 10で魔術を習いたいって言つのは早いのか? 基準が分からないからなんとも言えないね。」

「だって、まわりに同じくらいの年のドラゴンはおらか、私たち家族と同じちゃんばあちゃん以外のドラゴン知らないしね。でも、そんなことどうでもいい。だからさ。」

「おーしーえーてー?」

「だ、ダメだつたら! そうだね、50くらいになつたら教えてあげる」

「そんな先の話、いやー!」

「50とかまだ先すぎるよー。10のヨジやする」とがあんまりないから退屈なんだよー。魔術教えてー。

「ダメだつて。エーデルファイアにはまだ早いよ」

「でも、たいへつー!」

「うーん、じゃあ明日、町にでも下りてみる。お父さんとお母さんがいって言つたら連れて行ってあげるよ。」

「町！？　はい、行ってみたいですよ！――

「よし、じゃあお母さんだけに話して行こう。」

「町？　別に良いんじゃない？」
何かあつたら町が滅びるだけだし」

「わっ！！　そしてかるっ！　でも、お母さんからは許可をもらひつたぞ。次はお父さんだ！」

「ダ・メ」

お父さん、超ひつじ。これは手強めだ。

「じゃあ、魔術教えて？」
「それもダメ」
「魔術教えてくれるか、町に行かせてくれるか、どう？」
「どうちもダメ」
「でも、退屈だもん」

んきゅー。しょんぼりとした私の鳴き声があたりに響く。それを聞いたお父さんが少し焦り始めたよ。

……してやつたり。心中だけで、一矢やりとせんべく笑む。お父さん、そのまま落ちて欲しいな。下を向きながら、すっと悲しんでいるように見せつけ、お父さんの心変わりを待つ。お父さん、まだ？

「だ、だがな、町は危ないんだぞ？」

「俺たちがいるから大丈夫だよ」

「そうそう。エーテルフィアに害を成そとするバカがいたら、即、引き裂くし」

「それか、ちょいどいいから新しい魔法の実験台になつてもうりつわ

お兄ちゃんたちがお父さんを黙らせに入つた！ 傍観者は参戦者となつたよ。だから、お父さん、ね？

「あーもう、分かった分かった。但し、一人で勝手にどこかに飛んで行かないこと。絶対にカーヴたちに引っ付いていること。守れるか？」

「んきゅー！ 守るー 守れるー！」

顔を上げたら超笑顔。これもある意味必殺技。溢れんばかりに喜びを感じさせて、ここまで喜ぶのならばと、次を考えさせる方法だ。ドラゴンとして生を受けて10年。前世のお父さん、お母さん。娘はあなたたちの子でいた頃以上に腹黒になりました。

そして翌日。いつも以上にぐっすりと休まされ、私たちは町へと向かう。いつものようにカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、私たちがその背に乗る。

さあ問題です。現在、私はどこにいるでしょう。見えないよね？ 見えないでしょ？

正解は、フードをかぶったお姉ちゃんの頭の上。お姉ちゃんのフードで殆ど私の姿は隠れていて見えないらしい。でも、私からはしつかりと外が見える。最強的だ。

「よし、行くか」

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。気をつけろよ、エーテルフィアを絶対に守るんだぞ、何かあつたら手加減するな。責任は俺が持つ」

「了解。エーテルフィアに害を成すバカには手加減は必要ないな」

「うわー、お父さんもお兄ちゃんたちも怖いな。でも、町が楽しみだから何にも言わない。」

「おつと、それとこれをオースティアに渡しておこひ。いいものがあつたら買つてくれるといこ」

「あ、ありがとうお父さん」

やつ言つてお父さんがお姉ちゃんに渡したもの、お金かな？ そういうこええ、この世界のお金つて見たこと無いや。後でお姉ちゃんに見せてもらひゆ。

そうしたやり取りの後、私たちはやつと出発する。山の入り口まではお兄ちゃんがドラゴンの姿で飛んでいくらしい。山を下りたら、後は歩くといふか、走るんだってや。

まあ、今は初めての町に期待を抱いて、お姉ちゃんにしがみ付いておくことにしよう。

でもその前に。

「お姉ちゃん、お父さんにむりつてたのつて、お金？」

「ん、そうだよ。つてあれ？ エーテルフィアにお金の話、したことあつたつけ？ お金つてどうこいつものか分かつてる？」

「うん！ お金とモノを交換するんでしょ？ お金つてどんなんの？」

「見たいなあ」

「うん、合つてゐよ。人の世界ではね、お金渡してモノをもらひ

んだよ。とりあえず、お金は町についで落ち着いたら見せてあげるね

おっけい、楽しみにしてるね。うーん、お金見せてもらつたら、この国の金銭事情も軽く聞きたいかな。……つて、10歳のドラゴンが聞くようなことじやないか。

でも、この世界でのお金やモノの価値つて分からないから、興味あるんだよねー。

「よし、山を下りたな。下に下りるから氣をつけろよ」

そうして、いる間に山を下りたらしく。さすがカーヴお兄ちゃん、早いなー。

その後、人懃を取つたカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん、サーファお兄ちゃんはすごい速度で走り始めた。ドラゴンだから？竜神様だから？だからこんなに早いの？ とりあえず、しつかり掘まつてないと風圧で飛ばされそうだ。

「H—デルフィア、しつかり掘まつてねー」「ウハハハハハハハハ

あわわ、風圧でしゃべりにくいく。今はとにかくしつかりと掘まつていたほうが多いな。

「大丈夫？ 町についたよ」

おー！ あまりの風圧に、いつの間にか意識が飛んでたみたいだよ。気がついたら町についてたっぽい。

「んわゆ……、へーわこ……」

ホントはまだ風圧の影響できついけど、でも心配はさせたくないからとりあえず大丈夫だと答えておくよ。

「まずは、落ち着ける場所に行くか。喫茶店系でいいだろ？ 行こう」

「Jの世界にも喫茶店はあるのか。ああ、まあ普通にあるか。うん、失言だった気にしないで。

そしてついで喫茶店。そこではまずお姉ちゃんがフードを脱ぐ。え？ そしたら私丸見えなんだけビ！？

「これはこれは、いらっしゃいませ、竜神様方。あら？ 今日は随分と小さなお客様まで。どうぞ、お席のほうへ」

……あれ？ 奇異の田で見られなかつた。山で初めて見た人間は思いつきり奇異の田で見てきたから、町の人間みんながそうなのかと思つたけど、違うのか。

って言うか、町の中でもお兄ちゃんたちは竜神として有名人なのね、実感した。私たちがこの喫茶店に入つてから、入るうとする人はいるけど、私たちを見て回れ右して帰つていくよ。

「とりあえず、エーテルフィアには深皿に何か甘いものを、俺たちはいつもやつな」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

いつもの？ お兄ちゃんたち何気に常連さん？

そう思つていると、私の田の前に何かが広げられた。お姉ちゃん、これ何？

「これがさつやーテルファイアと話したお金だね。まずこれが一番小さなお金、鉛貨。これが10枚集まると次のお金、銅貨になる。で、銅貨を100枚で、銀貨。銀貨が10枚で金貨。金貨が10枚で晶貨になるの」

「ん？ へ？ えっと、ちょっと待って。

まず、一番小さなお金が、鉛貨で、それが10枚集まつたら銅貨にランクアップして、銅貨が100枚で銀貨になって、その銀貨が10枚で金貨、金貨が10枚で、一番上のお金の晶貨になるのか。よし、おっけい。

「ほり、一枚ずつ持つてござらん？ なくしたらいけないから、私たちの田の届かない場所に持つていかないとよ」

「うん、ありがとー！」

そうして一枚ずつ持つていくのだが、これは見た目の判断がかなり簡単だな。まず、第一に色が違う。

晶貨は水色といふか、少し透明感を帯びた感じの色で、その下の貨幣たちはそのままだ。金貨は金色で、銀貨は銀色、銅貨は銅色、といふか茶色で鉛貨は鉛色。でも、全部きれいだな。

「もういいかな？ なくしたら怒られちゃうから付けるよ

「……え、あ、うん。ありがとー」

「いやいや、10歳にしてようやく初めてお金を見る」とことが出来たよ、私は10歳にして初めてお金を使う状況に来たよ。

遅すぎじゃね？」

「お待たせしました。小さな竜神様にはこの近くで取れた果物のジュースをお持ちしました。気に入つていただけるとよいのですが……」

そうしてたら頼んだものが来たみたいだね、果実100%ジュースだね！

でも、知らないものは最初は怖いんだよね。というわけで、恐る恐る口を近づけ、舐めた。……美味しい。

ペチペチペチペチ。私が舌でジュースを掬つて飲む音があたりに響く。うん、これ美味しいよ。甘くて、何だか優しい味。

「気に入つていただけたようで何よりです。もっと飲まれたいのでしたら、まだありますので遠慮なく仰ってくださいね」

「んきゅー！」

ならば遠慮なく！ つていうか、ホントこれ美味しいわ。

「よつほど氣に入つたみたいだね」

「美味しそうに飲んでるもんね」

「エーデルフィア、可愛い」

だつて、美味しいもん。そういうば、お兄ちゃんたちは何を飲んでるの？ ねえ、一体何を飲んでるの？ ちょびっとちようだい？

「あー、あげてもいいんだけど、多分エーデルフィアには苦いよ？」

「シロップを入れても、多分まだ苦いよな」

「だろうね。ほら、論より証拠。飲んでじらん、これはシロップが入つてるから少しはマシだから」

サーファーお兄ちゃんはそう言つて自分の持つカップを傾けて私に

飲みやすいようにしてくれた。

つて、あれ？ この色、この匂い。 われってコーヒーじゃ

ないか！！

確認のために、その液体に舌を伸ばす。 舌で掬つて飲む。「うん、やつぱりコーヒーだ。

久しぶりの味だー。でも、ちびちびドリップの口にはかなり苦いよ……。

「こさわー……」

「だから言つたでしょ？ このナビセツキのジュースもう一杯もつてきてあげて」

「畏まりました」

もう少し大きくなれば、懐かしきコーヒーの味も美味しい感じられるようになるかな？

前世の私つて、一応コーヒー大好きで殆ど毎日飲んでたのに、転生してからは無いと思つてたから全然飲んでないんだよね。 いろんな意味で、禁断症状出てたよ。

でも、その禁断症状はさつきの苦味で完全に吹つ飛んだ。これを美味しいと感じられる歳になるまではコーヒーいらない。 苦い。

そのためにも、早く大きくならなくちゃね。

教えて欲しいな（後書き）

ストックが尽きました（泣）

これからは一話出来次第更新となります。
さすがに一作品毎日更新は辛いですね。

10／31日、銀貨から金貨へのランクアップの枚数に
誤りがあつたため、訂正しました。

番外編・愛するヒーラルフィア（前書き）

「めんなさい、ストックが足りていながら、
気分的に番外編なんぞを書いてしまいました……」

時系列的には一話あたりですね。

転生直後です。

それを、ヒーラルフィア目線ではなく
外の第三者目線（？）で書いています。

後、若干残酷描写があります。

苦手な方は避けてください。

番外編なので、読まなくて本編には
まったく害を齎しません。

番外編・愛するエーデルフィア

「ひきやーつー！」

エーデルフィアが生まれて、叫んで氣を失った直後、フォンシュベルとエイシェリナ、そして外で生まれのを待っていた子供たちは焦っていた。

生まれた子供が、可愛い妹が叫び声を上げて氣を失ったからだ。ちなみに理由は、この場にいる全員がドラゴンの姿をしていて、驚いたからだということを彼ら、彼女らは知らない。

そしてその後目を覚ました幼子。エーデルフィアはやはり大きなドラゴンの姿をした両親、兄弟を見て驚く。

両親や兄弟たちはそれに気がついたらしく、人態を取つた。それと同時にエーデルフィアは目を見張らせ、恐る恐るフォンシュベルやエイシェリナに近寄ってきた。

そんなエーデルフィアをエイシェリナが優しく抱き上げる。

「よく、生まれてきてくれたねエーデルフィア」

「あなたの名前は、エーデルフィアよ。私たちの可愛い子」「んきゅ？」

そうして声をかけられたエーデルフィアだったが、意味が分からないらしく首を傾げた。その動作にフォンシュベル以下、母子四名は胸を打たれる。

守らなくては。数少ない竜族、ドラゴンたちは、基本的に子供が生まれづらい。その上、竜族は一所にまとまっていないため、どこの家族に子供が生まれても、滅多に会つことは無い。

だからこそ、竜族は子供を慈しむ。滅多に会うことの無いドラゴ

ンの子供。出会ったときは、絶対に守る。それが自分の子、兄弟ならばそれ以上に守るのだ。

「Hー『テルフィア、お兄ちゃんだよ。カーヴアンキスつていうんだ、よろしくね』

「お姉ちゃんよ。オースティアつていうの。でも、お姉ちゃんつて呼んでね」

「サーファイルズだよ、Hー『テルフィア。俺たちの可愛い妹』

慈しむべき小さなドラゴン。生まれたで、人態を取った彼らの両の手のひらにやつと乗るくらいの大きさしかない小さな子。

「わゆいー」

可愛い鳴き声をあげながら、兄弟たちを敵ではないと判断したのかすり寄るHー『テルフィア。

「か、可愛いよこの子……」

「お母さん、ちょっと可愛すぎない?」

「いいじゃない、可愛い。Hー『テルフィア、いつちおいで』

「わゆい?」

呼ばれても言葉が理解できていないため、頭に疑問符を並べるHー『テルフィアをエイシェリナは抱き寄せる。

「よしよし、可愛い子」

せうやつに抱き寄せられるのは気持ちがいいのか、Hー『テルフィアは目を細める。それからわずかに、ぐつすりと眠ってしまった。

「うふふ、寝る子は育つわ。大きくなりなさいね、エーデルフィア」

気持ちよさに眠りに落ちたエーデルフィアを、エイシェリナは彼女のために用意したベッドへ運ぶ。小さな小さな籠。それに柔らかい毛布を置いて設えた彼女専用のベッド。

エイシェリナはそれに、エーデルフィアが起きないようになに優しく下ろす。下ろした瞬間、エーデルフィアが身じろぎしたため、エイシェリナは焦ったが起きなかつたのでよしとした。

下ろされたベッドで気持ちよさそうに眠る我が子。フォンシュベルや子供たちが競い合つて覗きあう、小さな小さなドラン。

それが、五月蠅かつたのか。

「…………ひきやーつ…………」

すやすやと眠っていたエーデルフィアは、大きな鳴き声を上げて目を覚ました。何度も鳴きながら、何かを求めるように前足を伸ばす。

「んきゅー、んきゅーつ…………」

その姿が何故か痛々しくて。その姿が、愛らしくて。

だから、一番近くにいたエイシェリナはエーデルフィアを抱き締めた。小さな我が子が痛くないよう、力加減をしつかりして、それでも、強く。

「大丈夫よ、エーデルフィア。大丈夫、大丈夫」

「きゅ、んきゅきゅ…………」

それでもまだ不安なのだが、エーデルフィアの体は小刻みに震えている。

「大丈夫よ」

だからエイシェリナは淡く微笑みかける。エーデルフィアが安心できるように優しく微笑みかけた。

それでようやく安心したのか、エーデルフィアは再び目を細め、眠りに落ち始めた。

そしてエーデルフィアはエイシェリナの腕の中で、気持ちよさでうに眠りに落ちた。

その後、空腹で目を覚ましたエーデルフィアは、再び恐ろしいものに襲われることとなる。

「お腹空いたでしょう？ エーデルフィア

ドラゴンの姿に戻ったエイシェリナはそう言いながら、自分の鋭い爪で自分を傷つけ流血させる。ドラゴンの姿と流血が、エーデルフィアを怯えさせた。

「きゅ、きゅうう……」

「あり？ お腹空いてないの？ ああ、この姿が怖いのね。ちょっと待つてね」

エイシェリナはそう言つと、人態を取る。その腕からは血が流れ続けていて、それがエーデルフィアを怖がらせた。

「ほら、飲みなさい。お腹空いてるでしょ？」

「ああー、ああううー」

その鳴き声は、どう聞いても嫌がっているようだった。それに、エイシエリナは首を傾げる。

ドラゴンの子供は、最初の数年は親の血を飲み、それを栄養に生きていく。親の血がどれだけ美味しいか、小さなドラゴンは本能的に悟っている。故に本来、親の血の臭いがすれば、小さなドラゴンは食事と判断して喜ぶはずだった。

だが、小さなエーデルフィアの反応は逆だった。エイシエリナの流す血に怯え、頭を抱え、見なくてもいっつにベッドに顔を埋めていた。

「どうしたの？ ほら、飲まなくちゃ大きくなれないよ？」

エイシエリナが何度も声をかけても、小さな小さなエーデルフィアはエイシエリナの血を飲もうとしない。頑として顔をベッドに埋めたまま動こうともしなかった。

「んもう、仕方ない子ね」

エイシエリナは言うと同時に、片手でエーデルフィアを持ち上げた。エーデルフィアの正面に、エイシエリナの血の流れる腕が来る。そしてエイシエリナはその腕を無常にもエーデルフィアの口元へと近づけた。

「ぴぎやーー！ ぴぎゅーー！ ぴゃーー！」

エーデルフィアの悲鳴は続く。悲鳴を上げながらも、必死で血を

飲むまいと足搔いていたのだが、結果的には本能が勝つこととなつた。

鼻先を漂う美味しそうな匂い。立派なちびちびドリップのエーテルフィアは、その本能には抗えなかつたのだ。

「んぐっ、んぐっ

一度飲んでしまえば、後はなし崩しに飲み続けた。「ぐぐぐぐぐぐぐくごくど、どれだけ空腹だったのか、エーテルフィアはとにかくエイシェリナの血を貪り飲み続けた。

「あやふつ

そしてしばらく飲み続けて満足したのか、エーテルフィアはようやくエイシェリナの腕から離れた。その後は、エイシェリナによってベッドに戻される。

「いっぱい飲んだね。なら、後はゆっくり寝ようね
「んきゅ、きゅる……」

エイシェリナはベッドに下ろした我が子の体を優しく撫でる。それが気持ちいいのだろう、エーテルフィアはそのままうどいと船を漕ぎ、そして完全に寝入つてしまつた。

それからソーセーと、眠るエーテルフィアの元に現れたものがあつた。それは、カーヴァンキスたち兄妹たちだ。兄妹たちは新たな兄妹を見たいのだが、見に行つて泣き叫ばれたらどうしようかと考え、眠つた頃にやつてきたのだ。

「エーテルフィア、寝た?」

「ええ。この子が起きてる間に来なさいよ。大丈夫よ

「でもさ、俺、オースティアの時に……」

「ああ、避けられたわね」「聞いた聞いた。だからさ、余計怖いんじやん？ 自分がやつたことだしね」

「俺は初めての年下の兄妹だから、何となく怖い」

兄妹たちとエイシェリナは、そう言ってエーデルフィアの眠るベッドのそばで話し続ける。そんなところで話したら、起きるとは考えないのかこの家族は。

だが、現在満腹状態のエーデルフィアは完全に熟睡状態に入っているため、そう簡単に目を覚ますことはしない。だからこそ、エイシェリナたちはその場で話し続けているのだ。

「大丈夫よ、人態を取つていれば泣かれたりしないから」

「ああ、だからお母さんも人態なのか」

「珍しいと思つていれば、そういうことかあ」

「なら、この子の前で本来の姿は厳禁つてこと？」

「そうしないと、泣かれるわよ？」

『この子の前では人態をとります！』

エイシェリナの言葉に、子供たち三人は声を合させて宣言した。小さな妹に泣かれたくない、その一心だった。
彼らの前ですやすやと眠る小さな妹。小さな小さな、生まれたばかりのドリゴン。慈しむべき対象。

「エーデルフィア、君は俺たちが守つてあげるね

「愛してる、私たちの可愛い妹」

「絶対に、守つてあげるから安心して大きくなつて」

眠る幼子に向けられる優しい瞳。小さな子供の健やかな成長を願

つた優しい言葉。

小さな子供はそのまま聞いて、すやすや、気持ちよく眠り続けていた。

町は未知の場所です

人！ 人！ 人！

先ほどの喫茶店を出て、冷静に町を眺められるよつになつた私は思つ。見事に人だらけだ。

それにしても、この町つていろいろな髪の色の人人がいるな。金とか、紫とかね。

でも、どれだけ見渡しても青い髪、赤い髪の人は見当たらない。どうしてだろう。

「ねえ、人間の髪の色つて、どうなつてるの？ 人間には赤い髪の人とかいないの？」

「髪の色？ ああ、赤は俺たちドラゴンだけだ。後、青と白、黒、茶、緑もそうだね、人間にその髪色はない。その色はドラゴンだけだ」

「へー。つて、どうしてドラゴンはその色なの？ 尋ねるとあつさりと答えが返つて來た。

「属性だよ。赤は火を表し、青は水を表す。緑は風を表し茶は土を表す。そして、黒は闇を表し、白は光を表す。全部、ドラゴンが司るんだ」

「で、その属性って言つのがどうなるの？」

「……え、あーっと、それはお父さんたちに聞いてくれるかな？ 私たちにはちょっと説明が難しいや」

「教えてくれないの？」

「教えてあげられないの。わざと教えないんじやないんだよ？」

何だ、教えてもらえないのか。お姉ちゃんたちも完全に理解でき

てないってことかな。残念。まあいいや、帰つてからお父さんたちに聞いてみよう。

「あ、それが王都に行く？ 王都に長老がいるから、長老に聞けば簡単に分かるけど」

「王都？ 近いの？」

「隣町。走つていけばすぐそこへくよ。行く？」

「……行ってみたい」

王都には興味あるしね。人間の作った王都つて、どんな風なんだ
うひ。

「あー、でも、王都も一応お父さんたちの許可を取らなくちゃ。また今度だね」

「えーっ、今行けないの？」

「勝手に行つたらお父さんやお母さんで怒られやけりからね。我慢して」

何だ、残念だな。でも、王都つていつかは行つてみたいよね。それに、お兄ちゃんたちがさつき言つてた長老つて言つのも興味あるし？

多分、長老つて何でも知つてるんだよね？ 私の疑問なら大体答えてくれそうだよね。

「とりあえず、今日はいろんな店を見て帰るつか。エーデルフィア、何か見たいものはある？ サつき飲んだジュースみたいなのとか、甘い食べ物とか」

ん？ 甘い食べ物つて、お菓子かな？ それは見たい！ 見る！

「甘この見る……」

「よしそー、じゃあ行くわね

甘この、甘この。楽しみだな、甘この。このうけかいたりとも樂るお菓子せどりのものがあるのだらけ。今のうけかいたりでも樂しみだ。

そしてそれは、お兄ちゃんたちには器バレだつたらしく。お兄ちゃんたちの移動速度が早まつてたよ、ありがと。

「ほり、ついた。欲しいのがあったら言つぱい、買つてあげる」「うそー、ありがとーー！」

おお、お菓子こっぽい、見たこと無いのがこっぽい。うわあ、うわー！

「ふふっ、Hーテルファイア、楽しそうだな」

「いいじやなこの、可愛くて。ちゃんと見える？　見えないなら下りて、抱っこしてあげるから言つてね」

「ほり、ここのはどう、美味しいよ」

世につくとくぐに、お姉ちゃんは優しく顔をかけてくれ、お兄ちゃんたちがその店に展示されてるお菓子のこくつかを見せてくれる。うん、美味しいだ。

だがしかし、やつぱつお姉ちゃんのホールで隠れたままでは見づらこよ。

「おねーちゃん、抱っこして？　見づらこー」

「はいはー。おいで」

お姉ちゃんはいつも不ワードを下す。それと同時に私はお

姉ちゃんの胸へと飛び込んだ。よし、よく見える。

ただ、そのかわりに私たちのまわりにいた人たちが息を飲む音が聞こえたよ。お兄ちゃんたちがドラゴンだって言うことは知つても、私という存在は知らなかつたんだろうね。

人態を取れない小さなドラゴン。それが今の私。

そんな私は、この町の人からすればとても珍しい存在なのだろう、と私は考へてゐる。

そしてこれはオマケ。お姉ちゃんがフードを下ろして私が見えるようになると同時に、お兄ちゃんたちはあたりに威嚇の気を飛ばしてたよ。あはは、「メンね。

「何か食べてみたいものはある? ハーデルファイアが欲しがるなら、何だつて買つてあげる」

「んと、えとね!」

いっぱいありすぎてどれがいいって決められないよ! だつて、どれを見ても知らないものばっかりで食べてみたい感じがするんだもん。

「ここからここまで、全部一通り包んでくれる?」

そうやつて考へてたら、お姉ちゃんが勝手に頼んでたよ。ここからここまでつて、結構範囲広いよ、いっぱいだよ!

そそ、そんなにいっぱい買つても大丈夫なの!? ねえ、大丈夫なの!?

「これで、大体どのくらい?」

「はい、これで銅貨25枚です、竜神様」

「そう。ハーデルファイア、今度は中を見ようか。欲しいのあつたら遠慮なく言つてね」

え？ まだいいの？ 銅貨25枚って、どのくらいなの？ この世界の金銭感覚がよく分からないから何とも言えないが、さつきの喫茶店以上にお金を使ってるってことは分かるぞ！ んきゅ！ でも、このくらいならまだ余裕の範囲だつたらしい。

「銀貨3枚くらこまでならお菓子買つてもいいよ。あ、お菓子つて言つのがこの甘このね」

ぎ、ぎぎぎ、銀貨3枚まで！？ えつと、さつきの喫茶店でかかったお金が大体銅貨20枚だつたから、えつと、んつと……。私の感覚で行けばどのくらいだろ……、よし分からぬから放置。で、確か銀貨つて言つのは銅貨が100枚で1枚だから、銀貨3枚は銅貨300枚！？ デカい、デカいよ……。

一応気持ちは小市民な私には、それは大金にしか感じられません、無理です。

「つて、どうして涙田？ どうしたの？ 大丈夫！？」

「きゅう……」

ダメだ、そんなの大金だよ、私には無理だよ。

「どうしたの！？ 何？ そちらの人間が見てくるの怖い？ なら、殲滅するよー？」

「きゅーーー！」

ちょ、殲滅つて怖いよ！ そこまでしなくても大丈夫！ って、いつか今回は人間は何も悪くないから！ 私は全力でお姉ちゃんを掴み、何とか踏みどどまらせる。

だがお兄ちやんたちを完全に止めるのは少々きつい。お兄ちゃん

たち、完全に目が本^{マジ}気だ。

「え？ 違うの？ ならどうしたの」

でも、人間は悪くないって言つ」とはお姉ちゃんが早く気づいてくれたから、お兄ちゃんたちが人間を殲滅しに行かなくて済んだよ、よかつた。

「どうしたのかお姉ちゃんに教えて？ ジゃないと、人間に原因があるって考え方やうからね。 本氣で殲滅したくなるから」

「こわっ！ お姉ちゃんたち怖いよ！ って、何氣にお兄ちゃんたちも殺氣を放たないで！」

「違う！ 違うよ、人間は悪くないよ！ ただ、お金の使い方に付いて、無理だと思つただけだよ！…」

「お金の使い方？ どうしたのエーテルフィア。エーテルフィアはそんなこと考えなくていいんだよ、いい子だから」

「でも、お金つて出来るだけ使わないほうがいいんじゃないの？」

お金はあつて困るものじゃないんだし、そもそも、お金つてどうやって手に入れてるの？

「気にしなくていいよ、というか、気にしちゃダメ。エーテルフィアは子供なんだから、大人しく私たちに甘えてればいいの。ね？」

「んきゅい？」

でもさ、やつぱダメ。小市民感覚が抜けない今だと、ただ甘えるだけならともかく、お金のかかった甘えはイヤだよ。

でも、お姉ちゃんたちはそれを許してはくれないみたいだね。人

間を人質に私に甘えるよつて言つてくれる。

「ほり、遠慮なく甘えなさご。じゃないと、やうこりに当たりに行く、かもね」

当たりに行く？……ハツ当たり！？ それはダメだよ！ 私のせいによけいな怪我なんてさせたくない！

「ほら、甘えて？ 何が欲しい？」

「ん、んきゅ……」

えつと、んつと……。

「んにゅ、わゆー、わゆー、わゆー」

これと、これとこれ。

「ん？ ああ、これとこれとこれね。包んでもらひえる？」

「少々お待ちください」

よし、これだけ頼んでればいいよね、そうすれば人間もハツ当たりされないよね。

「ほかは？」

でも、それだけでは許されなかつた模様。お姉ちゃんは暗に”もつと甘えないと人間にハツ当たりが飛んじやうよ？”と訴えていた。怖いよ。

ええい、じうなつたら。野となれ山となれ作戦だ。

「んと、じゃあこれと、これと……」

とにかく適当にたくさん選んでしまえ！ それがいくらになろうが知ったものか！ お姉ちゃんたちがいって言つたんだから、適当上等！！

そしてお姉ちゃんは次々に指をさすたびに店員さんに包んでもらつていたよ。手加減は本氣でなしでいいんですね。

そして、これまたオマケだが、私が次々にお菓子を指差している間、辺りを警戒していたお兄ちゃんたちは、表情だけはどつてもにこやかだった。うん、それで殺氣放つてるから余計怖いです。

結果的には、洞窟に帰るまではお姉ちゃんたちに引っ付いたままで、帰ってきて、お母さんの姿が見えた瞬間にお姉ちゃんの服のフードから抜け出してお母さんに飛びついたよ。めいっぱい。

「どうしたの？ 人間に何かされた？」

違う。そんな意味を込めて首を横に振る。

「じゃあ、カーヴァンキスたちにいじめられた？」

いじめ……られた。 そうかも。

「そう、なのね。 カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。 じつに来なさい」

「え！？ ちょ、俺たち何もしてない！」

「そそそ、そゆ！ 私たちがエーテルフィアをいじめるわけないじゃない！」

「だから、拳振り上げるの止めてくれ！ 僕たちは無罪だーー！」「いいから来なさい。早く来ないと力加減が分からなくなるけど、いいの？」

お母さん、怖いです。ああ、何故私のまわりには怖い人しかいないのでしょうか。怖くない、普通のドラゴンに会いたい……。そう思つ今日この頃です。

ちなみに、この後私が細かい説明をして、お兄ちゃんたちはお母さんに思いつきり殴られました。ついでにお父さんにも殴られました。そしてその後、殺氣をそう簡単に出来ないようにするために、扱かれたらしいよ？

扱かれた後か前か、軽く睨まれたけど自業自得だよね？ 私悪くないよね？ 甘えないとそこらへんの人間に害を成すって言つてゐるお姉ちゃんたちのほうがよっぽど悪いしね。

「そういえば、今度王都に行つてみたいなあ」

「あら、ちゅうどいいじゃない。カーヴ、ティア、サーファ。特訓

よ、ヒーデルフィアを怖がらせずにお出かけしてきなさい」

「怖がらせたらどうなるか

分かつてゐるな？」

『わわ、分かつてゐるよーー』

この後も、また軽く睨まれたよ。でも、お兄ちゃんたちは私には甘々。すぐに睨むのをやめて、いっぱいかまつてくれた。楽しかつたよ。

ヒーデルフィアとしてドラゴンに転生して10年、私は相当腹黒くなつてゐるよつです。

未知の場所一箇所目です

今日の私たちの目的地、それは王都！　お兄ちゃんたちに聞いてから、王都に行ってみたかったのだ！

「一応」の國の國王には忠告はしておいたが、氣をつけるんだぞ。いいな？」

「うん？」

忠告？　「」の國の國王さんに？　わざわざ。

「何でそんな」としてるの？！？

「何でつて、まだまだ小さなエーデルフイアが心配だからだろう。サーファたちは魔術も十分使えるから安心だが、エーデルフイアはまだ使えないからね」

だから心配で、わざわざ国王さんに忠告をして、私に害を成さないようにしている、と。過保護だなあ。

でもまあ、今日もお姉ちゃんたちいるし、何かあつたら守つてくれるだろうからいいのか。

というわけで、今日も私はお姉ちゃんの頭の上で、フードに隠れている。今日はお姉ちゃんたちが怖くならないことを強く祈ります。あ、でも今日はお日付け役のようにお母さんがいるから大丈夫かな。何かあつたらお母さんに飛びつけばいいしね。

「大丈夫よ、フォンシュベル。私もいるし、何かあつたら長老に話して、王都を更地にしてくるから」

「ああ、それなら長老の説得を手伝おう

はい、王都を更地にするのはやめてください。やつならなによ
私も頑張るよ！自分のせいで更地なんて作りたくないよ！

「じゃあ、行つてきます。んきゅー」

楽しみだな、王都楽しみだな。長老つていつドリゴンに会えるんだよね、ね。というわけで、今田もカーヴお兄ちゃんの背に乗つて町へ下りる。が、今日は王都までずっと飛んでいくらしい。曰く、すぐ下の町から走つて王都に行くのが面倒だつたらしこよ？
とりあえず、楽しみだな。王都楽しみ。うふふー。

「Hーデルフィア、王都に行くの、そんなに楽しみなのね
「うん！ すつじこ楽しみだよ！」

王都つていうか、長老に会つのがね。長老に会つて、私の疑問を
いつぱい尋ねるんだ！

そしてついた王都は、……超デカい。おつきいよ、ゆじいよ。
さすがは王都だよ。

でも、この辺山見当たらなによ？ 長老たちがどこにいるの？
どこに住んでるの？

あ、あっちにすつじこ大きい建物がある！ あれがお城？ あそ
こに人間の王様がいるの？

あれ？ あっちの建物も大きい。あっちがお城？ やつきのがお
城？ ねえ、どっちー？

いやあ、軽く暴走しちゃつた。いやだつて、この間見た町よりも
おつきいし、おつきい建物多いし、何か分からぬものもいろいろ
あるし、ね？

ちなみに、まだ暴走は収まつてないよ、小さな子供の探究心は抑えられないのだよ！－

「おねーちゃん、あれ何！？　あそこのがれ－－」

「へ？　どれ？」

「あれ！　ほら、あれだよ！」

私は少し先にあるモノを指差し、お姉ちゃんに尋ねる。本当にあれ何？　食べ物？　雑貨？

「ああ、あれかな？　あそこの店先に吊るしてあるやつ」

「それ！　なに－？」

「あれは魔除け。王都だから、街の入り口に魔除けの呪いまじなはしてあるけど、それでも不安などこりはああやつて魔除けを吊るしてたりするの」

「へー。でもあれで、本当に魔物が来ないの？」

「来ないよ。あれは魔物が大嫌いなにおいを発してるから」

魔物の大嫌いなにおい……。それは一体どんなにおいなのか：

…。

「あのにおいは嗅がないほうがいいよ。俺たちの鼻には、かなり痛いたいぞ」

先に釘を刺されたか。つていうか、私たちに痛いにおいて、人間は大丈夫なのか？

「人間は私たちほど鼻がよくないからね、大したこと無いの」

なるほど。つまり、このにおいにやられるのは鼻のいい魔物と、

私たちドラゴンですと。けつ、厄介だな。

私がそんなことを考へてゐる間も、お兄ちゃんやお姉ちゃん、お母さんはどこかへ向かつてどんどんと突き進んでいた。目的地、どこなんだろ。

つて、これはまさか王城？　おつきいし、門のところに兵士の人いるし。

「リリリリリ、これは、テリアの町の竜神様！　長老様への面会でしそうかつ！？」

「ええ。長老はいる？」

「はいっ！　えーっと、人数は四名様でよろしかったでしょうか？」

「いいえ、五人よ。

エーテルフィア」

「きゅい？」

「　！　小さな竜神様もいらっしゃいましたか、申し訳ございません」

呼ばれたからお姉ちゃんのフードから出て顔出してみたけど、何だつたの？　まいつか。

それから兵士さんは城に入つて行き、私たちはその後ろを追つた。うん、私だけ状況が全く読めない。何なんだ、こんなちくしょう。

おつと、失礼。10歳のドラゴン（雌）が言つような言葉じやなかつたよ。

そして、通された部屋には一人、白い髪のおじいさんがいた。うん、誰？

「おお、久しぶりじゃな、エイシェリナ、カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス」

「久しぶりね、長老。今日はちょっと、この子が王都に來たがつた

から、顔を出してみたの。迷惑だつた？」

「この子？　　おお、お前がエーテルフィアか」

「んきゅーーー？」

ちよ、お母さん、いきなり私をお姉ちゃんの服のフードから取り出さないで！　いきなりほかの人渡さないで！　怖い、怖いつて！

「おお、怖がらんでいいぞ、エーテルフィア。儂はドラゴンたちを取りまとめる長老じや。そうじやな、大じいちゃんとでも呼んでくれ。カーゴンキスたちもそう呼ぶよつに言つていろからな」

「お、おお、じいちゃん？」

確かに、今まで見た中では一番年に見える。それもそのはず、後から聞いたのだが大じいちゃんは既に数万年生きていくとのこと。つええ。

うん、まあとりあえず、この人もドラゴン。長老で大じいちゃん。つまり、怖くないし質問にも答えてくれる、と。

「ふむ、さすがは現在の一番小さなドラゴン。愛らしげな。……この子の前に生まれたドラゴンは、どこの誰じやつたかの？　サーファイルズだつたか？」

「違うわよ長老。この子の前は、アンジエの町のキースエリナよ。サーファはその前」

「おお、そりじゃそりじゃ。キースエリナじやつたな。しかし、あの子ももう一五〇ぐらいかの？　立派な大人じやな」

「うおー、大じいちゃんとお母さんで雑談タイムだ。そして、アンジエってどこ？　キースエリナって誰？　私のすぐ前に生まれたドラゴンですか？　150年も前ですか？　ついでに言つなら、その前がサーファお兄ちゃんか。

私がそんなことを考えている間も、お母さんと大じいちゃんの話は終わらないみたいだ。

「ふむ、キースエリナの様子も今度見て見らねばのう。ハイショーナ、子供たちを連れて一緒に行くか？」

「うーん、そうね。一度挨拶に行つたほうがいいかしら？ ザッカスたち、キースエリナが生まれたあとに挨拶に来てくれたしね」

「何々？ つまり、子供が生まれると、その前に生まれた子供のところに挨拶に行くって事か？」

「ふむ、ではさつとと行くか。街を出たら儂はドリゴンに戻るからその背に乗るがいい。よいかの？」

「ええ、お願ひね長老」

「しかしエイシェリナ、お前はいつから儂を大じいちゃんなど呼んでくれんよになつたのかのう、ちと寂しいわ」

「あら？ 大人になつたら呼び方を変えるものではないの？」

「そんなもん関係ないのう」

つて、いつの間にかどんどんと話が進んでない？ ついていけないんだけど。ちなみにそれはお兄ちゃんたちも一緒にし。

「ちょ、長老！ ちょっと待つて、俺たちがついて行けない！」

「おお、カーヴァンキス、お前も大じいちゃんとは呼んでくれんのか」

「それは後！ いいから説明をくれ！ 今から、どこに、何をして行くんだ！？」

「何つて、キースエリナの様子見と挨拶よ。ほら、いいから街を出ましよう。早くしないと、いくら長老でも帰つてくる頃には日が暮れちゃう」

うん？ つまり、今から街を出て、大じいちゃんの背に乗って、アンジエって言う町にいるキースエリナという名の私の生まれるすぐ前に生まれたドラゴンに会いに行くと、そういうことか？ 展開急すぎない？ 王都に来てすぐ、また別の町に行くことになるとは思わなかつたんだけど！

つて考へてゐる間に、私を抱いたまま大じいちゃんは城を出て、街の出入り口に直行していた。ちよつと待つて！　心の準備がまだだよー！

「で、もう街てる！ 大じいちゃん、ジラーンの姿に戻るのは
もうちょっと待って！ お願ひだから待つてえええ！！！」

「ひめゆり」

大じいちゃんの「ドク」の姿おつきこよ、怖いよう。お母さん助けて、お兄ちゃんたち助けて。怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い！

「どう、どうしたエーテルフィア!?」

「ああ、そうだったわ、長老。この子、カーヴたち以外のドラゴンの姿、怖がるのよ。おかげで私もこの子の前じや、基本人態でね」「それなのに、田の前で長老、ドラゴンに戻つたから余計怖かつたんだね」

「やいなさい」
一 ほら、おいでエーテルファイア。
お姉ちゃんの服のフードに隠れち

「おお、あれ？」

ふええ、怖こよおひきこよ怖いよお。私がお姉ちゃんの頭の上に飛んで移動すると、お姉ちゃんはすぐヒードをかぶり、私を隠し

てくれる。お兄ちゃんたちはその状態で、私をよしよしと撫でてくれた。ありがとう。

「ううむ、ここのまで怖がられるとは思わなんだな。予想外じゃ」「多分、成長に伴つて怖くなくなると思うから、それまではこの子の前では出来るだけ人懃を取つてあげてもらえる?」「分かつてある、怖がらせたくはないからのう」

ふええ、本氣で怖いよう、大じいちゃんのドラゴンの姿大きすぎだよ。お父さんやお母さんがドラゴンに戻つたときよりも大きいよ、当然ながらカーヴお兄ちゃんたちよりも大きいよ。
でも、大じいちゃんの鱗は真っ白で、それはきれいだと思つ。にごりも何もない、純粹な白、純白だから。

でも、それでもドラゴンの姿は大きすぎて怖いです!!

「…………ア、エーテルフィア」

「んきゅ?」

「よく寝てたね。アンジエについたよ、そろそろ起きよ!~」

ふわ、よく寝たな。つていうか、いつの間に寝たんだろう。

「よつほど大じいちゃんのドラゴンの姿が怖かつたのかな? 私の頭の上に来て、すぐに寝ちゃつたね」

「そなの?」

「うん、大じいちゃんの背に乗つてすぐに気がついたからね、エーテルフィアが寝てるって」

「うむ、そんなに早い段階で寝ていたのか。どうなんだろう、そ

れ、人として。……って、私今ドラゴンだったし。しかもまだ10歳で人の姿にもなれないちびちびだったし。深く考えちゃいけないよね、うん。

そう思いつつ、辺りを見渡す。おお、山だ。立派な山だ。縁がいっぺいで空気がきれいで、癒される山だ。

この山に、私のすぐ前に生まれたドラゴンが住んでるんだね。会うのが少し楽しみだ。でも、出来るならばドラゴンの姿じゃなくて人態を取つていて欲しい。

その願いが叶うよう、余までの間、ずっと願い続けていたよ。この願い、叶ってくれないと私ヤバイし。

未知の場所三箇所目です

現在、私とお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん、大じいちゃんはアンジエの町にいます。正確には、そのすぐそばの山にいます。田舎は、私のすぐ前に生まれたドラゴンの様子見と挨拶らしいです。そして私は現在、しっかりとお姉ちゃんの服のフードに隠れています。だつて、仮に「ロリコンの姿を取つてたら、見た瞬間また叫んじゃう自信あるし。

「大丈夫じゃよ、エーテルフィア。じゃから、顔を見せてくれんか？」
「ああ、ああう……」

あ、やっぱ怖いわ。普通に話せない、鳴く」としか出来ないもん。

「む？ 話してはくれんのか？」
「エーテルフィアは怖いときとか咄嗟のときは話したくても話せなくなるんだよ」
「ほつほつ。まあ、まだ一〇歳じゃしの、問題はあるまじて」「んきゅー……」

どうやっても怖いよう。大体、どうして今日一日で家族以外のドラゴンに複数会わなくちゃいけないの？ 今日は大じいちゃんだけでいいじゃんか、怖いよう。

つしてしてたら、その私の前に生まれたドラゴン一家の住む洞窟についた、らしい。とりあえず私は今まで以上にお姉ちゃんに隠れるか。

「久しぶりじゃの、ザッカス。キースエリナはあるかの？」

「ん？ おお、久しぶりだな長老。お？ エイシエリナたちも来たのか」

「ええ、子供が生まれたから挨拶にね。エーテルフィア、出ておいで。それとザック・カス。エーテルフィアがドラゴンの姿を怖がるから、人態を取つてもらえる?」

「怖がる？」
分かった、ちょっと待ってくれ

見えない聞こえない。私は何も聞いてない。出でぐるよつに言わ
れた言葉は聞こえない、ドラゴンの姿は見たくない。怖いからイ
ヤ。

ばー！ さて、お姉ちゃん、フードを下ろさないで！ 悪い！ 悪いって

「大丈夫だつて。ほら、見てごらん。ちゃんと人態を取つてくれてるから」「んきゅ…………」

なら、一応……。

「おお、可憐らしいな。わすがはエイシェリナとフォンシュベルの子だ」

「物語」

じつと見ないで！ 恐い、怖いんだつてば……

「さて、キースエリナちゃんといつちへ来なさい」「ん? 何おとーさん」

「……………」アーニーの姿だけ、お兄ちゃんたちがつむらでこの
からいそんな激しく怖くは無いか？」やつぱり怖いよ……。

「キースエリナ、久しぶりね。私たちを覚えてる?」

「うん、久しぶり、エイシェリナさん」

「今日は私たちの子を紹介しに来たの。でも、ドーラモンのままだと

私たちの子が怖がるから、悪いんだけど人態を取つてもらえる?」

「え? うん、エイシェリナさん新しく生まれたの?」

「ええ、ほら、エーデルフィア出ておいで」

んきゅ、怖い、怖いつて! お姉ちゃん、私を頭から下ろしてお母さんに差し出さないで!

「Jの子がエーデルフィア。エーデルフィア、彼女はあなたの前に生まれた子よ。キースエリナって言うの」「初めまして、エーデルフィア? 私はキースエリナ、よろしくね」「よ、よよよ、よろしくおねがい、します?」

はう! 疑問形になっちゃったよ!... 疑問形にするつもりは無かつたのに!..

「緊張してるんだね、可愛い」

「あわ、あわわわわ」

「すついじに緊張してるね。そこまで身構えなくとも大丈夫だよ? ね?」

わわ、分かっててもそう簡単に緊張はほぐれないものなのです!

! お願いだから今はお母さんたちと一緒にいさせて! 怖い!

「ふむ、キースエリナ、エーデルフィアが怖がつておるよ! じゅし、今はJのくらいにしておれ。それに、今回の目的はお主の様子見じやしの。最近、体に違和感を感じたりはせんか?」

「うん？ 大丈夫だよ？ それがどうかしたの、大じこちやん？」
「いやいや、たまにおるでの。気に掛けとるんじゃ」

「うえす今は、おかーやーん！！

「んもう、大丈夫だつたら。怖くないからね」

お母さんはいつもながいも、私を優しく抱きしめてくれる。お母さん好き。

「ほり、見て」ひさ。キースエリナは全然怖そひじやないでしう
？ 大丈夫」
「あゅ、あゅい……」

うんと答えるはずが、また鳴き声か。びりしても、怖いときとかは普通に話せないよね。それも、いつになつたらそつならなくなるんだろ？。そつならなくなる日が早く来てくれないかな。
ちなみに、今日はこの町、といつかこの洞窟にお泊りらしいよ？.
お父さんには先に伝えてあつたとか。 いつの間に。
ん？ つまり今日は、私はこつてり知らないドリーハンたちと顔を会わせなくしてはならないとこつことか？ 死ぬ！ 帰さで死ねるー。

「お、お母さん、帰る？ 帰るつむ」
「ダメ。今から帰つても真夜中よ。こんな時間に帰つたら、フオ
ンショベルが驚いちゃう」
「帰るつよ、怖いよ」
「大丈夫だつたら。ユーテルフィアのそばには、絶対にお母さんがいるからね」

あわわ、それでも何だか怖いんだよう。大じこちやんですり、ま

だちよつと怖こその上ほかのドリームなんて、怖い対象以外何者でもないよ！」

お兄ちゃん、お姉ちゃんもそばにいても、それでもやつぱり怖いものは怖いんだよう！ 帰る、お家帰るわ。

「ぴきゅー！」

「わ、どうして泣いてる。大丈夫よ、ね？」

「そうね。俺たちだつてこのんだだから。だから泣かないで」「ぴきゅー、怖いよー」

ふええええん。つて、今日かなり泣いてるな。鳴いてもいるナビ、それなりに泣いてもいるよ。

「だから、怖くないつたら！ 大丈夫だよー」

お兄ちゃんたちは必死で宥めてくれるナビ、やつぱり怖いよ。

「大丈夫だから。お泊りは決定なの」

「ふみやあああああーー！」

「ど、どうしたのー？ エイシエリナさん、エーテルファイアどうしたの？」

「いやいや、ちょっと怖がってるだけだからー！」

「怖がつて、ああ！ 私たちが怖がられてるのかあ。エーテルファイア、私たち怖くないよー、何もしないよー。ほら、握手」「きゅいつー？ きゅるーー！ きやつきゅーーーー！」

「きゅ、拒否られた……」

あ、ごめんなさい。つい、本能的に……。でででも、本能的な恐怖だからそう簡単に拭えないんだよう！

恐怖だから那么简单に拭えないんだよう！

あわわわわ、怖くないからね、怖くないよ！」

あのね、怖くないっていうのは感覚的に分かってるの。だが、だが、本能が怖いって訴えてるんだよ。

もお兄ちゃんたちも傍観者化してゐるから、助けを求める上にも出来ないんだから。

「我好——！」

そろそろ限界なんだよ、助けておかーさん、おにーちゃん、おね
ーちゃん!

「あらう。キース王リナ、そろそろ口挿むね。エーデルフイア、お

「物語」

助けておねーちゃん！！ もうヤダ怖いー！ 本能的に怖すぎて限界だよーっ！！

もうヤダ全部ヤダ何もかもヤダーフー！！この時は、転生したのを本気で後悔するぞこんにゃろーつー！！

はー！ 失言でした、「めんなさい」、「めんなさい」だ
から怒らないでーー！ 誰に対してもワケじゃないけど、怒らない

「ふう、ザッカス、悪いんだけど一部屋用意してもらえる? 誰かの干渉を入れると、この子が大泣きしちゃう」
「分かつた。だから、もう泣くなエーデルフィア」

だから、近寄らないで手を出さないで！ ザックさんも怖いの
！！

「ザックさん、この子泣かせたら殺すよ？」

「お、おい怖いな。泣かせないよう努力するよ」

「そうね、そうしてちょうどいい。いくら私でも、キースエリナのお父さんを奪いたくはないからね」

お母さん、言つてること怖いよ。でも、近寄らないって言つのは歓迎だ。だつて、怖いもん。

とりあえず、私は現在、しっかりとお母さんにしがみ付いている。しっかりと、きつちりと、何があつても離れないよ。

それで、私たち家族だけになつてやつと落ち着けたよ。でも、まだ怖いからお母さんからは離れない、これ決定。

「エーデルフィア、大丈夫だから少し離れなさい、ね？」

イヤ。お母さんの言葉に、私はしっかりと首を横に振る。だつて、いつ、誰かほかのドラゴンが来るか分からないじゃないか！

だから絶対にはーなーれーなーいーつー！ 徹底的にしがみ付くんだ、じゃないと剥がされるーつー！

「ほら、離れなさいつたら」

「やーだーつー！」

「離れなさいー！」

「やだー！」

「じりー！ カーヴ、ティア、サーファ、手伝つて」

「ほら、じりおこでエーデルフィア」

「お姉ちゃんになりくつ付いていいから、ね？」

「前足、剥がすよ」

「やーだー！ 離れない、お母さんがいーーー！」

何があつたとせ、お母さんのそばが一番安心できるんだい！ だから、サーファ お兄ひやん お母さんにつっかりとしがみ付けてい る私の前足を強制的に剥がし取ろうとしないでください、ティアお姉ちゃん、私を受け入れる準備万端にしてこないでください、カーヴお兄ちゃん、溜め息つかないでー！

えぐえぐ。強制的に前足を剥がされながらも足掻いたよ。お母さんこしがみ付いたよ。おかげで、お母さんは諦めた。落ちとしては今まで以上にべつたりです。

だつて、あまりの強制さに私が泣いやつたからね、今も泣いてるからね。だからお母さんたちも諦めてくれたんだよねー。あは。

「んきゅ、きりゅー」

「ああもひ、分かったから。存分にお母さんにつくつ付いてなさい。だからほら、泣き止んで」

「ゴメンね、そんなに怖いんだね。もう無理やり離したりしないから泣かないで」

一度泣き始めると中々泣きやめないのは人間もドリゴンも同じの ようです。マジ泣きすると、中々涙が止まってくれません。だからか、お母さん除いてお兄ちゃん、お姉ちゃんが必死だよ。私を泣き止ませるのに必死でいろいろやつてるよ。焦りながい。お母さんは優しく声をかけながら、私をよしよしと撫でてくれるだけ。でもすつじへ気持ちいいですー。つていづか、気持ちよすぎ だろー……。

「うとうと、ぐいぐい、すか。……まつー。

「眠になら寝なさい? こっぽに寝たほうが大きくなれるんだから
「んー、でも、今寝たら夜にお腹空いて、起きちゃいそ……、ぐう
「いいから寝なさい。ほら、H-デルフイアはいい子だからねー」

しゃべってても眠たい……。うん、限界だから寝るね……。おや
すみー、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん……。ぐう。

夜。やつぱり空腹で皿が覚めた。おかーわーん、お腹空いたよー。

「あい、おはようH-デルフイア。ちゅうと待つてね

あ、お母さん案外近くにいた。探しに行かなくちゃかと思つたけ
ど、その心配は杞憂だった。

そして、私が空腹なことに気がついたお母さん、そばに置いて
あつた刃物を手に取つた。! ? 何? んー?

そしてその刃物は、お母さんの腕をきれいに滑り、お母さんの腕
からはだらだらと血が流れ始めた。

ここにきて。

「今日はお母さんの血で我慢してね。お家帰つたらフォンシュベル
の料理を食べられるから
「えわわ、じわわっ」

いくつになつてもお母さんの血つて美味しいものなのか? 最初
は本気で抵抗あつたけど、今は、抵抗? 何ソレ美味しいの? 状

態だしなあ。

だつて、美味しいんだよ？ 甘くて、優しくて、何かに例えることは出来ないけれど、それでも安心できる味なんだ。

んぐ、美味しい、落ち着く。

眠い……。

「よしよし、こいつぱい飲んだし、また寝なさいね」

優しい、温かい。
眠りに、落ちた。

ただいまです

「おとー セーん！！」

会いたかったよう、一日会わないだけで寂しかったよう。ぴにゅー。

「お帰り、エーテルフィア、エイシェリナ、カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。キースエリナは元気そうだったか？」
「ただいま、フォンシユベル。キースエリナはもちろん、ザックカスもチエイリンも元気そうだったわ」

あ、チエイリンっていふのはキースエリナさんのお母さんの名前ね。会つたけど、会いはしたけど、恐怖で殆ど覚えてない、ごめんなさい。

だつて、知らないドリゴンだよ！？ お父さんやお母さん並みに大きいドリゴンだよ？ 怖いに決まつてるじやん。

「きゅー」

「んー？ どうしたエーテルフィア。お父さんと会えなくて寂しかったか？ そうなら嬉しいな」

「んきゅー」

「お？ そうなのか？ エーテルフィアは可愛いな」

だつて、お父さんに会えず、この大好きな空間にも戻つて来れず、知らないドリゴンたちとの遭遇を果たしたんだよ？ 怖がったんだよ？

おとーさん！ 安心できる空間、存在。大好きだよお父さん。

「よしよし、今日はずっとお父さんと一緒にいような」

「うんー。」

お父さんが「いつの間に」とは、今日はとにかくお父さんと一緒にいてもいいって言つたんですね、分かります。

つまり、今日はずっと一緒にいれるから、疑問に思つてることも聞けるんだよね。 ドラゴンの属性についてとかね。

大じいちゃんにドラゴンの属性を聞くつもりだったのだが、ついつこというか、恐怖のせいか忘れてたんだよね。

だからお父さん、おーしゃーえてー？

「ん？ ドラゴンの属性？」

ドラゴンの属性は、まず六つに分けられる。お父さんやエーテルフィア、オースティアの赤色は、火。お母さんやカーヴァンキス、サーファイルスの青は水だな。

そして、長老とは会つたんだよな？ 長老は真っ白だつたらつ？ 長老の白は、光を表す。

次は、属性とは何かの説明に行こうか。ドラゴンにとつて属性というものは、一番加護の受けられる力、だ。

だから、カーヴァンキスたちは属性は水でも、炎の魔術を使えるだろう？ それは、一番加護の受けられるものが水であつて、火を使えないわけじゃないからね。

そして、ドラゴンはその属性のものに接していると、何だか落ち着けるみたいだね。エーテルフィアは、近くで火を使つてると落ち着かないかい？ お父さんは落ち着くよ。

それに、お母さんは水と接していると落ち着くみたいだね。寧ろ、

火は若干苦手らしい。それは、お母さんの料理を見ていれば分かるだろ？

あ、これはお母さんには絶対に内緒だぞ？ 絶対にお母さんに言つちやダメだからな？

お母さんが、料理が壊滅的に下手だつて。

「うん、言わない。約束する。だつて、言つたら絶対お母さんが怖いもん！」

「よし、いい子だ」

「うん！ 私いい子だよ！」

「うんうん、いい子だな。ほかに聞きたいことはあるか？」

「んと、加護つて言つのは結局どうこのもの？」

「加護は、魔術を覚えたときに詳しく述べてやるの。今のHーテルフイアには難しいからね」

「何ぞそれ。今知りたいのに、今は教えてもらえないのか。まあ、属性のこと教えてもらえたからいいかな。

まあ、とにかく今は聞くこと聞いたし、お父さんに甘えておけばいいかな。すりすり、頬ずり。

「ははは、Hーテルフイアは本当に可愛いな。ほら、この間買つてきたお菓子を食べようか？」

「えむー？ うん、食べるーー！」

お姉ちゃんたちの脅しでいつぱい選ばれたお菓子。美味しいから幸せなんだよね。……昨日はお母さんの血しか飲んでないから余食べて

「目に盛るから少し待つでなさい」

お父さんはさつまいで、買つてきたお菓子を取り出して目に盛りで行く。その途中で、お父さんはお菓子を一つ取つて、頭の上の私に手渡してくれる。はぐはぐ。あ、お父さんの髪にお菓子がぽろぽろ落ちて行くや。

「ちよ、食べるなら下りてから食べてくわ」

「ああー、『じめんなわあ』」

もひつたから、ついつい早く食べくなつたの……。

「ふう、お父さんは頭を洗つてくれるから、Hーテルファイアはいいでお菓子を食べながら待つてるんだぞ、いいね?」

「うん、『じめんなさい』」

「謝つたからかまわなこた。今度からは気をつけるんだよ」

お父さんはさつまいで頭を洗つたためにじんじんと進んでいく。さて、私はお菓子をはぐはぐと食べながらお父さんの戻りを待つことにじよつ。

あ、やつぱりお菓子美味しいわ。この世界のお菓子もかなり美味しい幸せだわー。

とりあえず、お父さん早く戻つてこないかな? どうせならお父さんと一緒に食べたいよね、美味しいし。

お兄ちゃんたちやお母さんは、昨日になかった分のお詫びとして、お父さんのために大きいのを仕留めに狩りに行つちゃつたし。

お父さん、早く戻つてきてよ、寂しいよう。

「わわわ、なんやー」

「おー、どうしたHー『テルフィア

「あーいーつー！」

寂しかったよう、寂しかったんだよう！　おとーさん！
私は髪を拭いながら戻ってきたお父さんに飛びついた。……片手
にお菓子を持ったままで。

「お、おお？　どうしたんだ」

食べて。お父さんに田線で訴えながらお菓子を差し出す。一緒に
食べて？　一緒に食べよつ？

「お父さんくれるのか、これ？」

「ああ」

「うん。お父さん一緒に食べよつ。一緒にいて、一緒に食べて、い
っぱいお話しそう？」

「分かった分かった。ほら、Hー『テルフィア、あーんつてするから
……」

ん？　これは口に入れてくれつてことですか？　んじょ、よいし
よ。私はお父さんの口元に持っていたお菓子を運び、口に入れれる。
お父さんはおいしそうに食べてくれたよ。

そして次は立場逆転らしい。お父さんは片手で私を抱き、余った
片手でお菓子を取り、私の口元へと運んでくれた。

「まひ、あーん

「あー、むつ」

「うん、美味しい。だから、今度は私の番ー。

「おとー もと、はー」

「あら、楽しさがない。H-テルファイア、お母さんもかわづ
だい」

やつやつとしょらくしてたら、お母さんたちが帰つて來た。お母
さんにも求められたから、しつかりとお母さんにもあーんつてした
よ。お母さん、喜んで食べててくれた。喜ばれると幸せに感じるから
いいな。

あれ？ 今度はお兄ちゃんたちも？ いこよ、順番にあーんつて
してー。

「うん、美味しい。H-テルファイアもあーんつてして、ほり
「あーん」
「次私ねー。H-テルファイア、ちょうだい」
「うん！ あーんつてしてー」
「あーんつ。んぐんぐ、美味しいなあやつぱり。次はH-テルファイ
アの番。口開けてー」
「あーん、むぐむぐ」
「次！ 次俺！」

いつして結局お菓子の食べさせ合つてはお父さんと私じゃなく
て、お兄ちゃんたちと私になつちゃつたよ。樂しいけどね。樂しい
からいいんだけどね。

やついつしてると、お父さんの用意してくれたお菓子はあとと
いつ間になくなつてしまつた。いっぱい食べたなあ。

ちなみに、お父さんはこの間にいじ飯の準備にかかっていたよ。

でも、でもね……、こいつぱこお菓子食べて、こいつぱこお話をじつてしたからかな？ 眠たくなってきたの……。

「眠こ……、寝て、こい……？」

「ん？ ああ、俺たちが狩りに行つてこる間に寝てなかつたのか。なら、眠たくなるだらうな」

「なり、寝ちやえ、寝ちやおうへ」

「よしそし、俺たちがこるから心してお休み？」

「うそ……」

もつ、ベッドまで戻るのも面倒へせこから、そのまま寝るね……。おやすみ、なきあい。

「……、ルフィニア……？ 起きてるへ、」飯だよ

「んみゅ？」

「おまよひ、」飯の用意が出来てるよ。起きて、食べたらまた寝よ

うな

んあー、よく寝た。でも、さつきこいつぱこお菓子食べたからそんなにお腹空いてないなあ。

でも、食べなくちゃね。だって、お父さんの料理だもん、昨日は食べられなかつた」飯だもん！

だから。

「ふう、やつぱこお毎寝の後は自分で飛ばすとしないんだね

「だつて、落ちたし」

「うん、でも恐怖は頑張つて振り払わなくちゃ」

「お姉ちゃんは、私が飛ぶのに失敗して落ちてここの？」

寝起きで、潤んだ瞳で訴えてみる。落ちるのは痛いからイヤだなあ、痛かったもんなんあ。

だから、お願い肩に乗せてー。肩に乗せて運んでー。

「ふう。まだ、まだ10歳だからいいか。まだ小さいもんね」「うんー。おっしゃくなつたらちやんと自分で動くから、ちっちやい間はお願ひ

そうして席に着くと、美味しそうな料理が私たちを出迎えた。お父さん、昨日の分も込めて、料理にかなり手を込めたね！？

「や、食べなつか」

お父さんの畠葉にて、喜んで歎き付いた。こへー、くわー、「うわー！」

あ、いつも以上に肉に味がしみてるよ美味しいよ。これはかなり長時間煮込まなくてはここまで味がしみないのでなかろうか。
んぐんぐ、はぐはぐ。つて、今日は肉と骨を別の料理にしてるのか。骨は骨だけで別の味付けがされてるもん。

「美味しいか？」

一 美味しいね。さすがアランシエール。

「んまい」

「ホント美味しいー」

「この味付け、今度教えてくれなー」

「ニセモノ……」

お父さんが問い合わせると、みんなが順番に返事を返す。やっぱり全員の答えは一緒に、美味しい、だ。

だって、美味しいんだよ、これ。あんまりお腹が空いてなくても食べたくなるもん。

でも、やつぱりお菓子でたまつたお腹には、ちよつとあつかったかな。

「ん?
もういいのか?」

うん、お腹いはい

お葉子を食ひながらか

うん、そのとおり。お菓子がまだたまってるから、ご飯がいつも以上に食べられないの。せっかく美味しいのに。

ラゴンは、お腹が痛くなつても温かくして寝るべらりしか治療法がないから、しばらく苦しむくちやだしね。

な

「うん。おやすみ、お父さん、お母さん、カーヴお兄ちゃん、ティアお姉ちゃん、サーファーお兄ちゃん」

ああ
おやすみエリテ川ノイア よし夢を

さて、私はベッドに戻つてぐっすりと寝るといふ。今私は食べてすぐ寝て大きくなるのだから。

食べた分の栄養をしきりと成長にまわすためにも、とにかく今は眠らなくては。

洞窟を満喫しましょう

「えへー、あむぬー。今日はお兄ちゃんたちと一緒にこの洞窟の探検だー。」この洞窟は広いから、探検のしがいがありそうだよね。でも、私一人で探検をすると、間違いなく迷子になりそうなので、今日は案内役にお兄ちゃんたちがこるのだよ。これで迷子にはならないねー！

「さて、まずはどこに行くよ？　とつあえず奥から見てこってみる？」

「うふー。」

知らない場所は、見て覚える。とつわけで、自分たちの住処くらい覚えておきたいから案内してー。

「とつわけで、やつて来ました、洞窟の最深奥。初めて純粹に行き止まり見た！　ここが行き止まりだ！」

「Hーデルフィア楽しそうだね。洞窟の一一番奥を見ただけで」のトンショーンって、大丈夫かな？」

「疲れて寝ちゃつたらベッドに運んでもげればいいんじゃない？」

「ねー、Hーデルフィア？」

「うふー。」

疲れたら、多分お姉ちゃんの頭の上で寝ると憩つかり、そのままベッドに運んでもくれると嬉しいかな。

とりあえず、お兄ちゃんたちの頭の上で寝ること無こと憩ひ。

だって、髪の毛つんつんで気持ちよくなーいし。

とつわけで、最奥部から少しすつ、入り口や私たちの居住空間

のまつまで、のんびり進んで行こー！

「あ、何か置いてあるー！ あれ何ーー！？」

「ん？ ああ、ここ物置にしてる空間だからね。エーデルフィアが言つたのは、お父さんの料理道具の一つ」

「そして、ほら。これ、エーデルフィアが人態を取れるようになつたら着せようと、お母さんが集めてる服たちだよ」

「ん？ 私が人態を取れるようになつたら？ って、お母さん用意早くない？ 人態って100近くにならないと取れないんじゃないの？ 私まだ10歳なんだけど。

「っていうかさ、これって私よりも、ティアお姉ちゃんのつて言われたほうが説得力あるよね。

「これ、正真正銘エーデルフィアのだからね？ 私のは別にしまつてあるし」

「あ、そなの？」

「お母さん、服とかつてかなり早めに用意しておくタイプみたいだからね。お兄ちゃんもそうだったみたいだし、私も、サーファーのときもそうだったからね」

お母さん、結構早いうちに用意して、成長を楽しみに待つタイプ？ 「うーむ、私がこの服を着れるのは何十年後の話だろ。」

ま、いいか。お母さんだつて分かつてやつてるはずだしね。急いで人態を取ろうとせず、のんびり大きくなる。

でも、食べるときはいっぱい食べて、そんで動き回つて疲れて、いっぱい眠るよ。そのほうが大きくなれるもん。

「さー、物置部屋を見てばっかりじや面白くないし、次行こうか」「サーファの言うとおりだね。行こう、エーデルフィア、お兄ちゃん

h
L

「おお、そうだな。行こうね、エーテルフィア

おー！ 物置で自分がいずれ着るであろう服を見ていたつて面白くもなんともない！ 次だ次ーーー！

そして次についた場所は、カーヴお兄ちゃんの私室だつた。お兄ちゃん曰く、元々の状態から追加して掘つて、部屋を広くしているらしい。どおりで広いと思った。

それでも、カーヴお兄ちゃんの部屋つて、何で言つか、殺風景？ お兄ちゃんがギラゴシに寝つても眠れるもんねえだ？ つ

て言つのか、これ。

前世で見た某アーティストの手紙の返信のやうなもののかあつた。でけ

事実、お姉ちゃんから下りてベッドに飛び移り、

端まで転がっても、ベッドから落ちたことはないか、ベッドの端まで行くことは出来なかつた。

「エーデルフィア、俺のベッド、そんなに楽しい？」
「うん！ カーグお兄ちゃんのベッドおつきいー！」
「まあ、エーデルフィアからすれば大きいよね。でも、ティアたち
のもそんなものじゃないか？」

た、確かに！ でも、お姉ちゃんとか、サーファーお兄ちゃんのドラゴンの姿つてあんまり見ないから、ベッドの大きさを想像し辛いって言うか…………。

ちなみに、お兄ちゃんの部屋には、あとはちよことした筆管と机が置いてあるだけでした。うん、次行こう?

つていうか、お兄ちゃんたちの部屋、結構並んでたんだね。お姉ちゃんたちも自力で掘つて部屋を広くしてるんだね。

「ほら、私のベッドも大きいでしょ？ 飛び込んでいいよー」

「うわあい！」

許可が下りたところで、思い切りダービー！ 「ぐるぐる、ぐるぐる。お姉ちゃんのもおつきこー、ぐるぐるしがいがあるー。いくつもぐるぐる転がっても、やっぱりベッドの端にすらつかないあたりが、ベッドの大きさと私の小ささを物語ってるよね。それにしても、私が自分の部屋を手に入れるのはじつは話だらうなあ。まあ、まだまだいるんじゃないんだけどね。

そして、しばらぐぐるぐるして落ち着いたところで、冷静にお姉ちゃんの部屋を眺める。お姉ちゃんの部屋は、お兄ちゃんの部屋と比べると、中々華やかだった。

だって、ベッドのほかに箪笥、机が置いてあるのは変わらないけど、そのほかに花とかいっぱい飾つてあったもん。やっぱり、花の一つだけでも雰囲気がかなり変わるよね。

つて、あれ？ 机の上に何か置いてある。何だろ？ パタパタと飛んで、机の上に飛び乗る。

机に飛び乗ると、そこに置いてあつた本かな？ これは。とりあえず、本の表紙が田に入つた。……読めない。

「お姉ちゃん、何で書いてあるの？」

「観察日記」

「観察日記？ 何の？」

「ナ・イ・シヨ」

ナイシヨって、ひどいなー。やつ言われたら余計気になるじゃないか。だから、ね？

「おーしーえーでー？」

んきゅるー、とにかく、じつと見つめる。お姉ちゃんたちが折れるまで、とにかくじつと見つめるべし。

「ねえ、お姉ちゃん?」

少し首を傾げて問うてみるべし。

「お姉ちゃん、教えて欲しいな?」

最終手段、少し目を潤ませて、じつと見つめるべし。

「んきゅ、知りたいのに……」

「わわ、『ゴメンね!』でも、教えられないと『ごめんなさいの、『ゴメンね!』」

「んきゅう……」

何だ、結局教えてもらえないのか。うーん、私には難しい内容なのかな? それならそういう言つてくれれば簡単に諦めるんだけど、何も言わずに断られるところと辛いなあ。

あ、やっぱー。田にじんじん涙が溜まつて来た。これは、落ちる。

「わーっ! なな、泣かないでエーデルフィア!」

「ティア姉、もう少し優しい言い方すればよかつたんだよー。」「うーー! 『ゴメン、エーデルフィア!』」

ふえ、謝らないで。泣いたのは私の勝手なんだからさ。泣いたことに關してはお兄ちゃんたちは何も悪くないんだから、謝らないで

よ。

考へてたらじどりどりと涙が溢れ始めた。ふええええええ。

「「「メン、泣かないで！」」

「そ、そだ。今度本を読んであげよつね。それで文字を覚えるといいよ」

「俺も読んあげる！だから泣き止んで！」

「うう、それでも中々泣き止めないんだよう、えぐえぐ。とうあえず、今はお姉ちゃんに抱きついて宥めもらつてこる。

でも、やっぱ中々泣き止めず、お姉ちゃんの部屋を去れずといふ。お兄ちゃんたち曰く、この状態でお姉ちゃんの部屋を出て、仮にお母さんにも見つかつちのならば何をされるか、何を言われるか分からぬから、らしこ。

そして、今日ようやくで泣きやめた頃には完全に疲れ切つた。うん、もうお姉ちゃんのベッドでそのまま寝てもいいかな？
おやすみなさい。

だつてね、だつて、もう眠たいんだよ、泣きすぎで。だから、そのまま寝かしてね。

目が覚めたら、自分のベッドに寝かされてた。あの後運ばれたらしいね。全然気がつかなかつた。

それにも、何だか目元が若干腫れぼつた感じ？ 泣いて眠ると目が腫れぼつたくなるのは人間もドラゴンも同じなのかな。

それに、完全に泣き止めずに寝たからか、どうも頭がボーッとするね。って言ひうか、熱あるときとかこんな感じだよね。

……熱出したかな？ でも、ドラゴンって熱出すのか？

聞きに行くか？ でも、頭がボーッとして起き上がるのも辛

いな……。

「エーデルフィア、目が覚めたの？」

「んきゅー……」

おお、グッドタイミングです、お姉ちゃん。

「あれ？ ちよ、大丈夫？ ちょっと抱き上げるよ
「きゅー」

おお、私に触れるお姉ちゃんの手が冷たくて気持ちいいぞ。って
いつか、気持ちよすぎると……。

「ちよ！ お母さん、エーデルフィア熱い！」
「え！？ オースティア、エーデルフィアをー」

お姉ちゃんがお母さんにそいつと、私の身柄はお母さんに移る。
おお、お母さんの手も冷たくて気持ちいいぞ……。

「あ、ああー 何でー」と……。大丈夫？ 辛いでしょー？
「きゅー」

うん、しゃべる余裕も無いくらいに辛いの、頭がボーっとするの。

「可哀想に、今日は一緒に寝よつね。ずっと、看病するから
「きゅー、きゅー」

あ、お母さんと一緒に寝るのは嬉しいな。といつか、今は頭ボ
ーっとするから起きていたくないな。寝てもいいかな?
っていうか、もう寝るね。だって、お母さんの手が冷たくて気持

ちここしほ。

また目が覚めたら自分のベッドだったよ。ただ一つ違うことは、ベッドの場所が移動していること、いつもみんなが集まる部屋に置いてあるって言うことかな。

これは嬉しい。だって、目が覚めたらみんな、そばにいるんだ、そばにいてくれるんだ。

「目が覚めたのね、ホールフィア。」飯は食べれる?

「んきゅ、いら、こやー

「」飯は、珍しくといふか転生して初めて食べようと思えないんだ。
そうしてみると、光るもののが目に入る。

……お母さん、ナイフ持たないでよ、怖いよ。

「ほり、食べられなくとも飲みなさい。お母さんの血は栄養がある
んだから」

「んきゅ」

あー、そのための刃物ね。でも確かに、今は何かを食べるよりは飲むほうが楽だよね。それに、飲むものはお母さんの血だ。美味しい美味しい、お母さんの血なんだ。

そう考へている間に、腕からだらだらと血の流したお母さんは私の眠るベッドに近寄つてきていた。私はお母さんの血を求め、必死で体を起します。

「ん……あゅ……」

なのに、鼻先にこじこじおいが漂つていて、体を起しますのが辛

い。

「よつぱり辛いのね。ほら、抱えあげるよ」

お母さんも苦つて、血の流れていらない手で、必死に起き上がり足搔く私を抱き上げ、血の流れる腕の田の前まで運んでくれる。

やつと、田の前に「馳走が……！」

「んづぐ、じわむ、んわむ」

体は辛くても、田の前にいいにおいが漂つていれば本能的に求めに行くものですね。あまり食欲は無かつたはずなのに、お母さんの血はすんなりと私の体におさまっていく。

でも、やっぱり調子は悪いみたいだ。いつもよりもかなり早く、満腹だと感じられた。

「もういいの？」

「きゅ」

「なら、また寝なさいね。一晩ぐつすり寝れば元気になれるから」

うん、その言葉信用してもいいんだよね？ 早く、元気になりたいな。

元気いつぱいです

「うん、一晩ぐっすり寝たら、次の日の朝には元気いつぱいだった。のに、なのに！今日は狩りに行くのはもちろん禁止だし、お父さんとお母さんの田の畠かない場所に行つてはいけないという条件が出された。

「元気だと書つていろのに、それでもそこしまで私の行動を制限するか！」

「ヒーデルフライア、自覚してないんだろうナビまだ熱いんだよ？今無理をしたらまた昨日みたいに辛い思いをすることになる。いいのか？」

「…………まだ熱い？」

「そう言いながら、甘えも兼ねてお父さんに頬ずりする。お父さん気持ちいいー。

「やつぱり熱い。お父さんの手、冷たく感じるだろ？」「ヒーデルフライアがまだ熱いんだ」

「でも、元気だよ？」

「昨日がひどかったから元気に感じるだけじゃないか？ いいから無理をせずにはいられない」

「くう！ 逆効果だつたか！ でも、お父さんの手は本氣で冷たくて気持ちいいんだよ。くわう。

「でも、大人しくなつたからって、寝るわけじゃないよ！ お父さん、私を無理やりベッドに下さうとしたしないでください。私はまだ寝るつもつはありません。

「きゅーー。きゅ るつ くーー！」

「あ、こりゃ暴れるな。暴れたらまた辛くなるぞ」

やだーー。ベッドに下ろされたら強制的に寝かされるはずだ！
お昼寝と夜以外に寝るつもりは無いんだい！

「ほり、休みなさい、いい子だから」

「やだ！ 元気だから寝ない！」

子供の時間といつもの短いのに、それをこんなことでふいにしてたまるか！

だから、強制的に下ろそうとしないで！ お父さんの頭の上でも十分に大人しくしておけるじゃないか！！

「エイシエリナ、手伝ってくれ」

「ふふ。エーデルフィア、お母さんの頭の上におりで」

「うんー！」

寝なくていいなら移動するー。といつわけで、現在お母さんの頭の上。え？ ちゃんと大人しくしてあるよ？

「フォンシュベルもまだエーデルフィアが分かつてないみたいね。エーデルフィアは、頭の上では基本大人しくしているものよ？」

「むむ、そつなのか……」

ま、お父さんの上だと、アレ見たいこれ見たいで動き回るけどね。お父さん、聞いたら丁寧な説明をくれるんだもん。お母さんは、言つちゃ悪いけど説明がすつごいアバウトなんだ。

だから、お母さんの頭の上だと基本大人しめ、でも、お父さんの頭の上だと、質問尽くし。あはは、子供だからといってことにして

おいて。

というわけで、お母さんの頭の上で大人しくしていい。が、大人しくしようと意識すると、どうしても眠くなるものなのでしょうか。お母さんは温かいし、落ち着くし、気持ちいいで……、眠くなつてきた。

だ、だがね！ 寝ないよ、寝ないんだから！ せめてお昼寝の時間って言つても違和感のない時間までは起きておきたい。今寝たら完全に”昼”寝じやなくて”朝”寝だ。

まこちゃん、ぐるぐる 眠し 眠したけど

「お怒るなエーテルフィア。眠いならベッドで寝ような?」

そろ一いつと私をお母さんの上から取つて、ベッドに運ぼうとする
なーつー！ そんな意味を込めて、私はお父さんにこの鋭い爪を見
せ、威嚇する。人間の姿を取つたお父さんには、私のこの爪は十分
凶器となるようだ。

そうやって威嚇した私と、それでも私をぐいぐいで運び出すね
父さん。睨み合戦が始まったよ、負ける気は無いよー。

「眠たいんだり？　なら、ベッドで休もう、な？」
「まだ寝ない！　まだお昼寝の時間じゃないもん！」

今はまだ朝だもん、早いもん。

「もうこう問題じゃないだろ？」「

「せつまつのを考える余裕があるなら、今は眠りなさい、ね？」

今は寝ない！　まだ朝だから寝ない！　絶対に寝ない！　あ、お風呂すきたら寝るよ。.

「まだ寝ない！　元気だもん、大丈夫だもん！」

きじゅーーーとこかく爪を出した状態で前足を振り回す。お父さんはいに威嚇。でも、今回はそこまで意味が無かったみたいだよ。あいつと私の前足はお父さんに掴まれ、強制的に黙らされて捕獲された。

「わあ、ベッドにつけつか。そのまま寝るんだよ？」

「やーだーーー寝ない、寝ないからねー！」

へんう、ビニまで徹底的に寝かすつもりだー？　まだ寝ないって言つてゐじやないか！！

はーなーせー！　はーなーしーでー！　足搔くのだが、お父さんはしつかつと私を抱き、とこか捕獲していて離してくれない。このままでは完全にベッド一直線だ。

「寝ないーーー起きてるのーーー離してーーー！」

どれだけ訴えてもお父さんは離してくれない。しまった、ベッドはすぐそばだーーー！

「ほーら、いい子だからベッド寝よつか

寝るもんかー！　ベッド下ろされた瞬間に起き上がり、羽を広げ飛ぼうとする、が、当然ながらお父さんに阻止された。お父さんは私の羽を掴み、羽ばたけないようにする。

へんう、離してーー！　寝ないんだからベッドにいる必要なんて無

「いじやないか！」

「寝なさい。いい子だから大人しく寝なさい。いいね？」

「よくない！」

「いいね？ 寝なさい」

「……つーむ、今のお父さんとは何を言つても無駄かな？ 仕方ない、今は寝たふりでもして、しばらへしてから元気になれば動き回るか。

くつと丸まる。お父さんが安堵の息をつくのが聞こえる。
しばらへは寝たフリを遂行します。

あ！ 睡てたし！ 普通に寝ちつてたよ！

しばらへは寝たフリをしておく予定だったのに！

それなのに、目が覚めたらいざ飯の少し前か！ お兄ちゃんたとお姉ちゃんたちがそばにいたよ。

「おはよっ、エーテルフィア。調子はどう？」

「よく寝てたね。もうすぐご飯だけど大丈夫？」

「辛いんなら、無理せずに言つてね？」

「きゅー、へーわ……」

「……ちゃんと寝惚けてるだけだし。しかし、まだ結構調子悪かったんだね、こんなにずっと寝ちゃうなんて。

目的としては、あのときしばらへ寝たフリをして、しゃつと起きてお腹を完全にお腹にして寝飯前に起きのつだつたの。
「本当に大丈夫？」 無理はしなくていいんだよ?
「だいじょーぶだよー？」 まだちょっと眠いだけだから
「本当に大丈夫？」 無理はしなくていいんだよ?
「だいじょーぶだよー？」 まだちょっと眠いだけだから

「これから動けば田も覚めるから何の問題もないって。だから、動きたくなるネタが欲しいな、お兄ちゃんお姉ちゃん。

とりあえず、今はお姉ちゃんの頭の上に移動するか。

そうやって移動したら、何でかな？　すぐに下りられて、抱きしめられた。

「うん、昨日と比べるとそんなに熱くないね。昨日は焦ったよ、本當に」

「えっと、その…………「ermenね？」

「謝らなくていい、Hーデルフィアは悪くないからね

やうしてたら、お兄ちゃんたちからも手が伸びて、思いつきで撫でられた。気持ちいいからもつと！　もつと撫でて！

「うん、そんなに熱くない。もう大丈夫かな？」

「Hーデルフィア、今日はこの手を手に入れたから！」馳走のはずだよ。今日はしつかり食べて、完治をせようね

「J)馳走！？　うん、いっぱい食べるー！」

「馳走楽しみ！　昨日は食欲なかつたからお母さんの血しか飲んでないんだ、今日は食べるーー！」

あ、でもにおい的には」「飯までもうちよつと時間あつそうだよね。それまでどうしようかな。

「うん、まあいいか。とりあえず今はお姉ちゃんに抱かれたままでいよひ、落ち着くからね。

「カーヴ、ティア、サーファ。Hーデルフィアは起きた？……つて、起きてるね、調子はどう？？」

「おかーさん！」

「うわあい、お母さんだお母さん。私はお姉ちゃんの腕から抜け出し、お母さんに飛びつく。

おかーさん抱っこして！ かまつて！ 撫でて！！

「ああ、よかつた。大分熱くなくなつたね」

「うん！ もう大丈夫だよ、元気だよ！」

だから、遊んで、かまつて！ 『』飯まで時間があるんだから、それまで遊ぼー！

「わよ、今日のこの子は随分と甘えん坊ね」

「いいんじやない？ 可愛いから」

「私も思つ。可愛いは正義」

「確かに」

あはは、何かよく分からぬ正義が出来上がつてゐるけどまあいいのかな？ 可愛いは正義つて何。

でも、かまつてくれるなんならそれでいいや。

「わーい！ 遊ぼー何かしょー何かしてー！」

「ふふ、何をする？ ハーデルフィアは、まだ無理はダメだよ？」

「んつと、えつと……。あ、そつだ！ 何か本を読んで」

私が大泣きしちゃつたとき、お兄ちゃんたち言つてたよね？ 本を読んでくれるって。だから、読んで！

「ハーデルフィアの文字の勉強になるような本は何があつたかな…

「書庫を見に行く？　ああ、でもやつしたらやの間にいり飯出来るね」

え？　あれ？　それだと本読めないって言つてるよね？　約束は
？　面白くない！

「ひーまー　本ー！」

「ちょ、読まないとば言つてないんだから。読むなら明日書庫を見
に行つてからにしようね」

「うむ、なら今日はどうしようか。」」飯、まだ出来ないかな。ご
飯が出来るまでは退屈だよ。

退屈なときつて、何してたかな？　「う、大体がお母さんと洞窟
を出でどこか行つたり、お兄ちゃんたちとどこのか行つたり……、つ
て、どこか行つてばっかりじゃん！

今日は、多分出れないよね、出してもらえないよね。でも一応…
…。

「お母さん、退屈だし洞窟の外に……」

「ダメ」

「行きたいな、って最後まで言えなかつたよ。言い切る前に反対が
飛んできた！」

「だつて、退屈だよ

「今無理をしたつまた明日熱くなつちやうでしょ。今日は洞窟から
出たらダメ」

「やうだよ。ああ、そうだ。お父さんが」「飯作つてるとこを見に
行こうか。うん、そうしよう。」

お父さんの料理シーン……。うん、見る！

「田が輝いたね、行こう」

あ、お母さん来ないでね、怖いから。手を出しそうで怖いから。
黒魔術展開されるのいやだから。

ちなみに、その意見はお兄ちゃんたちも同じようです。

「お母さんは来ないでね、料理に興味持たれると俺たちが危ないか
ら」

「うん。前みたいにエーデルフィアに泣かれたら困るからね」

「お母さんの料理は呪いだ」

「うん、呪いだよね、黒魔術だもん。だから、お母さん除くでお父
さんの料理を見に行こー！」

「お、どうした？」「飯なりもつすぐだぞ？」
「お父さんがご飯作つてるとこ見に来ただけだよ」
「そうか。ああ、近寄りすぎると危ないからな」

お父さんはそういう言ひながらもけしなく動いている。あ、いいに
い。

「エーデルフィア、今日は期待しておけ。カーヴたちがいいのを捕
らえてきたからな」

「うん！ 聞いた、楽しみ！…」

すつしーいにおいもしてゐから、楽しみが増えたよ。ふふ、今
日は本当に駆走かな。

ついで。置いていかれたお母さんご飯のときに遭遇したら、何
か怒つてた。怖かった。

→ 馳走の時間です

「二つただつもおーすーー。」

「駆走ー！ すつごい美味しそうー！ いただきまーす！！ 言つと同時にかぶりつく、味わう、美味しいー！」

「美味しいかい？」

もう最高！！ 昨日食べられなかつた分、今日はいっぱい食べれて幸せだね。肉ー！ 肉ー！

あ、ちゃんと草もあるんだね。草も食べなくちゃ。肉を食べて、草を食べて、平均的に食べると健康によさそうだし。健康つていいよね。健康つて、平和だよね。健康だったら何にも阻止されたりしないから、健康を目指すよー！

それにしても、今日は最初から肉と骨が分けてあるんだな。食べやすくていいんだけどさ、いいんだけどね。

楽しいんだよね。
でも、美味しいからそれでよしーー！

「おつと、ペースが随分と早い。詰まらせないようにな？」
「きゅー！」

「あやふつ」

美味しかった、満腹ー。お腹^{はら}がぽんぽん音^{おと}がしそうだな。

昨日^{きのう}飯^{めし}を食べられなかつた分^{ぶん}か、ホントにぱこ食べたわー、幸せだわー。

「うつわー、まさか全部食べるとは思わなかつた……」

「ふふ、かまわないわ。満足したか? エーテルフィア」

「うんー、お腹^{はら}いつぱーーー」

それだけ考えればとっても幸せだよ、幸せだ。でもわ、お母さん、いつまで怒つてるの?.

「お、お母さん?」「何」

疑問形でもなんでもないよお母さんー。まだ置いていったこと怒つてゐる!?. そろそろそのお怒りを解いてよー。

お母さんの言葉に感情を感じられないからすつゝこ怖^{おそ}いよー。おとうやーん、手伝つて!

「エイショリナ、何をそんなに怒つてるんだ。ほひ、エーテルフィアが怯えてるぞ」

お父さんま飛び込んできた私を撫でながら言つ。お母さんが怖いよー、お父さん何とかしてー!

「怒つてないから。ただちょっと悲しかつただけで
「ん? 何があつた? ほひ、言つてみる」

お父さんはそう言いながら私をお姉ちゃんたちに渡し、渡された
私はそのままベッドへ直行することとなつた。

お父さんとお母さん、今頃大人の時間を満喫してゐるのかな?

「さ、エーテルフィアは寝ようね。調子が悪くなつたつて言つても、
まだ万全じやないでしょ?」

「それに、寝ないと大きくならな」からね

「うん、そうだね。それに、お父さんとお母さんのいつけこつけのリラ
ブラブな声は聞きたくないから早く寝るね。

……なのに、どうして途中で目が覚めるかな。一人の睦言が思
いつきり聞こえるんだけど。前世の経験上、ちょっとやそっとくら
いなら慣れてるけど、転生してからそんなものに一切縁が無かつた
から、ちょっと、その……。

「エイシエリナ」

「フオ、フォンショベルフ、……んつ」

甘い、甘いよ一人ともー、寝てる私に聞こえる範囲でそんな睦言
呴かないで!!

あ、ああああ、熱い。体熱い。せつかく元通りになつたのにー!
!! ああ、体から湯気が……。

「……ふしゅるー? つて、起きてたの!? エーテルフィ

アー」

「あ、あつあつあつ」

「な……つ！ つて、うわっ！ 热いな、大丈夫か？」

「ぬきぬぬー」

「うん、热い。すつゞい热い。でも、そのおかげでやっとまた寝れそうになってきたよ……。つていうか、寝ないと死ぬ。

「よしよし、しっかり寝なさいね」

お母さんがそう言って私の体を撫でてくれる。それが、とつても気持ちよくて、幸せで。

だから、今は安心して眠れそうだ

。

朝。目が覚めたら周りにみんなが揃つてびっくりした。何？ え？ 本当に何なの？

「おはよう、エーテルフィア。大丈夫？ 無理してない？」

「え？ うん、おはよ。大丈夫だよ、どうしたの？」

「いや、昨日の晩、聞いたんだって？」

……そのことかー！

「結構キツイでしょ？ アレ」

え？ 経験者？

「今度からああいうのが聞こえたらすぐに耳を塞ぐんだよ？ ハーデルフィアにはまだ早いからね」

「う、うん……」

前世の私ならともかく、今の私にはかなりきついね。そういうのにまったく縁がないもんなあ。

まあそれは前世ではもちろんやることはやったけど……「げふんげふん。訂正、何でもないよ！－！」

ななな、何でもないってバ－！　私の表情で危険を悟らないで！

「よしよし、辛かつたね。今度お父さんとお母さんに時と場所を考えるように言つておくからね」「う、うん……。お願ひ……」

今私のには辛いからね、辛すぎるからね！－！　聞いているだけで、人間で考えれば顔が真っ赤に染まるんだよう－－

まあ、私は赤いドラゴンだから顔が赤く染まる』ではない、若しくは染まつても分かりづらいんだけど、その分相当体が熱くなる、みたいだね。

つて、その張本人たちもすぐにはじるんだけどね。

「だから、抑えてねお二人さん」「エーデルフィアにはまだ早いんだからね」「分かつて。大丈夫か？」
「今は大丈夫のようだけど、辛くなつたらすぐ言つてね？」

そうしていふと、お母さんが私に触れてくる。うん？　今日は大丈夫だよ？　平氣平氣。

んしょ、よいしょ。のんびりと起き上がるのだが、その瞬間阻止された。何をするー？

「一応まだ寝ていて？ 無理せずにいて？」

「えーっ！？」

「せめて、太陽が真正に上がるまで、お畳まで寝ていてよ。その後は草を取りに行こつか」

あ、今日はお外行つてもいいんだね。なら、今はとりあえず寝るか。今はまだベッドの上だから眠れるかな。

「いい子だね、お休み？」

「うん」「

つて、まだ眠れないよ？ さつき田が覚めたばっかりで話をして田が覚めてるの？ 今さらまた寝ろって？

あはははは、無理無理、絶対無理。完全に田が覚めひやひやしてるよ。

「無理ー、寝れないよー」

「じゃあ、せめてベッドで丸まつててね。起き上がらないでね？」

「んー」

丸まつとくだけでいいならそうするー。それだけでお畳から草を取るために洞窟を出れるのならね。

そうしないと、間違いなくお父さんとかお母さん止められるもん。止められたくないもん、出たいもん。

「丸くなつてれば、お畳から外に行つていいの？」

「うん、無理をしなければね」

よし、無理しない！ 外に行くためにきちんと休んでおへよー。とこうわけで、今はあげていた顔を下げて、きれいに丸くなつてしまふじとじょづ。

やつぱり眠れないんだけどねーーー！

「んきゅー、ひーまー、たいくつーー！」

「あはは、じゃあ、エーテルフィアがそのままの体勢でいるって約束するなら本の読み聞かせ、してあげるけどどうすの？」

「約束するー、本読んでーーー！」

ちようどこい暇潰しーーー！この世界にどんなお話の本があるのか知らないけど、聞くだけ聞きたいーーー！

昔々あるところ、少年と少年と少年と少年がいました。（後、少年A・少年B・少年C・少年Dと表記）

どいじの犯罪者！？

少年たちはある日、罪を犯してしまいました。それは、許されない罪。彼らは許されない地に足を踏み入れてしまつたのです。もちろん、少年たちを国の大人们は叱りました。思い切り叱つて、罪をきました。

それからの少年たちの話が、ここから紡がれていくのです。

ちよ、本当に犯罪者！？

「エーテルフィアは突つ込むねえ」

「突つ込むよ！ほのぼの普通の話かと思つたら、最初から主人公犯罪者！？」

「そういう話だし」

「普通のお話がいいーーーーーー！」

「ぜいたくだなあ。ちょっと待つてね」

何で主人公が犯罪者つていうお話持つてくるのさー。 私まだ子供だよー? 子供にそんな話を聞かせようとするなー!

もつとー 普通の! 至つてノーマルなお話はないわけ!?

「ちょ、怒らないでくれ、エーテルフィア。分かった分かった、ほ
かの話を持つてくるからな」

「普通のだからね!」

釘を刺しておかないとまた変なのを持つてきそうだ、お兄ちゃん
たちは。

事実、また持つてきた本は変なヤツだったから、飛び蹴りを入れ
ておいた。ざまあみる。

「い、痛いぞエーテルフィア」

「お兄ちゃんたちには大したことないでしょー? お兄ちゃんたち
の持つてくる本が悪い!」

「だからって、飛び蹴りはないだろう。避けたらエーテルフィアが
危ないから、大人しく受けるしかなかつただろ?」

知らない。避けても、私飛べるんだけど。飛べるから何とかなる
んだけど。でもいいか、優しいから。

というわけで、とりあえずお姉ちゃんに飛びつく……つて、今
それしたら脛から外に行けなくなる可能性もあるね。やめとこひ。

そうしている間にも洞窟の内部はひかりが指してきて明るくなっ

てきている。もつお脛?
お脛?

お脛なら、草を取りに行けるね!?
行けるよなー。

「ん？ ああ、わつお屋なんだね。よし、お父さんたちに話に行つて、草を取りに行こつか」

「うん。」

お兄ちゃんたちが並ぶと同時に、思に切り飛び上がつた。飛び上がつてお姉ちゃんの頭の上に着地する。よし、出発だ！

「お父さん、お母さん。もうお歸だし、エーテルフィアと草を取りに行つて来るね」

「ん？ ああ、氣をつけるんだぞ」

「何かあつたら呼びなさいね」

「うん、この間みたいなことがあつたら思いつたり呼ぶからね。そのときは助けてね、しつかりと！」

ところどで、私たちは竜態を取つたカーヴお兄ちゃんの背中に乗つて、草の採取場所へと向かつ。今日もこいつぱい草を取るぞー！ 今日は、毒草を間違えて取らないように気をつけやー！ 毒草を食べて、お腹を壊さないよう気をつけなくては。

「エーテルフィア、今田は毒がある草を取らなにようになくなっちゃね。だから、取る前に私たちに確認するんだよ、いい？」

「う、うん」

先に確認してもらえば毒のある草を取らなくて済むよねー。毒のある草は、危険だ。

前はお腹を壊したくらいで済んだが、草によると死ぬかもしれない。だから、確認をしてもらおう。うん、そつこない。

「よし、つこたぞ。エーテルフィアは毒のあるものを取らなによつ

に気をつけよ「うな

「うん！」

死なないためにもね！ 今日はお姉ちゃんに確認してもらひながら
大丈夫だよ、死にたくない！！

「おねえちゃん、これは？」

「あ、それは大丈夫だから取つていいよ」

「じゃあ、この横ー」

「それは毒があるからダメ」

「じゃ、じゃあ、これは？」

「それも毒があるねえ」

「次、これー！」

「残念、これも毒」

最初の草以外、全部毒ですか！！ よかつた、お姉ちゃんに確認
して。私だけだったら、間違いなく食べて死ぬか、お腹壊してたね。
つていうか、どうして私は毒草ばかり見つけるかなあ？ あ、
ある意味特技？

あ、諦めない！ 次、次こそは食べられるものー！

「これー！ これは！？！？」

「うん、これは食べられる。摘んでいいよ」

よつしや、今度こそ食べられるか。食べられる草ー！つーつー！

「あはは、エーテルフィア嬉しいぞうだね。なら、頑張つてほかにも
食べられる草を探そうね」

「うん、次ー！」

わーい、食べられる草を見つければ離はなれると嬉しそうだ！ 次々次い！

「「これは？ これ！」」

「あらら、残念だけどそれは猛毒だ。触らないほうがいいよ」

「触るのもアウトー？」

「大して害はないと思つけど、一応ね」

うーむ、触つたら手がかぶれちゃうとかかな？ なら、触らない
ようにしておけばいいか。

しかし、私はまだ毒草と食べられる草の区別がつかないとか、ダメすぎる。

ぐ、ぐわう！ 諦めないと、分かるやつは分かるんだ！ 次一つ
！！

たわごとつ（前書き）

若干暗い話になってしましました。

暗い話が苦手な方……、

流し読みでお願いいたします。

泣き声じゅう

「お姉ちゃん、これは！？」

「残念、これも毒。ほら、ここ見でいらっしゃん。ここがとがつてるのはダメだよ」

「むう、毒があるのはいやって、草のまわり？ がとがつてるんだね。学習します！」

「あ、ならこれは大丈夫かな？ とんがつてないし、裏に黒い毛も生えてないし、くさくもない。」

「これはー？」

「あ、それは大丈夫。変なにおいとかもしないでしょ？」

「うん、普通ー。」

「なら大丈夫だね、大丈夫だよね！ 田をキラキラと光らせながらお姉ちゃんに無言で問いかけた。」

「そんな私にお姉ちゃんは淡く微笑みながら頭を撫でてくれた。えへへ、気持ちよすぎた。」

「えへへー」

「よしよし、さあ次を探そうね」

「うん、褒められると伸びるんだよ、私は！ だからもっと褒めて、撫でて！」

「おお、つと。今日は毒のあるものさ……つと」

「無いよー。お姉ちゃんに」チヒックしてちらついたもん……」

「やうかそうか。でも、一応な。これでカーヴやサーファが間違えて毒草を摘んでいたら困るだろ? ハーテルフィアに何かあったらいやだからね」

「つ……」

そう言わるとこれ以上文句は言えない感じ? まあ、確かに腹も壊したくないし、死にたくも無い。

「う、仕方ない。お父さんの行動に関しては特に何も考えずに、とつあえず今は。」

「ち、ハーテルフィアは」飯までお昼寝こじみづね

そつなるよ。朝からいつぱい寝た、つていうか横になつてたから寝れないと思つただけだな。

でも、お母さんは許してくれないんだね、抱えあげられる運命さためにあるんだね。

「いい子だから寝なさい」

「多分寝れないよ?」

「大丈夫、疲れてるだろ? から寝れるよ」

んむつ、そこまで言つのなうまい……。ひとまず今はベッドで丸まつておくことにしよう。

うん、寝てません、寝てません。丸まって目を瞑つてはいるけど、全然寝付けないんだよね。眠れるまで、何か考え方をするか。例えば、前世の私の死後がどうなつたか、とか、おちびーズのこととか、ね。

あの子達は元気だらうか。私が死んだ後、しつかりと生きてくれているだろうか。

私は、あの時あの子達を守った。でも、その後は知らない。きちんと生きててくれているのか、元気だらうか。

薄れていく記憶の中のあの子達は、笑顔だ。最期に見たあの笑顔しか浮かばない。それでも、それでも。

泣き声だけは、耳に届く。

「エーデルフイア？ どうしたの、大丈夫？」

「ふえ？」

「嫌な夢でも見た？ ほら、涙を拭こうね」

涙？ え、私泣いてる？ 銳い爪を出さないように気をつけながら田に前足を触れさせる。うん、濡れてる。

「どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

お兄ちゃんたちはそう言いながら、自分の服で私の流す涙を拭っていく。ありがとう、お兄ちゃんたち。しかし、どうして泣いちゃつてたんだろう。

久しぶりにおちびーズのことを考えたから？ あの子達の泣き声を思い出してしまったから？

そんなはずは無い。あれは、終わったことだ。私の記憶の中のあの子達は、いつだって笑ってくれているんだから。

でも、あの子達のことを考えれば考えるほど、涙が溢れて止まらないよ。

「わわ！ 大丈夫？ そんなに怖い夢だつたの！？ ちょっと待つて、お母さん！」

私を抱き上げたお兄ちゃんが動く感じが伝わる。お母さんのところに行つてゐるのかな？ 確かめたい、でも、視界は涙で滲んで殆ど見えない。悲しい。

「ふ、うえええええええ…………、おかあさあああん…………」

「え！？ どうしたの？ ほら、もう大丈夫だから泣かなくていいのよー」

お母さん、お母さん、お母さん。頭の中で何度も呼びながらお母さんの腕の中に納まる。離さないで、思い出させないで。思い出のは最期の表情だけでいい。私は守つたのだかい。

なのに、どうして頭の中で声が聞こえるの？ どうしてあの子達が泣いているの？ 泣かないで、幸せに生きて。そう、願つているのに。

思い出してしまつ、あの日の泣き声を。逃げると言つたのに戻つてきて、死にかけの私のそばで泣いていたあのときの声を。

あの子達は、今何をしているの？ 誰か、教えて。あの子達はどうしているの？

『教えてあげましょうか』

突然聞こえた声。誰の声かも分からぬが、それは懐かしい言語だつた。それは、日本語だつた。

そして私は、その言葉を聞いた瞬間に氣を失つた。

田を開けてみれば、そこにはここに微笑む人が見えた。えつと、この人は。

「お久しぶりですね、私が分かりますか？」

「死んだときに会った、説明くれた人」

「正解です。今回は、そのときに助けると言つたので、有言実行しました。助け、必要でしたよね？」

「そういえば、言つてたつて。幸せな生活を保障し、助けるつて。今回はそのためか。まあ確かに、今回は助けが無くてはちょっとつきないな。

「というわけで、前世のあなたの従妹さんの様子を見に行きましょうか。ああ、暗くならなくとも大丈夫です。お元気ですよ」

「本当に？」

「ええ。お元気です、安心してください」

それに、それが真実かどうかは、あなたが直接見て確かめればいい。その言葉にすぐ納得してしまう。確かに、そのとおりだ。私自身が確認してみればいい。

「ああ、ですが今日はちょっと暗いかもしませんね。この

日は、あなたの命日ですか？」

「めい……にち……？」

「ええ、6回目の命日ですね。あなたが亡くなつて、この世界ではまだ6年しか経っていないんです」

「命日……。つまり、私が死んだ日といつことか。じゃあ、今日は

前世の私の誕生日でもあるのか。今考えてみれば、皮肉だな。
21歳の誕生日に事件に巻き込まれて死ぬなんて。

あの日、家に帰ればきっと、お父さんがケーキを買ってく
ていただろう。大きなケーキじゃなくて、小さなケーキが10個く
らい。毎年がそうだった、好きに選べるように、いろいろなケーキ
を買つてきてくれた。それも、遠い過去なのか。

「つと、つきましたね。あなたの従妹さんたち、もうすぐここに来
ますよ。彼女たちは、毎年この日は墓参りに来ていらっしゃいます
から」

考え事をしていると、田的地區についたらしい。そこは、
だつた。私の骨の納められた場所。私の眠る土地。

「新しい……」

「ええ、あなたの老家の墓は山の中であまり人が来れないから、と
おじいさんがお金を出してくださったそうですよ？　たくさんの人
が来てくれるよう、新たに作ってくださったそうです」

じいちゃんが、お金を出してくれたのか。そこまでしなくてよ
かつたのに。どうせ私はそこにはいないんだから。

そうしていると、後ろのほうから聞き覚えのある声が聞こえてく
る。反射的に振り向くと、そこには、そこには会ったかった従妹た
ちがいた。

「お母さん、まず何する？　先に花を変えたほうがいいー？」
「好きにしなさい。亞紀、悪いんだけど、水を汲んできてくれる？
忘れてた」
「あ、うん。ちょっと待つててー」

元気そうでよかつた。私の死は、そこまで激しく影響しなかつたみたいだね、それは幸い。

でも、やっぱり表情は暗いんだね、でかちび。笑つてはくれないんだね。

「お母さん、沙耶ー、水汲んできたよー。花変えよー」

ああ、おちび、お前もか。一人とも、やつぱり表情は暗いな。笑つて欲しいのに。

そして、その気持ちが伝わったのか一緒に來ていたおばちゃんが一人に笑うよつ言つ。そうしてやつと二人は笑顔を見させてくれた。

「あんたたちね、そんな暗い表情での子が喜ぶと思つ? 笑つてやりなさい。あの時も、笑つてつて言われたんじょ? 笑つてやれ」

おばちゃん、感謝!!」この声は聞こえないだらうけど、ここでお礼を言つね、ありがとう。本当に感謝してる。

だからさ、おばちゃんが泣きそうにならないでくれる? 確かにおばちゃんは私を可愛がってくれた、だから私もおばちゃんが大好きだった。

おちびーズと同じくらい、いや、それ以上におばちゃんは好きだつたかもしれない。だから、おばちゃんも泣かないで。自分のせいでおばちゃんを泣かせたとなると、ちょっと面白嫌悪がキツイ。

「お母さん、私たちに笑えつて言つたくせに、自分が泣かせじやん。それじゃ姉ちゃん悲しむよ?」

よく言つた、でかちび!! よし、おばちゃんの表情にも笑顔が戻りだしたな。これで、一安心。

それにしても、私が死んで6年、でかちびも22歳、おちびも19歳か。大きくなつた。本当に、大きくなつたな。

でかちびもおちびも、体つきは完全に大人のそれだ、立派に、女性の体になつた。これならば、もう彼氏もいるだろう。幸せに生きていけるだろう。

私の可愛い従妹たち。元気な姿を見れてよかつた。

私の愛する従妹たち。君たちの笑顔を見れてよかつた。

6年間、毎年この日に私のために、こんなところに来ててくれて、本当にありがとう。

住んでいる市とこの墓の所在地、違うから毎回移動が大変だよね？ それでも来てくれて、本当にありがとう。

さよなら。

「泣いていいよ、いっぱい泣いていい。全部受け止めてあげるから」

優しい言葉。あの子達から離れてすぐ、その人がその言葉をかけてくれた。その言葉に甘えて、遠慮なく泣かせてもらう。

悲しい、悲しいぞ。あの子達は、私の死を吹っ切つた。なのに、死んだ本人の私が一番吹つ切れていない。

私が、一番あの子達に執着している。

離れなくては。あの子達から、離れなくては。これ以上関われる場所にいると、今まで以上に執着してしまう。どうにかしてでも、

自分の声を届かせたいと、話をしたいと考えてしまつ。

だが、それはあの子達にしては迷惑以外、何も無いはずだ。せつかく吹つ切れたのにまた現れでは、厄介だらう。

だから、今は泣かせて。たくさん、涙を流して、その涙と一緒にあの子達への執着心も流してしまつて。

こんな心、今生エーテルフィアであつても、邪魔なだけだから。だから、全て流れてしまつて。

私の名前は、エーテルフィア。あの子達と同じ時間を過ごした“堤円香”堤円香といふ少女は、もう存在しないのだから。

さよなら、前世の私。
さよなら、おちびーズ。
さよなら、みんな。

私は、新しい人生を生きているよ。

心配をかけてしまいました

んみゅ？ 目が覚めたら、私の周りにはみんなが揃っていた。あれ？ みんな涙目だね、どうしたの？
んー、私、寝る前に何かしたっけ？ つていうか、何かさ、周り暗くない？ もう夜？ ご飯食べてないよ！！
そう思つていたら、突然お母さんに抱き上げられた。え？ 本当に何！？

「よかつた、目を覚ましてくれて……。気を失つてから、あのまま目を覚まさなかつたらどうしようかと」「エイシエリナ、俺にもエーテルフィアを抱かせてくれ」「俺たちも！！」「あ、お父さん、私もだからねーー！」「俺！ 俺もっ！！」
いやだから、何事？ つて、お父さん、抱きしめ方強い！ 痛いよー！

「い、痛い！ 痛いよー！」
「あ、つと……すまない、大丈夫か？」
「きゅー、痛かった……」

というか、抱きしめ方の強さを謝る前に、まず何があつたのか教えてもらえるかな？

「……覚えてないのか？」
「うん、全然」

全然全く眞田。

「大泣きして、氣を失つて丸一日眠っていたんだが記憶に無いのか？」

「全然」

「大泣き……、したつけ？ つていうか、こいつの話？ んんーつ？」

「覚えていないならそれでいいや。無事に眞田を覚ましてくれた、それでいいんだ」

「うん？」

「どうあえず、考えなくてもいいって言ひつけかな？ でもまあ、今は……。」

「おなかすいたー」

ぎゅーきゅるー。思い切りお腹が鳴ったよ、お腹空いたあ。
何か食べ物をもらつたために、潤んだ瞳でお父さんとお母さん、お兄ちゃんたちをじっと見る。とにかくじっと見る。

それから少しして、お父さんが私のそばから離れ、少しして戻ってきた。その手には包丁が握られている。そしてお父さんはお母さんにその包丁を手渡し、お母さんはその包丁を腕に走らせた。

「ああ、いいにおいがする。美味しいそうなにおい。それは、私の大好きな食料だ。」

「ふっふ、じくっ、…………」

美味しい。お母さんの血が、体に染み渡つていぐ。美味しい、すつごい美味しいよ……。

「すつごい飲んでるね。まあ、丸一日も何も食べたり飲んだりしないから、普通か」

「珍しくお腹も鳴つてたしね。相当空いてたんだろうな」

お兄ちゃんもお姉ちゃんもうるさい。とにかく私はお腹が空いてるんだ！ そう思いつつも、とにかくお母さんの血を飲み続ける。ん？ あれ？ いじにおじが、増えた……。

「エーデルフライア、簡単なものでスマないが、作ってきたよ。食べるかい？」

「食べるーー！」

「うわー、口の周り血だらけ。ほら、拭くからひよっと待つで」

いいにおいは、お父さんが用意してくれた軽食？ だった。いつただつきまーす！ かぶりつけた瞬間にお母さんに止められた。うん？ 血だらけ？

「よし、きれいになつた」

言われてみてみると、私の口元を拭つた布は真っ赤だ。空腹で何も考えられずにただただ貪つた結果、口の周りが恐ろしいことになつていたようだ。

ま、まあ気にせずじこはーん！

「大丈夫、そうだな。よかつた」「元気いっぱい食べてたからね。一時はどうなるかと思つたけど、これなら大丈夫だよ」

「長老を呼びに行く前でよかつた。呼んでたら、長老まで粗心配されることになつてたわ」

「うわー、相当心配かけてたんだね。自分でもびっくりだよ、丸一日眠り続けてたなんて。しかし、本当に何があつたんだっけ……。食事を見る手を止めることがよく考えるのだが、やはり答えは出ない。「うーむ、本当に何したつけ。
がぶがぶばぐばぐ。とりあえず、考えはするけど食べる手を止めつもりはない。だつて、空腹が限界だったからいくらでも入るんだ。

「うわしお、それまあ」

「いっぱい食べた、おいしかったあ。お腹ぱんぱんになるまで食べちゃつたよ。おかげで大満足。

「いっぱい食べたね。あれだけ血を飲んで、その上でこれだけ食べるとは思わなかつたよ」

「だつて、お腹空いてたんだもん」

オマケに、今の私は成長期だよ？ 食べないと大きくなれないじゃないか。

そうして満足していると、突然お母さんに抱き上げられた。うん？ ディーッしたの、お母さん。

「じょ、ひへいいつれせちてこい。本当に心配したんだから」

お母さんはさう言つて私を抱きしめる。

「本当に心配した」

「よしよし、Hーテルフィアは可愛いね」

「しばりは俺たちから離れないでね」

お兄ちゃん、お姉ちゃんたちはもう言つて、お母さんに抱かれた私を撫でてくれる。

「無事に皿を覚ましてくれて本当によかつた」

最後に、お父さんがお母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんたち」と
私を抱きしめた。えへへ、何だか落ち着くね。

そうしてみると、お父さんがお母さんから離れ、そして私を奪い
取つた。そして言つ。

「や、Hーテルフィアも起きたことだし、みんなで出かけるか。外
は気持ちいいだろ?」

「あら、いい考え。でも、Hーテルフィアは返してね、フォンシュ
ベル」

「いいじゃないか少しくらい」

「え?」

あれ? 何か、お父さんとお母さんの間で私の奪い合ひが起つ
てるんだけど。うーむ、平和に済ませるためににはつと

私を奪い合つ! 一人の手をすり抜けて、ぱたぱたと飛んでお姉ちゃ
んの頭の上に着地する。よし、これで安全。

「あら? Hーテルフィア、お母さんのところにあつて?」

「いや、お父さんのところに来ておくれ?」

「Hーテルフィア、呼ばれてるよ?」

「やー。一人とも何か怖いからお姉ちゃんの頭の上がいいー

だつて、このまま一人のところに戻つたら、また奪い合ひに巻き込まれそんなんだもん。巻き込まれたくはありません。平穏こそ人生です。

つて、お姉ちゃんと私を見る一人の目が怖いなあ。んじょ、よいしょ。私はしつかりとお姉ちゃんに隠れた。これで、二人の恐怖の視線を見るのはお姉ちゃんだけつと。

「ん？ ちよ、エーテルフィアするこつて！ お父さん、お母さん、目が怖い！」

「ああ、『メンねオースティア。ビリしても、エーテルフィアを愛でたいと考えるところなつちやつの」

「そのとおりだな。エーテルフィア、お父さんのところに来てくれないか？」

はい、行きません。行つたらすぐお母さんに奪われるよ？ お母さんだから、お父さんからなら絶対に軽く奪い取るよ？

そんなのいやだから動きません。仮に動いたとしてもお兄ちゃんたちの頭の上にしか行きませんよ？

「……イヤだつて。いいから行こよ。エーテルフィアも早く外、行きたいよね？」

「うん！ お外行く！ みんなで外！」

お兄ちゃんたちと一緒に、とかお母さんと一緒につて言つのはよくあるんだけど、お父さんと一緒につていうのや、みんな一緒に外つて言うのは初めてだから今のうちから楽しみなのだよ！ わくわくが止まらない！ もつ最高に楽しみますぜるーー！

「うわー、ヒーテルフィア楽しそう。可愛すぎ」

「ホントだー。超可愛い」

「ふふ、行こうか」

「うん！ 行こう、行こうお外！
でも、ここで問題が一つ。

「セヒ、エリから少し出かけとなると、お父さんかお母さんがドラゴンに戻つて、全員がその背に乗つて移動したほうがいいんだが、大丈夫か、ナーデルフィア？」

「うん、怖い。エリ笑つて答えてやつた。

「だが、カーヴだとちよつと遅いからな……。どうすの？ お父さんに乗るか、外出をやめるか」

……！ 究極の選択肢が！ 怖いお父さんのドラゴンの姿を見るか、外出自体を取りやめるか……。いやいや、外は行きたいよ。だって、初めてみんなで出かけるんだし。でも、お父さんのドラゴンの姿は怖いんだよね。ソレを考えるとちよつと引く。

でも、行きたい。怖い。行きたい。怖い。…………どうじゆつてんだか。

「怖いなら、隠れていればいい。お父さんがドラゴンの姿でいる間、オースティアに隠れるなり、お母さん隠れるなりすればいいわ」「そうだよ。またフード付きの服着るから、それに隠れなよ」

「…………うう、確かに隠れてれば見なくて済むし、出かけも出来る……。

「お姉ちゃん、しっかり隠してね、見えないよにしてねー！」

お父さんとお母さんの「ドラゴン」の姿は大きすぎるから本当に怖いんだもん！－

だつてあの一人なら、間違つて踏まれそうだし、踏まれたら即死決定だし。お兄ちゃんたちなら氣づいてくれそうだし、踏まれる前に私の攻撃飛ぶからいいけどさ。

お父さんたちにも踏まれそうになつたら攻撃すればいいじゃん、つて言つたやつ、舐めるなよ？ お父さんたちが「ドラゴン」の姿になつたら、私の爪如きじや殆ど氣づいてもらえないのだよ。お兄ちゃんたちは爪で引っかけば氣づいてくれるけど、お父さんたちは引っかいても氣づかないところ前に、私が恐怖で何も出来ないかい。

お父さんたちの「ドラゴン」の姿怖い 踏まれそうで怖い ソレを避けるために攻撃 「ドラゴン」の姿が大きすぎて怖くて動けない」「なると完全に悪循環ですね。だから、しつかり隠れます、見たくありません、怖いです！ でも外出は楽しみです。

そして、私たちが準備を終え、しつかりと隠れたのを確認するとお父さんは「ドラゴン」の姿に戻つたりして。お姉ちゃんがお父さんの背に乗る感じが伝わつてくる。

とにかく、私は絶対に「基地」から出なこ。お父さんの「ドラゴン」の姿を見ない。怖い思いはいや。

それから少しして、お姉ちゃんが地面に降り立つ感じが伝わる。でも、私はまだ隠れたままだ。だつて、お父さんが人態を取つてるとは限らないし？ 「ドラゴン」のままだと怖いし？

「ハーデルフィア、もう大丈夫だから出でておこで」

やつと思つてこゐとお母さんと呼ばれた。恐る恐る、お姉ちゃんの頭の上で、「んじ」とフードから頭を出して周りを見渡す。よし、『ハーフゴン』の姿は取つてない。

「おかーねえ」

確認をしつゝ、お母さんと一緒にくと羽を広げ、移動する。よし、甘えよつ。

「よしうー、可憐こう。ほひ、見て、りん、頂上に来てるかい」「うさ~」

言われて冷静にあたりを見回す。あ、ホントだ、頂上だ。なら、これをやらなくては。

「やつぱーつー...」

「ううん、頂上ではしゃれをやらないで。頂上ではしゃれをやるのが鉄則だよね、うそ。

ちなみに、その様子をお父さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんは微笑ましげに眺めていたよ。

やしてお母さんには、言ひ終わると同時に思つて抱きしめられました。幸せです。

「その言ひに何の意味があるのか分からぬけれど、本当に可憐こ
「ホントだね。ねえエーテルフィア、その言ひは何なの?」

「あれ? いの世界では言ひとかつてないのかな? 日本では言ひ「ポピュラーだったの?」

「呑ばないの？」

「普通呑ばないね。でも、H-テルフィアが呑んでるのを見ると
叫びたくなるな」

「うん、一緒に呑ぼー！」

セーの、やつほー！ やつほー！ やつほー！

おお、ヨビー。しつかり返って来たぞ。お兄ちやんたちも返ってきて
来た山びこに楽しかった。

「す」こ、音が響いてるのかな？」

「あはは、ビーだろー！」

ヨビーの仕組みって覚えてないしね。でもいいじゃん？ 楽しい
から。

そして今日は、みんなで盛大に呑んでから洞窟に床つた。本当に
楽しい一日だった。

心配をかけた？ 何ソレ美味しいの？ そんなこと、今日一日の
楽しさで全部忘れちゃったよ。

心配をかけてしまいました（後書き）

ちなみに、エーテルフィアが従妹たちに会つた記憶、
そしてその前後の記憶は死の世界のあの人によつて消されています。

幸せな生活のために、従妹たちの記憶は
邪魔な記憶として削除された、ということです。

時の流れは早いものです（前書き）

成長しました。

あつといつ間に50歳代です。

時の流れは早いものです

時の流れって本当に早いよね。ヒートルフイヤとして生を受けて、早50年以上経ちました。今の年齢は、えっと、「じゅうじゅう」とん！ 54歳だよ。

ちなみに、50歳の誕生日の口からお父さんたちに魔術を贈りました。最初はみんなに泣かれたけど、納得させた。

「まだ早いな、やめよ！」

「そうね、まだ早いよね。まだ50だもんね」

「うん？ でも俺たちって50くらいの頃からやついたよな？」

「え？ 私は60超えてたと思つたぞ」

「俺もそのくらいか。なら、あと十年くらいせいだわ」

全員から見事に反対を喰らいました。

「覚えたいな……、覚えたいんだけどな……」

お父さんたちをしつかりと見つめ、田を少し潤ませて懇願する。
「うかがはまつぐんだ！」

「あ、いや、でも、魔術は危ないものなんだぞ？」

「分かってる。だから、お父さんたちに教えて欲しいな？」

お父さんたちなら、私が危ない」としゃくなったら全力で止めてくれそうだもんね。だから、教えて欲しいなー？

やうやく懇願した結果、私は少しずつ魔術を教えてもらえたよ

うになつていた。

から、私強いよ？ 並の人間なんかよりもよっぽど強いよ？ だから、一人で町へ行つてみたいなあ？

「一人で町、か。さすがにそれはダメだらう」

「町は危ない人もいるんだからダメ」

「……襲われるよ？」

「……捕まっちゃうよ？」

「……誘拐されちゃうよ？」

お父さんたちの止め方は可愛いけれど、お兄ちゃんたちは完全に脅しだ！

大丈夫だよ、襲われそうになつたり捕まりそうになつたり、誘拐されそうになつたら魔術使いまくるし。
炎吐いていつぱい燃やし尽くしてあげるしー。

「だから、行きたいな？」

ちょっととした冒険だよ。大体、この山では一人での行動全然オッケーじやん。

なら、町もいいんじゃない？

「危ないって、ダメだよ」

「諦めなさい」

「やだー！ 行く、絶対に行くー！」

大体さ、50つて前世で考えればおばさんなんだからさ、いいじゃん、少しくらい。

懇願の時間は長かつたよ。でも、おかげでお父さんたちが折れた。

「なら、町でこれを買つててくれるか？」

そうしてお父さんが買つもの名前をひらひらと連ねていへ。

これは初めてのおつかいですね！……つていうことは、多分お兄ちゃんたちが後ろからこいつにソリソリついて来るんだろうな。まあ、いつか。とりあえず。

「いつてきまーす」

「気をつけるんだぞ、何かあつたら呼ぶんだぞ」

「うん、行つて来るねー」

えへへ、初めての一人での町だ。今まで何度もお兄ちゃんたちと来てはいたけど、一人では初めてだもんな。

何だか楽しみー。パタパタと飛ぶ私のテンションは本当に高いぞ。

そして、後ろから結構離れてお兄ちゃんたちがついてくる気配が……。まったく、過保護なんだから。

まあ、お兄ちゃんたちに言わせればこれは過保護ではなく、竜族の本能らしいのだが、よく分からない。過保護が本能つて、何だろうね。

まいつか。気にせずおつかいを済ませようつと。

「おや？ 小さき龍神様、どうなぞこもした？」

「おつかいー」

「ん？ わよ、今日はお一人ですか？ 護衛をお付けいたしましょ

うか？」

「大丈夫。……後ろにお兄ちゃんたちいるから」

絶対後ろにいるから。見えないし、感じないけど何となく予想がつく。

「それでしたら安心です。お気をつかってお買い物をお楽しみください」

「うん、ありがとう」

さつて、町だ町一。まずは何を聞くつかな。うつと、ここから一番近いのは、洋服屋なんだね。

「いらっしゃいませ、竜神様。今日は何をお求めですか？」

「えっと、防寒用の服が欲しい」

「どなたさまの服をお求めですか？ 小さき竜神様、あなたさまのですか？」

「うん。竜態で着れる服が欲しいな」

「畏まりました。でしたら、採寸をさせていただいてよろしいですか？」

「うん、お願い」

そうして私は服屋の前ままで羽を広げたり、前足を上げて広げたりとする。少しして採寸は終わったらしく。

「では、完成までにしばしお時間いただきます。一週間と半分ほど経ちましたら取りにいらしてください」

「うん、お願いねー」

さて、洋服の注文は終わつたし、今度はどこに行こうかな。ここからならどこが簡単に行けるかな、うふふふふ、楽しみだなあ。

まだ、お兄ちゃんたちの干渉はないしね。

よし、次は野菜を買おう。自然には出来ない、人間たちが作るとの出来る野菜。人間だった頃は普通に食べてたのに、ドリゴンになつてからは滅多に食べてなかつたからなあ。だから、野菜つて恋しいんだ。

えつと、今日買って帰る野菜はつと。私はメモを取り出して買つ物をしつかりと把握する。

「ほんにちはー。お芋と根菜をいくつかかよーだい」

「いらっしゃいませ竜神様。ちょうどここときにいらっしゃいましたね。ちょうど新鮮なのを入荷したんですよ」

「ホント! ? やつたあ! ?

「では、ほんのこれと、これ、そしてこれを包みましようか」

そう言つて店員は並べてある野菜を包んでいく。おお、いっぱいだ。

「これでいいや? ?

「本来は銅貨を70枚ですが、竜神様にはお世話になつておりますので、65枚にしておきます」

「やつた! ありがとー」

「いえいえ。その代わり、次もつついで買つてくださいね」

「うん! ?

やつた、まけてもらえたね。しかし、これだけたくさん買つても銀貨一枚にもならなかつたか。

それで考えれば、初めてお金の価値を知つたときのお菓子を買つたあの量は半端無かつたんだね。

「よつし、次だー! ?

次はどれかな。…………つて、これだけか。ならかーえろつと。

つて、ちょっと荷物が重すぎない？ 町の外までは飛ばずに歩いてたからそこまで激しく重さを感じなかつたけど、飛び出すと重いな。ふらふらする。

つて、わわわ。か、傾く、怖い！！ お、落ちそうだ！！！

卷之三

「ふえ？」

来るべき衝撃に備えていたのだが、予想していた衝撃は来なかつた。代わりに、軽く痛みを感じるだけだ。

だつて、私は今飛んでいるカーブお兄ちゃんに軽く咥えられていいのだから。

「よし、買い物したのもちろんと掴んだし、もう大丈夫だよ」

お兄ちゃんの背に乗つたお姉ちゃんは喜び。よかつた、これで買
い物したヤツなくしてたら、私しょんぼりだつたよ。

そういうふうに、私を咥えたままのお兄ちゃんは一度下に降りた。
咥えたままじやしゃべれないしね。

「ふう、心配したぞ、エーデルフィア。重たすぎて飛べないくらいなら、半分くらいは店に預けて、後から取りに行くと言つていればいい」

「あ、そうすればよかつたのか」

「うーん、考えなかつたよ。確かにそうすればよかつたんだな。そういう考えながら、私は助けてくれたことに感謝し、カーヴお兄ちゃんに抱きついた。

ぐう、成長したとは言つても、カーヴお兄ちゃんのドラゴンの姿に抱きつくるはまだキツいか。でもね。

「お兄ちゃん大好き」

そう言つて、とにかく抱きつくる。えへへ。

「エーデルフィア、私たちは？」

「お姉ちゃんもサーファお兄ちゃんも大好きだよ」

当たり前じやん。私はお父さんもお母さんも大好きだし、カーヴお兄ちゃんもティアお姉ちゃんもサーファお兄ちゃんも大好きなんだから。

んー、どうすればわかつてもらえるよね。

「んー、エーデルフィア可愛い」

「可愛すきなよ、これ」

一人に思いつきり抱きついたら一人に喜ばれた。よし、分かつてもらえたね。

「ふふ。さ、そろそろ帰ろうか。お父さんたちも心配してるだろ？」

からね「

「だな。そろそろ帰らなくちゃ 父さんたちがどうかなつちまつ」
あー、確かに初めてのおつかいって、親は相当心配するよな。う
ん、帰る?、お母さんたちにも甘えたいしね。

うふ、家に帰つたらかまい倒された。

「お帰りなさい、エーデルフィア。怪我は無い？ 怖くなかった？
大丈夫？」
「ああ、無事に帰つてきてくれてよかったです。初めての一人での町は
どうだった？ 不安じゃなかつたか？」

うわあ、疑問文だらけ。よし、一つずつ答えるべきか。

「だいじょーぶだよ。怪我も無いし、怖くも無かつた。それに、不
安でもなかつたから平氣」

実際、新鮮な感じがしただけだもん。

「さて、今日はエーデルフィアが買つてきてくれた野菜を使って食
事を作らなくてはならないな。エーデルフィア、楽しみに待つてい
てくれ」

「うん！ 楽しみに待つてるねー でも、今はとりあえず 。

「眠い……」

初めてこんな長い間を自力で飛んだからね。いつも町に行くと

きは大抵お兄ちゃんの背中の上だし。 その方が早いから。
でも、今日は帰りに落っこちかけるまでは完全に自力だったから
ね、疲れたんだろうね。

「疲れたのね。 ふふ、 部屋で休んでいなさい」

ああそりそり。 50歳過ぎた頃から自分の部屋を『えられた。 お兄ちゃんたちの部屋と比べるとまだ狭いけど、 成長に伴つて少しづつ掘り進めて大きくなる予定。

そして、 私の部屋のベッドは、 お兄ちゃんたち特製だ。 お兄ちゃんたちの部屋のベッドと同じ、 千草のベッドだ。 ま、 まだお兄ちゃんたちのベッドよりも格段と小さいけどね。
でも、 気持ちいいんだよね、 千草ベッド。

というわけで、 部屋に戻った私はそのままベッドにダイブする。
ふわ、 ベッドに上がると一気に睡魔に襲われるな。

「エーテルフィア、 起きて。 『飯だよ」
「んみ？」

心地よい眠りの中の私を無理やり呑き起すような声で完全に覚醒した。 何の用だくそう、 気持ちはかったのに。

「田舎悪こなー。 ほら、 『飯だよ、 『飯

『飯……、 『飯……、 つ…… せつだよ、 『飯だよー。 今日の『
飯はきっと『馳走だよー。 今日買った野菜が存分に使われてるはず
だよー！

「おじや姉ちゃんたちの肩に乗るには大きすぎるしなあ……。」
起きて、起きてつと。まだ寝惚けてフランクするナビ、今

結局、ふらつて体を支えてもらいながら飛んでいくとなつた。

「おはよひ、ゆっくり休めたかい?」

「うん……、まだ眠い……」

でも、『はーん。

「はー。今日は『』飯を食べたらすぐ寝なわー。疲れたんだろ?『』

「うそ、もう少しー」

成長に伴つて、夜寝る時間も遅くなつたけど、今日はまたいに
『』飯を食べたらすぐ寝るか。

どうせ、今も昔も食べた分は成長こしか使われないんだから。

魔術特訓です

「よし、今日は対極属性の水の魔術を練習しようね」

魔術の特訓をしだして早四年。その四年で、私は対極属性の水以外の魔法は、大体が使えるようになつていた。

か、水だけにはまだ全然使えない私の一番加護のもらえる属性だから、その反対は一番加護が少ないらしくまだ使えない。

「水ー！　みーすー！！」

カツプを両の手で掴み、その中に水が現れるよう念じる。これが水の魔術を使うための練習第一歩らしい。曰く、カツプとかは普通に水が入っている印象が強いからうまいきやすいんだとか。でも、今の私は全く水の魔術を使えない。水を出すことも、操作することも出来ないんだ。

一
みずー！
水水水水水ーつー！！

「おー、頑張ってるねー」

「そう言うならお兄ちゃん、教えてあげてよ。私もエーテルフィアと一緒に火属性だから水苦手なのよ」

「俺も火は苦手だ。エリカルア、ニッ。教えてあげようか?」

お兄ちゃんたち横でうるせーいっ！！！でもコツは教えて！

「ほかの事を考えず、ただただ、水に関わることだけ考えて」
「お風呂とか、川とかね？」

水に関わることー？ んー、お風呂？ 川？

そういえば、この山って、川結構きれいだよねー。水は苦手だから近寄るのは怖いんだけど、飲み水にはいいんだよね。

寒い時期は直接飲むのは冷たすぎて痛いけど、暑い時期はあの水は最高に美味しいんだよねー。

「わわ！ 抑えて抑えて！ 水が零れちゃうよ」

「へ？うわっ！ い、いつの間にこつー？」

言われてカップを見てみると、既に少し溢れていた。 イメージ、恐るべし。

「つーん、ここのヒントだけであつせつと使えるようになるとは思わなかつたなー」

「エーテルファイアすごいねー。よしよし、愛でよひ」

「おとーさん、エーテルファイア成功させたよー」

「ん？ ああ、本当だな。頑張ったな、エーテルファイア。じゃあ次は火の魔術でそれを蒸発させてこらん？」

蒸発？ ピッカッ？ カップを下から炙ればいいの？

「こやこや、カップは持ったまま、ぱっと見何もせずに蒸発させて「じりご？」

それ、どうやるんだよー。私の中で蒸発のイメージって言つたら下から火をかけて沸騰させるくらいなんだよー。

いや、使う力としては多分火の魔術でいいんだとは、思う。でも、どうやればいいのかが分かんないー。

「お姉ちゃんお手本見せてーー。」

「お手本？ ちょっと貸して」

そうしてお姉ちゃんにカップを渡すと、カップに入っていた水が沸騰し始める。そして、しばらくそれを見ているとあつとこう間に水が減つていった。蒸発した！

「ああ、無くなつたね。エーデルフィア、もう一度さつきの水の魔術使ってみよう。」このカップに水を入れて、さつきお父さんが言つたやつ、頑張るうね」

「うん！」

水ー、水ー。川ー。美味しい飲み水ー。

そう念じながら、カップをジーと見続ける。そうすると、何と言つことでしょう！ カップの下のほうからじわじわと水が浮き上がりてくるではありませんか。

「うん、やっぱり一度コツを掴むとすぐに使えるね」「ホントだー、さつきまで使えなかつたのは何つて感じ」

ホント、何だつたのかこつちが聞きたいくらいあつさつと使えるよになつていた。マジでビックリですか。

「さつきの水の魔術のイメージが定まつたんだ。これからは簡単に使えるようになるよ、基本は」

「応用的な使い方になると、練習あるのみだけね」

つまり、今回の蒸発させる魔術は応用つてことだね。練習あるのみつてことだね。

しかし、さつき見ていた限りでは蒸発させるのは、火の姿を見せ

ずに水の温度をあげていたようだつた。つまり、内部的に水の温度が上がるようになくてはならない。

「一む、水の温度を上げる方法はどんなんがあつたかな。第一の方法は、まず火だが今回は使えない。

あとは、太陽の光の下に置いておいても温かく、つて言つて温くなるよ。でも、それは温くであつて熱いわけではない。

熱く……熱く……？ ん？ 热？

そういうえば、IH式のコンロは火を使わないのに熱が通るよね。どうこう仕組みだつたつけ、あれ。

……つて、あれは電気だね。火はまったく関係ないや。そうなると、どうなるんだ……、うう。

「あらり、考え込んでるなあ。エーテルフィア、さつき私が魔術を使つたときどうこう風に見えたか考えてじりらん。それがヒントになるからね」

「んーっ？」

見えたつて言つても、少しずつ沸騰して、蒸発していくたよにしか感じなかつたよ。むむむー。

「じばらぐの課題はこれだな、頑張りなさい」「むー、お父さんヒントー！」

どういう風に魔術を使うものなのかヒントが欲しいー。

「ヒントならオースティアがくれただろ？ それ以上は答えだからダメだ。頑張りなさい」

「一、こつこり微笑みながら言つてお父さんが憎たらしく思える……。

火を使わずに沸騰、蒸発、……。どうやって水を熱するかが一番の課題だな。熱することさえ出来れば、あとは蒸発までは少しだと思うんだけど。

しかし、このカツプで火を見せずに火の魔術を使って蒸発、……。むむむむむー。

「エーデルフライ、ご飯の時間へりこ善え事、やめなさい」

「だつて！」

「だつても何もないの。考え方しながらじや美味しくないでしょ。せつかく美味しい」飯を美味しく食べないなんて、食材に対して失礼でしょう

「あ……」

そうだ、そうだった。私たちは命を喰らひて生きているのに、それを忘れてしまっていた。ぐう、今からでもその考え方を放り捨てて美味しくいただかなくては！

「いめんなさい、お父さん、お母さん。今から美味しくいただくなさい！」

「分かれればいいの。はい、こいつぱに食べなさい」

お母さんはそう言って自分の分の肉を少し分けてくれる。お母さんありがとー大好きー！！

「食べる子は大きくなる。いっぱい食べて、いっぱい眠りなさい」

うん、もつともつともおおきくなるよー。今はやつとお兄ちゃんたちの半分くらいの大きさだからね。もつと食べてもつと寝れば、お兄ちゃんたちにも追いつけるー。……はず。

もつともつと大きくなりたいよ。お父さんとお母さんの「ドリーハン」の姿と比べれば私なんて、やつと踏み潰される前に気がつくかな？つていう程度だからね。

そして食後は、お母さんたちのお話とこいつの勉強タイムだ。

「エーテルフィアも、そろそろ初陣の時期ね。この時期に、相手にちょうどいい魔物つて、どれがいたかな？」

「今のエーテルフィアの相手にちょうどいい魔物か……。隣町で魔物が暴れてるとかなんとか言ってなかつたか？」

「うん？ 魔物？ 初陣？ ナンノコト？」

「もう54歳だし、魔物つて言つのがどんなか、教えてもいい頃でしょ？ フォンシユベル？」

「そのとおりだ。よし、明日にでも行こうか。いいね？ エーテルフィア」「

大丈夫、お父さんがついてるから、絶対にエーテルフィアを守るからねー。

につこつ言われても怖いものは怖いでしょ！ 魔物つて言つ末知の生き物に対する恐怖は半端ないんだよ！

「やだー！ 魔物なんて怖いからいやだーーー！」

「よーし、明日はみんなで一緒に行こうなー。みんなでお出かけだぞ？ 嬉しくないのか？」

「う？」

みんなでお出かけ？ それも久しぶりだよね。なら、いいかなあ

……。

「よし、なら明日夜が明けたら行くからね。夜が明ける前に起こうに来るから、今日はもう寝なさい」

「うん！」

みんなでお出かけ。みんなでお出かけ。つぶふ、楽しみだな。明日のためにも今日はしっかりと寝なくっちゃ。

テンションハイの状態でパタパタと羽を広げ、飛びながら寝るために部屋へ向かう私。このハイテンション状態で眠れるかな……。

ちなみに、この心配は杞憂だったりする。

そして翌朝。

「ヒーデルフィア、朝だよー。ほら、起きて、お出かけしようねー」「やだー！ 行かないー！ 魔物なんていやーー！」

寝てる間、寝る前にじっかり思い出してしきつたよ、お出かけの目的！ 魔物なんて絶対にいやだ、魔物と遭遇するへりこならお留守番するー！

その意味を込めてじっかりと布団を掴むのだが、お兄ちゃんやお姉ちゃんの力を持つてすれば、それは最早意味なき足掻きだった。

「いいから起きよつねー。お出かけお出かけ。ほら楽しみだねー」

棒読みで言われても説得力皆無だからー！

「やーだー！ お留守番するーー。」

「……どうしたの？ ほら、起きてヒーデルフィア。それとも、具合が悪いの？」

「お留守番する、魔物いやだー！」

「あなたの初陣なのに、いなくてどうするの。ほら、起きなさいね
ー」

「いやーだー！ 無理やり剥ぎ取らないで、無理やり連れて行こ
うとしないでー！」

必死で足搔くのだが、やはりお母さんたちには力では勝てない。
足搔いても勝てない。結果、無理やりお母さんに抱えられて起きる
ことになった。

「どうしたんだ？ 遅かったな」

「ギリギリで駄々を捏ねたの、この子」

「ははっ。怖くないから大丈夫だぞ、お父さんたちが守るからな」

そう言われても怖いものは怖いの！ 今からでも逃げたいしね。

「うーん、エーテルフィアのこの怖がりは誰に似たんだろうな。俺
も、エイショーリナも怖がりではないし、カーヴたちもそんなに怖が
りじゃなかつたしな。……コフイーにでも似たか……？」

「ゆふいー？」

って誰？ 知らない名前。お父さん、それ、だあれ？

「ああ、コフイーはお父さんの妹だ。本名はコフイネス。今は少し
遠くの町に嫁いでいるから殆ど会わないな」

「ホント、カーヴが生まれたばかりの頃に会つたきりだから、もう
何年会つてないのかな。結構会つてないし、今度会いに行く？ み
んなで」

「それもいいな。確かに、久しぶりに会いたいな」

お父さんに妹いたのかー。そのコワイー？ さんもじこちゃんたちに扱かれたのかな？ むむ、聞いてみたいぞ。

でも、今日のお出かけはいやー！ 魔物怖いもん！

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。エーテルファアをしつかり捕まえておいてね」

「やあー！ 離せ、離してー！」

「こらこら、口が悪いよ。いい子だから大人しくなさい」

「ううううー！ わすがにお兄ちゃんたちに力では敵わない。しつかりと掴まれた前足と羽は、私がいくら足掻いても全く反応を見せない。

離して、はーなーしーでー！ 時折、前足を掴むその手をかぶかぶと噛んでみるのだが、それでも効果はない。甘噛みだからか！？ でも、思い切り噛んだらお兄ちゃんたち怪我しちゃうし……。

どうすれば離れてくれるのかな……。うといと。朝起きるのが早くて、いつもより寝てないから眠なくなつてしまつたよ。「めん、少し眠るね？」

いつもやって、寝たのが間違いだつたと気づくのは目が覚めてすぐだつたりする。

初陣です（前書き）

結構残酷な描写があります。
ご注意ください。

初陣です

初陣です、怖いです。

どうしてあの時寝てしまつたのでしょうか、後悔するばかりです。

今、私の目の前には大きな魔物がいます。しかも複数体。

「つむ、ちょうどいい魔物^{バガ}がいるな。さあエーデルフイア、倒してしまおうか」

ちよ、お父さんー？　お父さんの中で魔物はバカと読むんですか！？　しかも、さらつと言わわれても無理だからー！

「ヤダ！　怖い、帰るー！」

「……帰れるの？」

「ここがどこか、分かってる？」

「帰る途中で襲われたらどうするの？」

「ふえーー！　お兄ちゃんたちのいじわるー！」

正論をさらつと言いまくるなー！　べそう、やつてやる、やつてやらーーー！

「カーヴ、エーデルフイアと一緒にいて。お母さんたちはほかのをやつづけてくるから。エーデルフイア、何かあつたらカーヴが守つてくれるけど、エーデルフイアが、この魔物を倒すんだからね？」

「うう……、が、頑張る！」

「大丈夫、この魔物は弱いから。落ち着いて魔術を使えば簡単に倒せちゃうよ」

でも、でもね？ この大きな魔物を目の前に、冷静に魔術を使えるかどうかって言うのが一番の問題だと思うんだ。今の時点でかなり怖いんだ。逃げたいんだ。

「おつと。ほら、早くしないと何回も襲われるよ？」

お兄ちゃんはそう言いながら私目掛けて飛びついてきた魔物を軽く風の魔術で引き剥がす。うう、怖い。

ちなみに、お父さんたちはこれ以外のほかの魔物の殲滅に励んでいるとのこと。どおりでさつきから爆発音とか悲鳴が……。

「んー、お父さんたちもやつてるなー。あれだけやれとは言わないから、こいつだけは倒そつなー」

お兄ちゃんは二口一口と微笑みながら告げる。が、すぐに表情を消してまっすぐに私を見た。

「いいか、エーデルフィア。魔物は、敵だ。魔物を倒すことは、竜神として生きている俺たちの義務だ。人間に害を成す魔物を倒すから、俺たちは竜神として国に祀られる、人間と共に存している。それが、長老たち、年寄りたちの意思だ」

「うん？」

「覚えておくんだ、エーデルフィア。これは、俺たちがやらなくてはならない、義務だ」

魔物を、倒さなくてはならない。自分たちが何かをされたわけじゃないのに、人間が安全に暮らして生きたいがために、私たちは魔物を屠らなくてはならない。

自分たちのためではなく、人間たちが生きるために。

「ねえ、お兄ちゃん。何で、人間たちにそこまで尽くすの？」

「尽くしてなんかないさ。ただ、俺たちが安全に生きるために契約だつて、俺は長老に聞いてるよ」

「けいやく？」

「そう。人間と長老が昔、交わした約束だ。つまり、人間が俺たちドラゴンに手を出さない、ドラゴンが人間に手を出さないという約束だ」

つまり、互いに手を出さず、平和に過ごすための約束か。

そのためには人間に課せられたものが、私たちの生活の保障。私たちドラゴンに課せられたものが、人間の安全な生活のための魔物退治というわけか。

「考えないで。考えないほうが平和に生きていくから」

「う……うん……」

「ほら、倒しに行こうか。エーテルフィアなら、燃やすのが一番簡単で効率的かな」

燃やす、かあ。確かに私の場合はそれが一番やりやすいかな。

「ゴメン、魔物さん。今から燃やすね。命を、奪うね。

ぼうつという音と共に、目の前の魔物が燃え上がった。私の放った火の魔術が働いたのだ。

「よし、初陣完了。よく頑張ったね」

「うん……」

何か感情が追いつかない。生きるためにだとは言えど、私は魔物の命を奪つた。奪つてしまつた。

私が、自分の意思で火の魔術を使用して命を奪つてしまつた。

「よしよし、よく頑張つた。甘えていいよ」

お兄ちゃんはやがて私を抱きしめる。……「うん、甘えていい。いっぱい甘えなせ。罪悪感がヤバイから、もつと、もつと甘えさせて」。

『あ、うとお兄ちゃんに抱きつべ。甘えるために、徹底的に抱きつべ。

「おつと、まだいたのか
「ふえ?」

まだいた? つい、お兄ちゃんの見ている方向を見ると、その魔物には穴が開いて、そこから血がピューピューと溢れていた。

グロテスク。

曰く、水を結集させて魔物に放つたとのこと。グロテスクなことをこいつに微笑みながら言わないで!

「や、お父さんたちと合流しようか」

「うん」

魔物退治なんでもう一度と来なくていいよ。怖いからいいよ。今はとにかく甘えたい。

「おかーさん！」

「ヒーテルファイア！ よく頑張ったわ！」

お母さんたちと合流した瞬間に、私はカーヴお兄ちゃんの腕から抜け出してお母さんに飛びついた。

怖かったよう、怖かったよう。……私、命を奪っちゃったよ。

「うう、怖かったね、怖かったよね。でも、童神としての責務は…」

お母さんが何か言つてる。……でも、お母さんに抱かれている気持ちよさと、精神的、肉体的疲労に襲われての私には聞こえないよ。だって、だってね？ もう、眠たいの……。

「いいよ、眠りなさい。疲れたんだろう、休みなさい」

お父さんがそう言いながら頭を撫でてくれる。気持ちいい、優しい。

おやすみなさい。

い。

「…………が、…………ア？…………いい

「…………しつ。…………る…………らさわ…………な」

「…………ん…………？」

「ああ、起にしてしまったか、すまないヒーテルファイア」

あれ？ お父さんとお母さん……と誰？

「初めまして、エーデルフイア。私はユフィネス。あなたのお父さんの妹」

「あ、起きたのエーデルフイア？ 大丈夫？」

「おにーちゃん、おねーちゃん！」

「ユフィー、自己紹介したの？」

「したした。ティア、あんた、サーファのときと『いつ』と同じ」「だつて、ユフィーってそういうの面倒くさがりそうなんだもん」「あーもう。じゃああんたたちの前でもう一回するから。エーデルフイア、私はユフィネス。あの子達みたいにユフィーって呼んでね」「ゆふいー、さん？」

「ユフィー。さんはいらぬ」

……やつと寝惚けてた頭が覚めて来た。つまり、この人が、このさん付けを拒む人がお父さんの妹で、私たちのおばさんということか。……お父さんたち曰く、怖がりの。

「あー！ 可愛い、可愛すぎるー。やつぱり子供つていいよねー」

「なら、カイルスともつと頑張れよ。頑張れば出来るだろ？」

「頑張ってるんだけど、生まれないんだよねー」

ユフィーはそう言いながら私を抱いて、撫でてを繰り返している。これを見ていると、本当に子供が好きなんだということは分かるのだが、ちょっと、干渉がきつづかないか？

あ、カイルスって言うのはユフィーの旦那さん、つまり、おじさんの姉前らしいです。

「どうやつたら義姉さんみたいにそんなに生めるの？ 私も子供欲しいー。ねー、カイルスう

「おいおい、義兄さんの前でそんな甘えた目で見ないでくれよ……。抑えられないじゃないか」

！？！？ カイルスさんは甘えた声で見つめてきたユフィーを押し倒した。見ない見ない。見てはいけない。」ついづのは退室しなくては……。

「はい、おいでエーデルファイア。このバカ夫婦の邪魔は止めておこうな

「あー、『メンねー。しばらく一人っきりにしてねー』

ユフィーはニコニコと微笑みながら言い、それを見たお父さんは溜め息をつき、私を抱き上げてさっきの部屋から出る。そのあとにユフィーの甘い声が聞こえたのは、聞こえなかつたことにした。
……てか、ここはどこ？ 眠っている間に結構移動していたようだ。さつき魔物を退治した森が全く見えない。つまり、町も結構違うのか？

「とりあえず、夜まではあの一人は子作りに専念するだろ？ し、町を見に行くか。そうしよう、エーデルファイア？」

「うん？ 決定権は私？ なら、決まってるじゃないですか。
……子作りという言葉は聞かなかつたことにして。

「うん、行つてみたいー」

「よーし、今日はみんないるから何があつても安全だからな」

「今日はエーデルファイアは頑張つたし、『褒美に、欲しいのがあつたら買つてあげましょ』」

それは嬉しい！ でも、その言葉は否が心にも思い出してしまつ、命を奪つたときのあの感覚を。

あの時、慣れた火の魔術は、そこまで強く念じなくても私の意思

を汲んでくれた。簡単に、あの魔物を燃やした。

そう、私は簡単にあの魔物の命を奪ってしまった、奪えてしまった。

簡単に、容易に命を奪うことが出来る。それが、私がもう人間ではないことを実感させた。

私は、ドラゴン。人間であつたのは遠い過去。

今の私は、人間なんかじゃない。考えを改めなくちゃいけない。

私は、ドラゴン。火の加護を受けた、真っ赤なドラゴンだ。

ドラゴンだから、魔術を使える。

ドラゴンだから、人間を守るために魔物を屠らなくてはならない。

それが、遠い昔にドラゴンと人間がした、契約。

契約は、破られてはならない。

「あー、これはダメだね。コフィー、部屋貸してー」

「へ？」

「今日はもう町なんて行かないほうが多いでしょ。今日はみんなと一緒にいようね」

え？ 何で？ え？ ええ？

「エーデルフィアは優しいね。魔物にあんなに心を痛めることが出来る、いい子だね」

「本当だよ。どうして、そこまで心を痛めることが出来るのか、私は分かんない。私は、そこまで思えない」

「こればかりは、生まれ持つものだろうな。確かにエーデルフィアは優しい。だが、その優しさがこの子を苦しめることがあるだろ

う。お父さんは、それを思つと一番辛い

「お母さんもやつ。優しすぎるの、この子は。魔物は敵、倒すべきモノ。それでいいのに、この子の中では違うから」

確かに、そういう認識が一番やりやすいんだらうね。でも、無理なんだ。どうしても、魔物も生きているのだからと、理性（？）が働いてしまう。

殺すことを、躊躇つてしまふんだ。

本能は殺せと訴える。でも、私の中の心は、生きてこらのだから殺してはいけないと訴えてくるんだ。

「だから、エーデルフィア。君はずっと俺たちと一緒にいる。俺たちが守る、何があつても」

「守る。絶対に、私たちが守るから」

「俺たちの可愛い妹。小さな小さな、最年少のドランゴン」

君は、一生守つてあげる。守つてみせる。

だから、一緒に生きていよう？ 離れないでいよう？

失いたくない、なら、離さなければいい。だから、一緒にいよう。

俺たちのエーデルフィア。君は一生、俺たちと共に。

初陣です（後書き）

「じまで暗に話にするつもりはなかつたんですが、ね

やつぱり命の尊さとかを考えさせるべきかと
考えていたらこんなに暗い話になりました

次からは明るめに、頑張ります！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690x/>

まさかの転生物語

2011年11月25日21時10分発行